

阪神地方水害記念帳



甲南高等學校々友會編纂

昭和十三年
七月五日の
阪神水害記念帳

は し が き

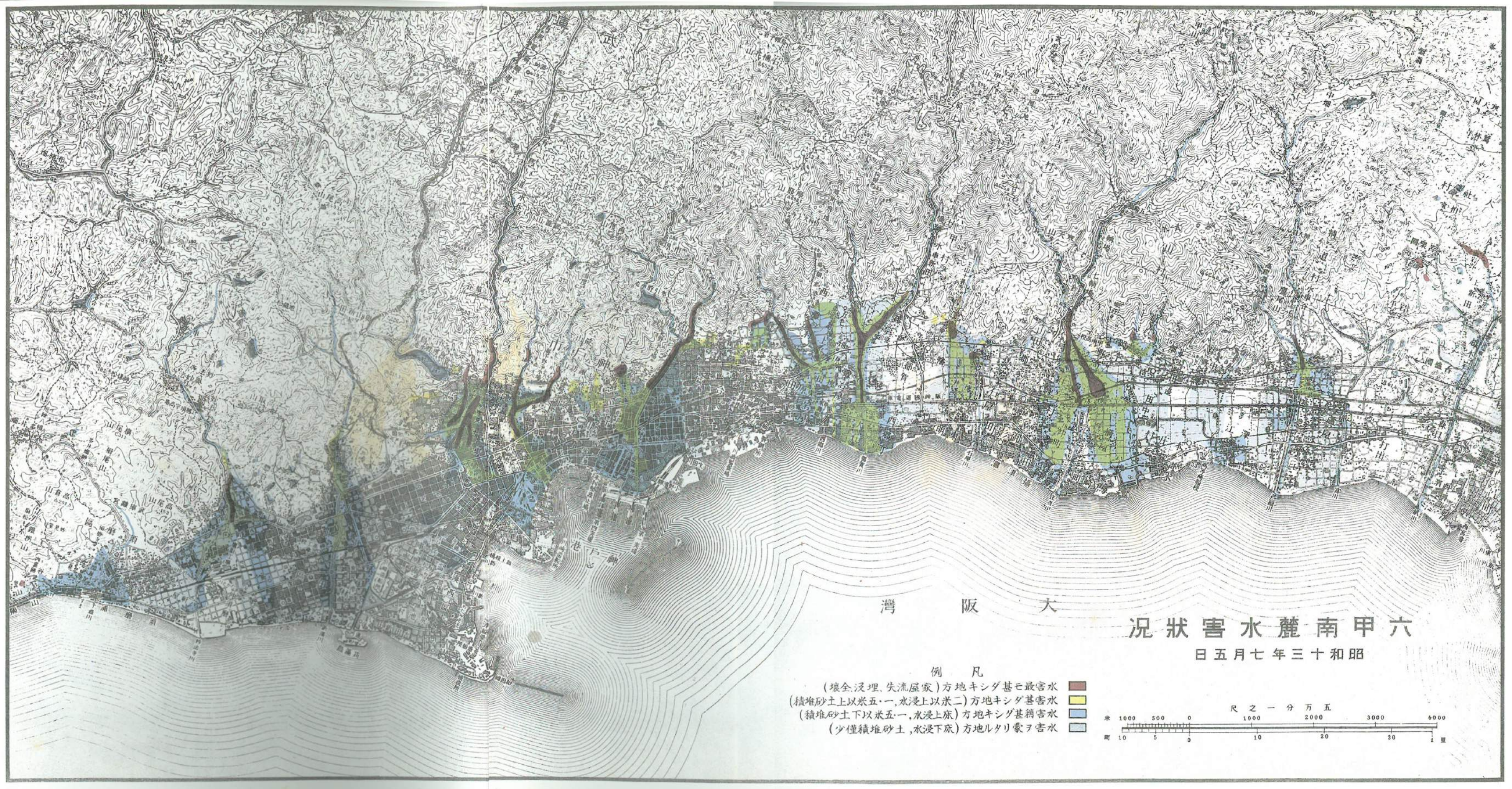
昭和十三年七月五日 阪神間六甲山麓を襲つた水災は 東は芦屋より 西、神戸に至る各河川の沿岸地區を主とするもので 面積こそ狭少であるが 住吉、本山、六甲乃至神戸市の如き 其の被害の深刻さは正に關東大震災にも比すべきで 人命の損傷 巨石の堆積 家屋の埋没等々 普通の洪水に比しては極めて特殊性を有ち 苟も現場を目撃せざる人には想像し得られぬ大惨害であつた。故に其の真相を寫眞を中心に當時の人心興奮せる際の談話を加へ 之を後世へ傳ふことは極めて有意義の事であると 余は直覺したので 災害直後 本校教職員、生徒が 復舊作業に従事する際 之を記念すべく 撮影せしめたと同時に 校外被害地にも「調査班」「寫眞班」を派遣し 危険を冒し材料を蒐集したのであつた。

當時、縣當局は中央の意を奉じてか 此の災禍を新聞等に喧傳することは 事變下、内外 特に支那に悪用さるゝを恐れ 寫眞の撮影を禁じ 又新聞記事を拘束して居たので爲めに 東京を首め全國に亘つて此慘禍を知る者少く 又寫眞撮影等も比較的少かつた 此の間にありて 本校は縣當局の厚意と 生徒の冒險によりて 比較的多數の材料を蒐め得たるは望外の幸であつた。

本冊子の編纂は松井教授を初め 坂田生以下高等科寫眞班 雜誌班の諸子が非常に努力したること、間接には全生徒が 嬉々として復舊に汗を流した爲めである。余は深く本冊子編纂に従事したる諸子の勞を多とすると共に 本冊子が 父兄併に有司の参考ともなり 同時に生徒諸子が成人の後の日の「學園の想出」ともならば本懷である。

昭和十三年十二月

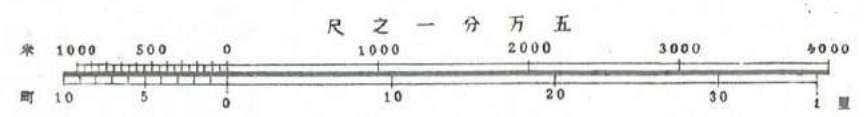
甲南の學園にて

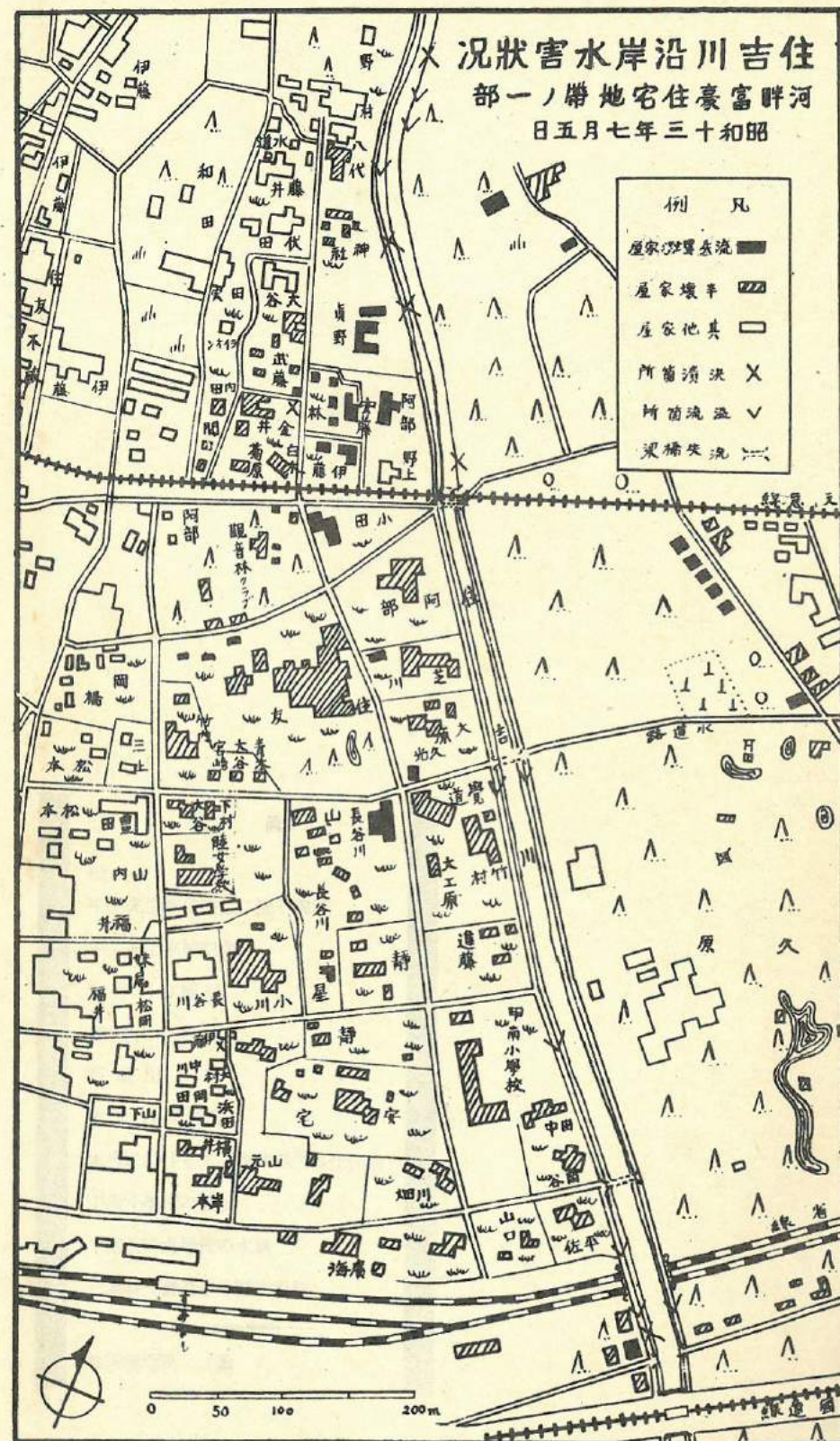


六甲南麓水害状況

昭和三十三年七月五日

- 例 凡
- (壊全、没埋、失流屋家) 方地キシダ甚モ最害水
 - (積堆砂土上以米五・一、水浸上以米二) 方地キシダ甚害水
 - (積堆砂土下以米五・一、水浸上以米二) 方地キシダ甚害水
 - (少僅積堆砂土、水浸下底) 方地ルタリ蒙ヲ害水







平先生胸像附近に滞る濁流



本校校旗

平先生來校紀念



住吉川の惨状 ①





住吉川下流



右 園



住吉川下流



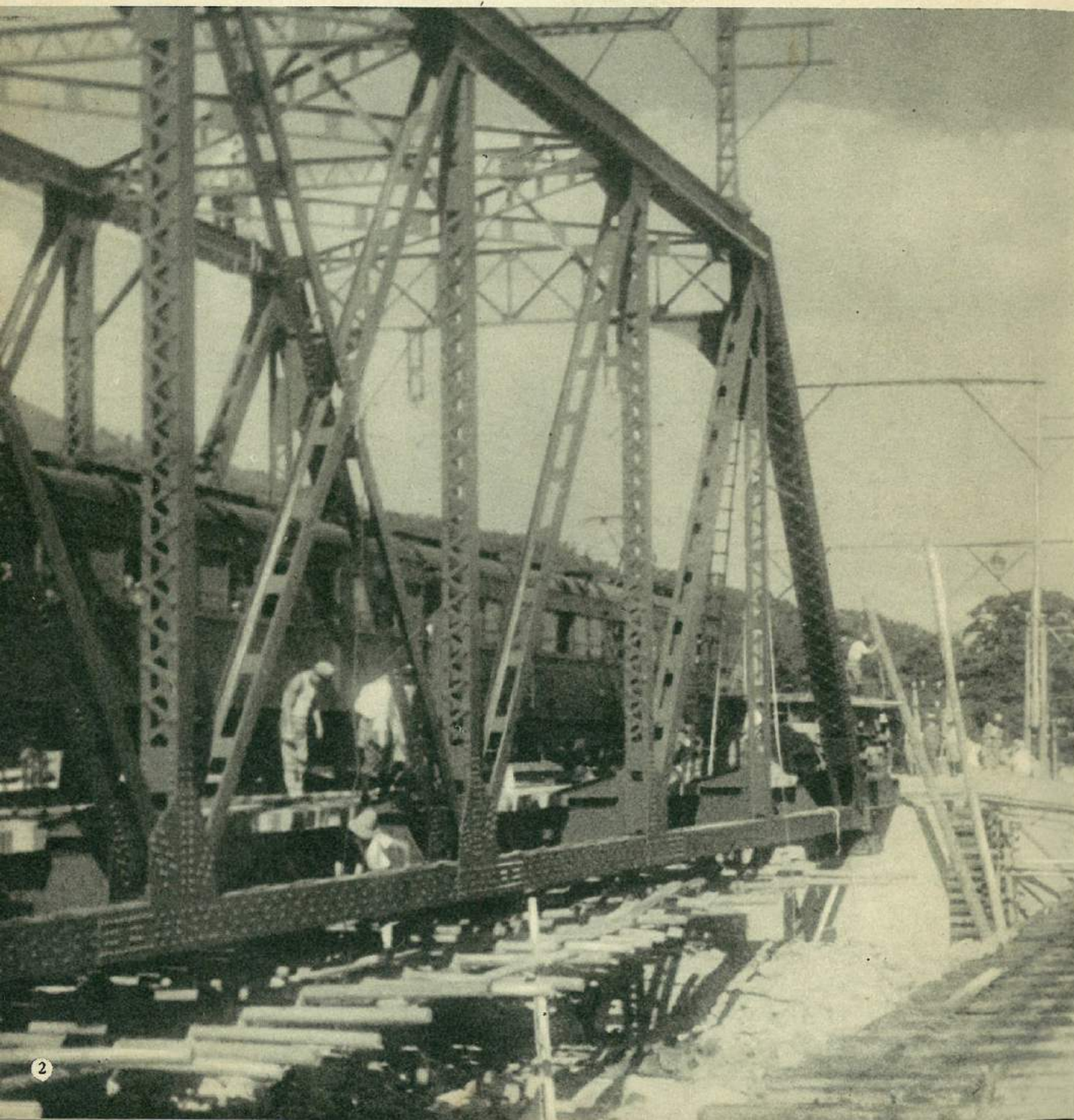
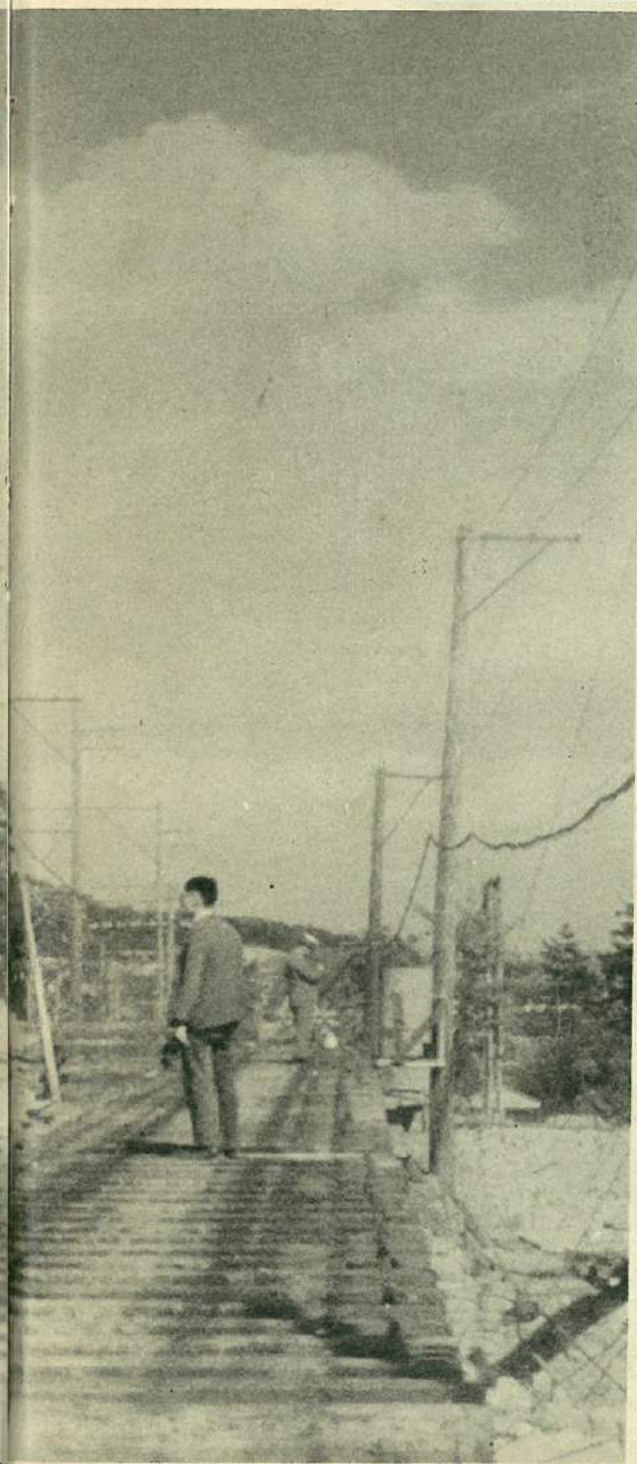
住吉川上流

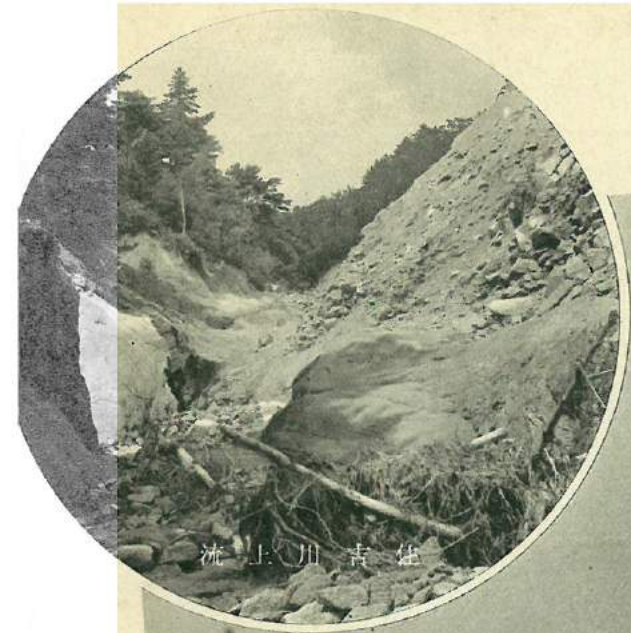


住吉川の惨状 ③

① 住吉川西方下流地帯の
水溜り精酒工場

② 阪急住吉川





流上川吉佐

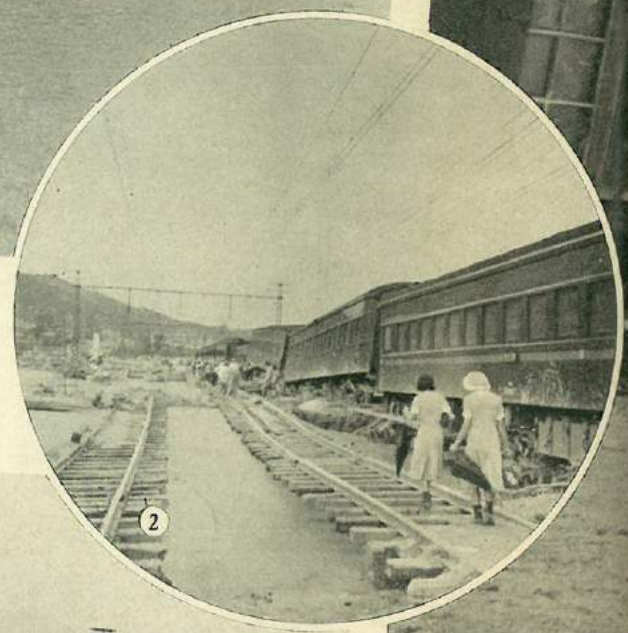


近附車電急阪川吉佐

住吉川の惨状 ④



り寄東崎魚手土の神阪



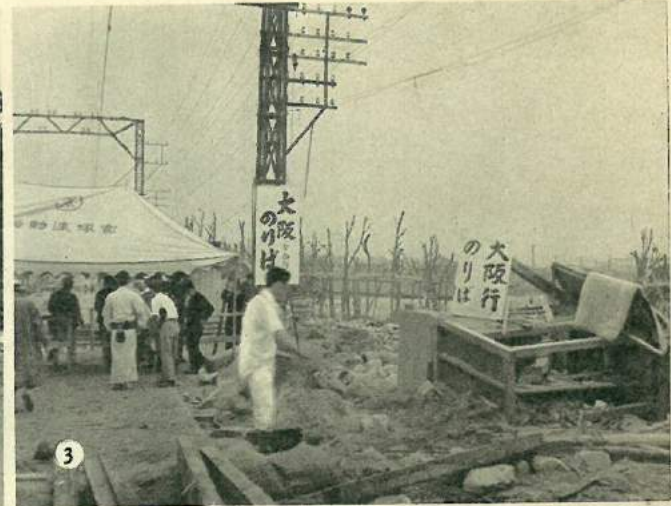
⑤ 住吉川の惨状

- ① 住吉小学校西側
- ② 住吉川の氾濫
水の爲由に浮いてゐる
東海道本線
- ③ 甲南女學校門前の通り
- ④ 住吉川阪急附近

⑥ 住吉川の惨状



- ① 阪急住吉川
- ② 阪急南側住吉川附近
- ③ 甲南高女北側
- ④ 住吉神社南方
- ⑤ 住吉川國道附近の家を貫いた大木
- ⑥ 甲南高女より國道方面を望む
- ⑦ 阪急住吉川

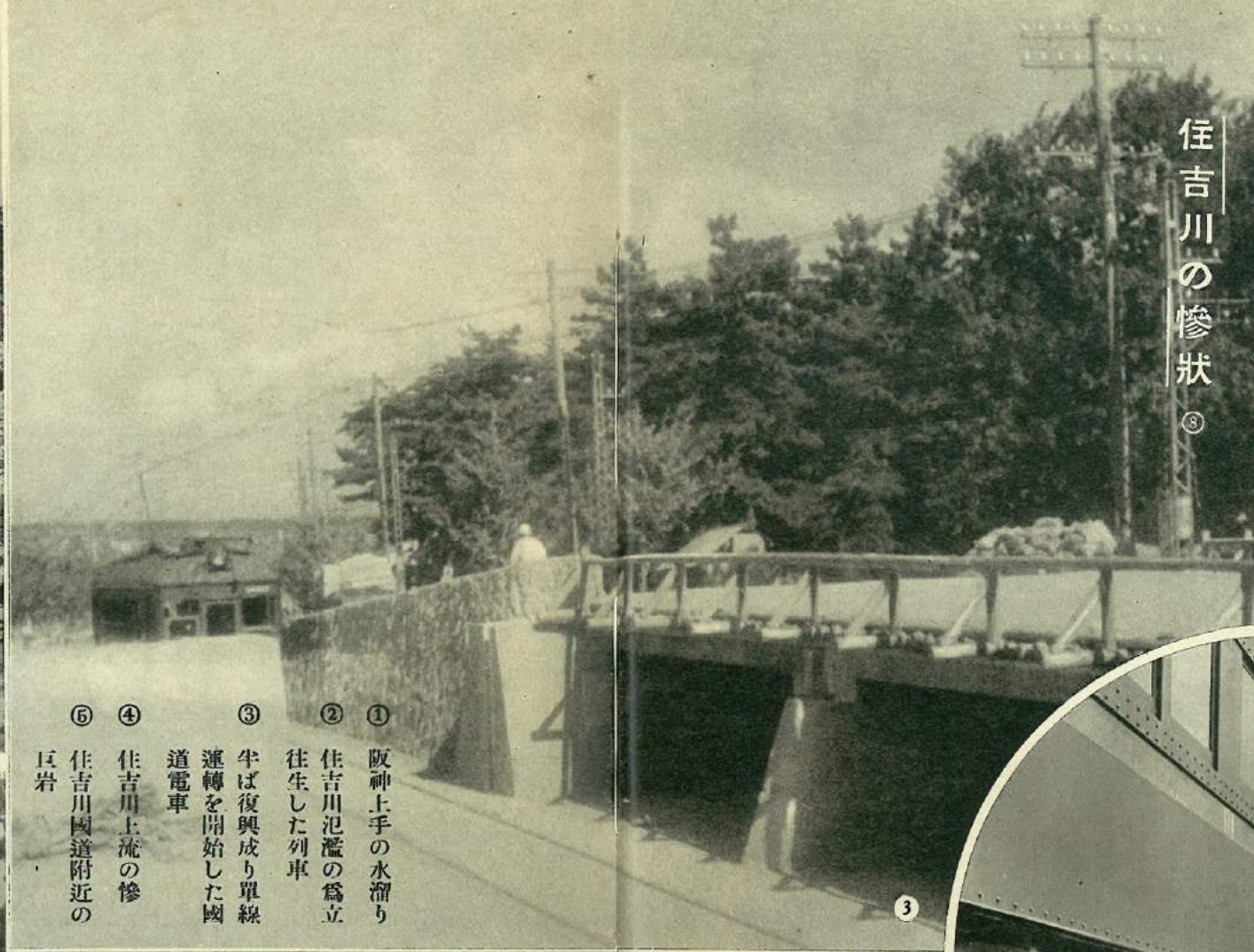
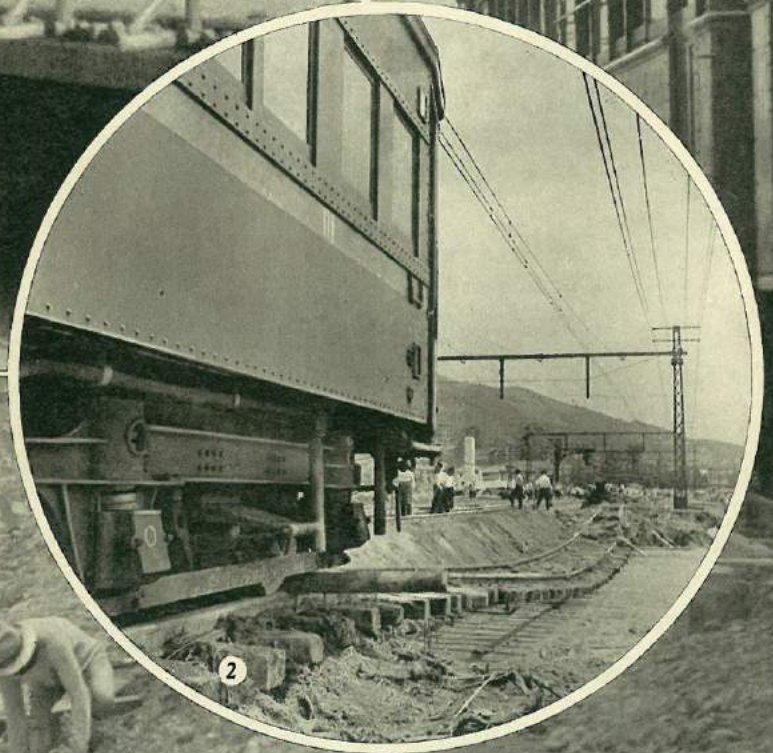
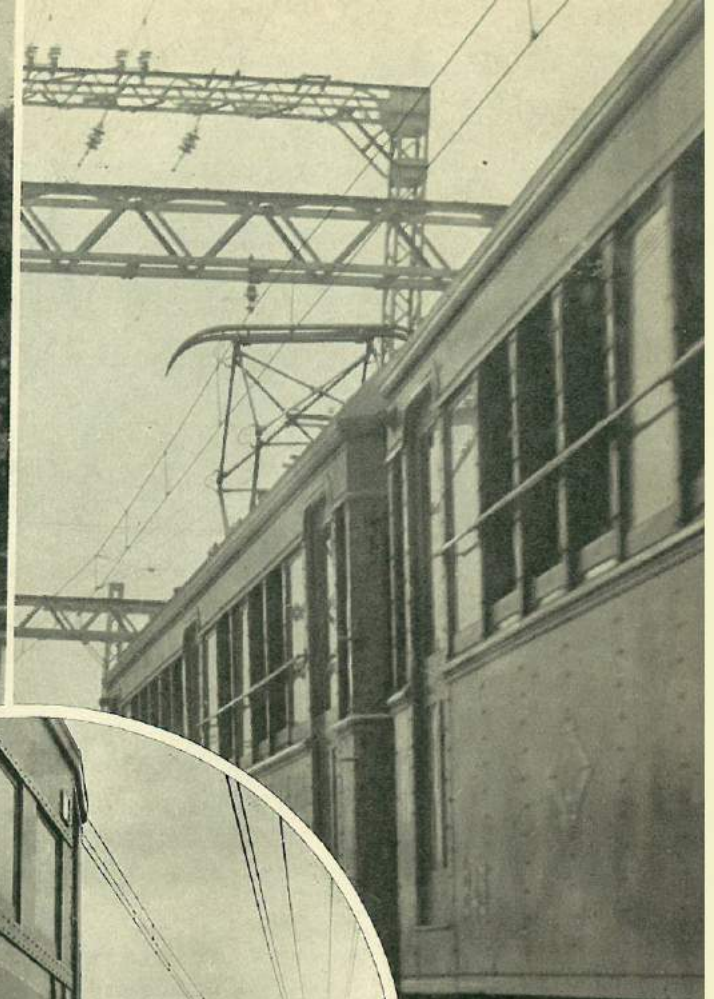


① 住吉川の惨状

- ① 住吉川國道上
- ② 阪急住吉川徒歩連絡
- ③ 省線附近より本山第二
- ④ 小學校を望む
- ⑤ 國道甲南高等女學校前の泥糺



住吉川の惨状 ⑧



- ① 阪神上手の水溜り
- ② 住吉川氾濫の爲立往生した列車
- ③ 半ば復興成り單線運轉を開始した國道電車
- ④ 住吉川上流の惨状
- ⑤ 住吉川國道附近の巨岩



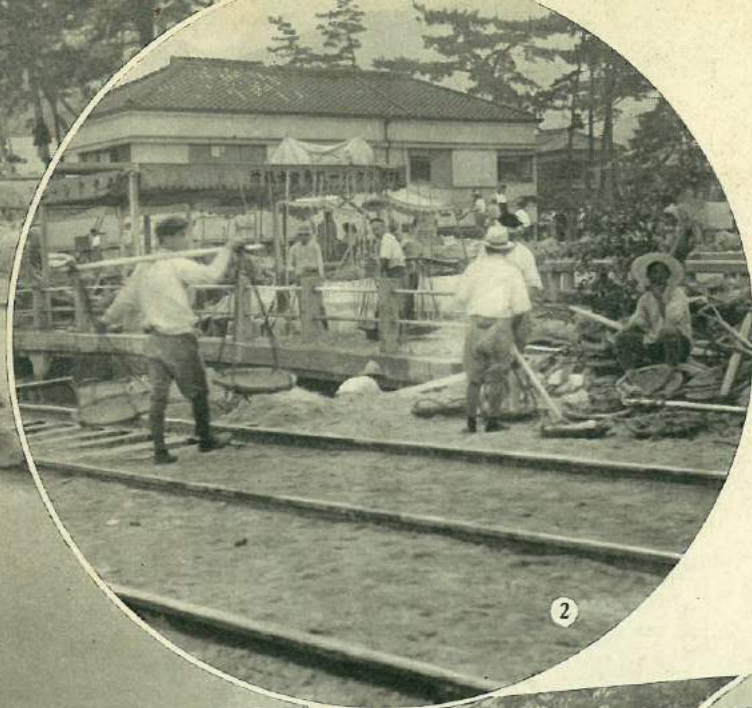
芦屋川の惨禍 ①

- ① 水のため傾いた倉
- ② 省線芦屋驛西二丁
- ③ 城山西側高座川上流



芦屋川の惨禍

- ① 省線芦屋驛西二丁西川邸
(七月十日午前九時二十五分)
- ② 阪急芦屋川の復興作業



2



1

- ③ 芦屋高橋邸前の濁流
(七月五日午後四時)
- ④ 芦屋川の土砂流し
(阪急附近、七月九日午前九時十五分)
- ⑤ 阪急芦屋川
(七月九日午後五時十分)



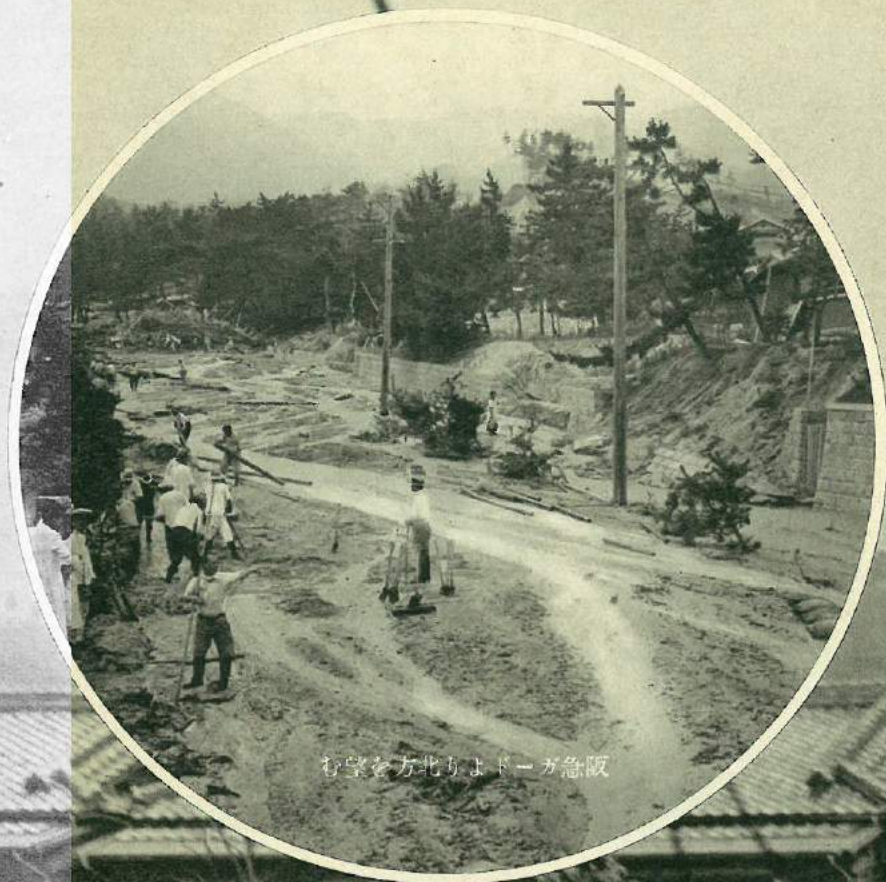
3



4



5



む望を方北りよドーガ急阪



附二の側西川屋石
家民るせ没埋でま



む望を方南りよドーガ急阪



るけ於に所箇潰決防堤
理修の民民



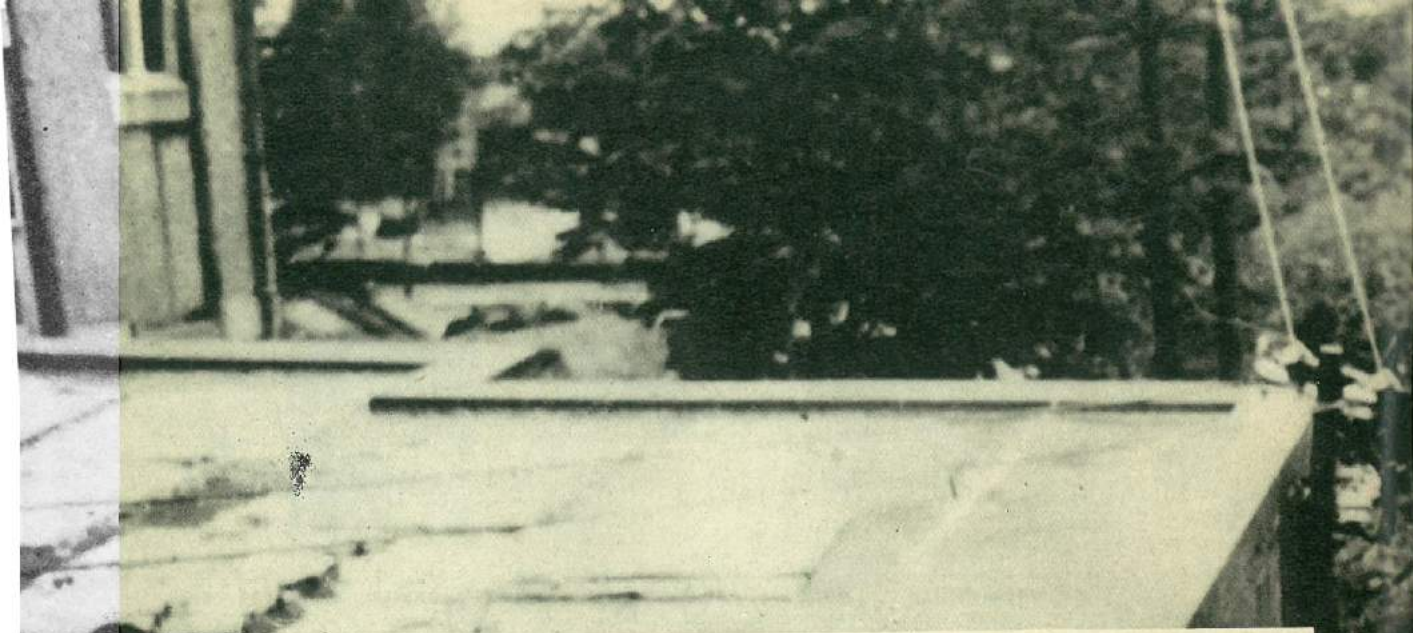
上 同



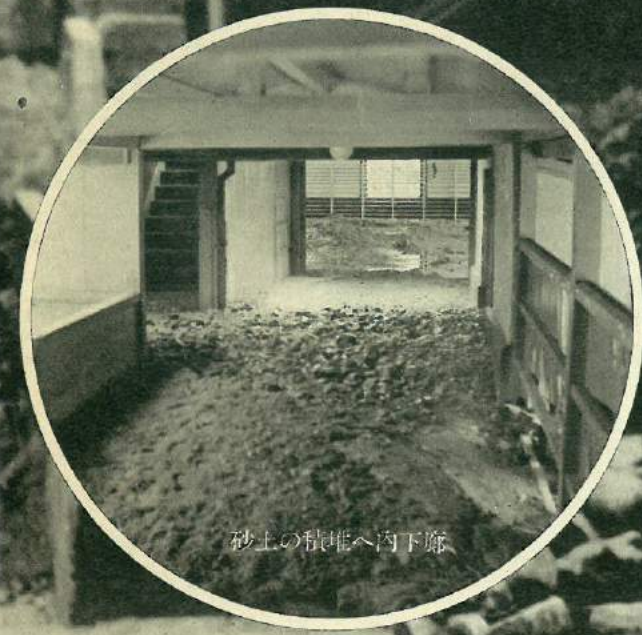
両側の道を川となして残るは石屋川



側西川屋石



跡の入流流濁の御北場動連

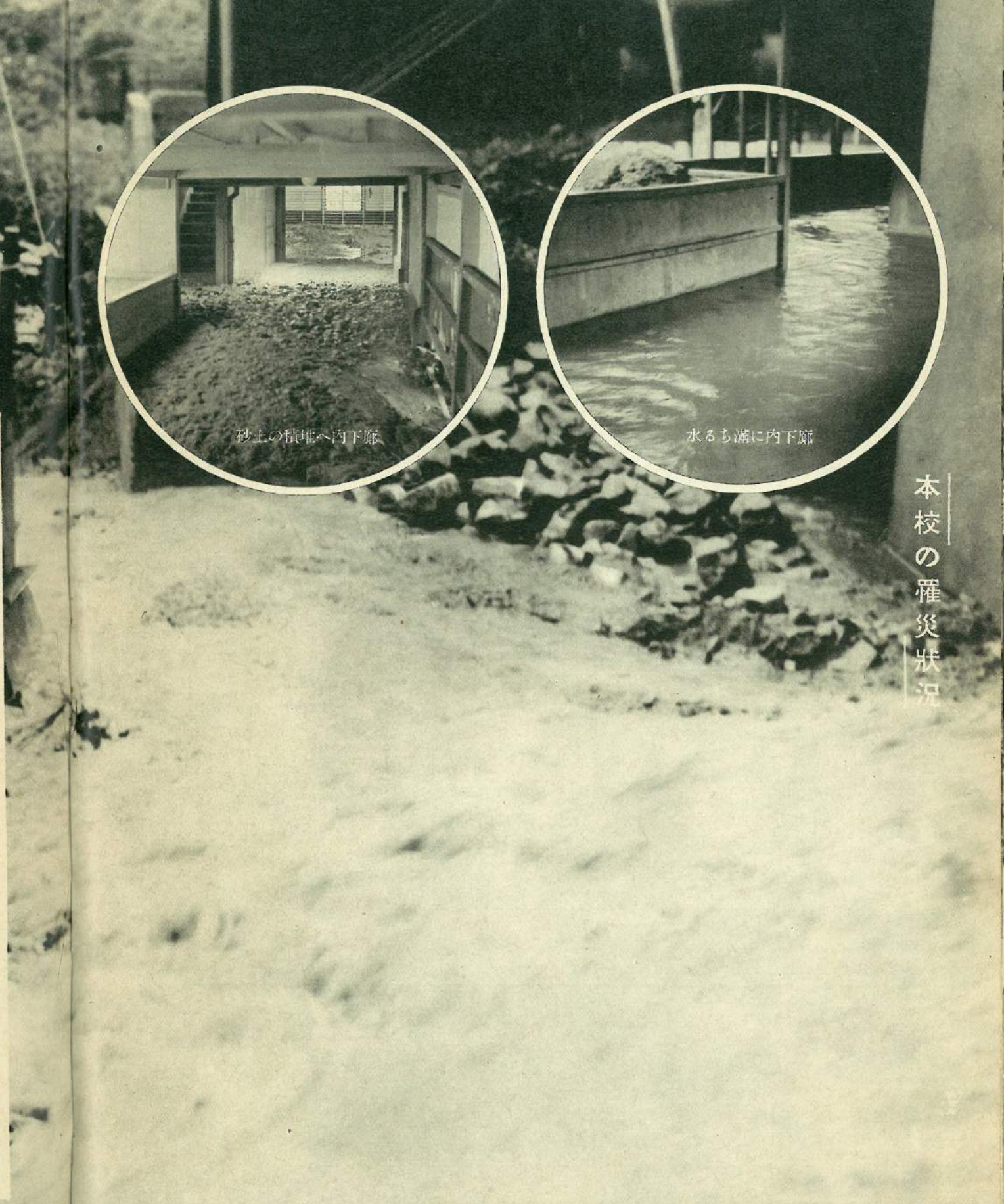


砂上の積堆へ内下廊



水るち満に内下廊

本校の罹災状況

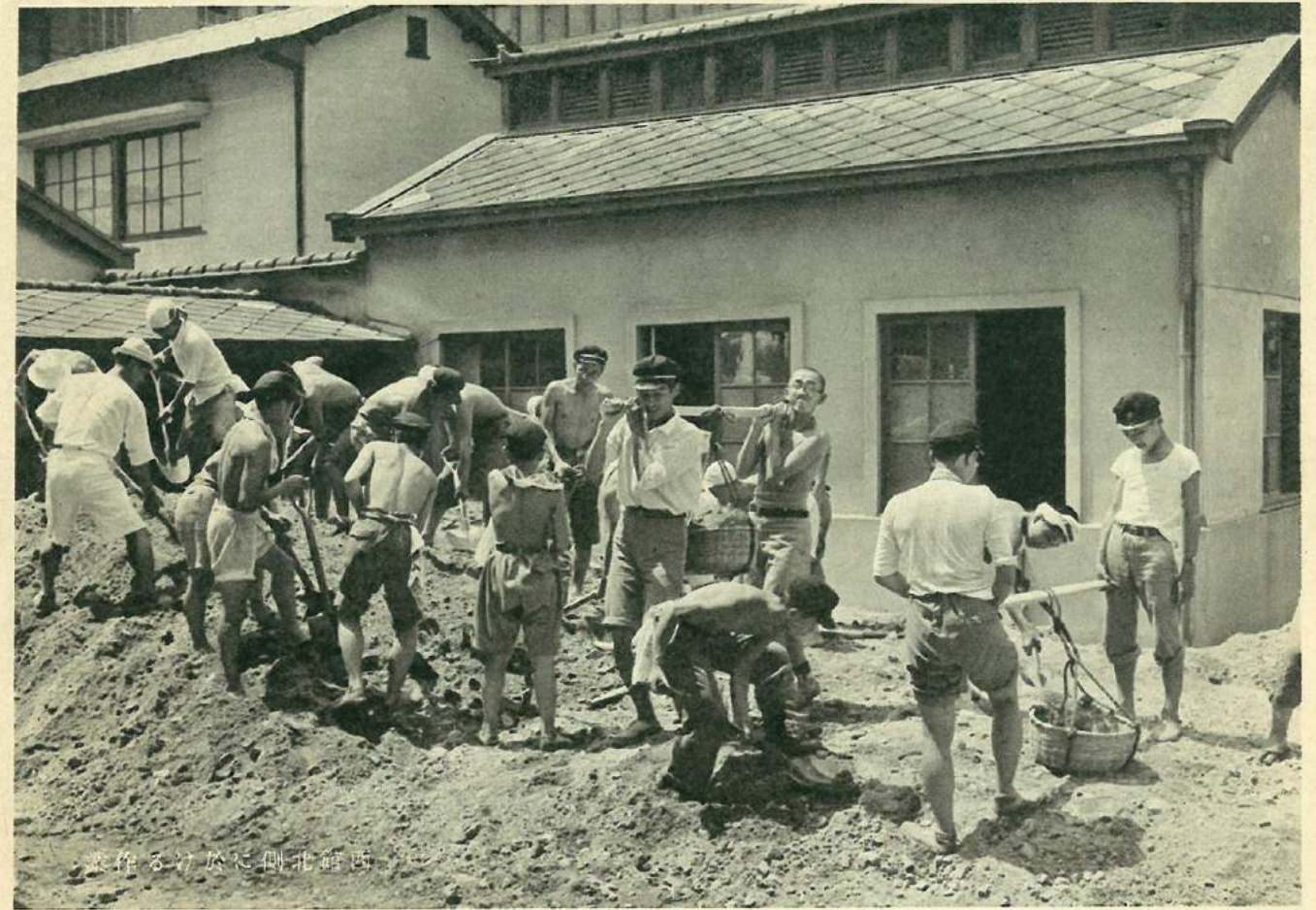


流濁るす入流りよ隅西北校本

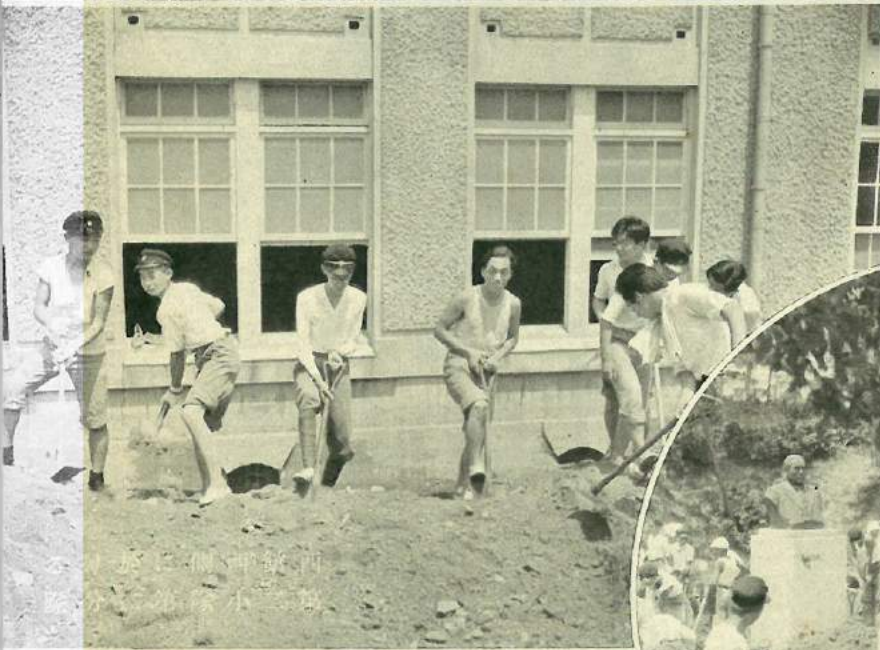
本校に於ける水害

復興勤勞奉仕作業 ①

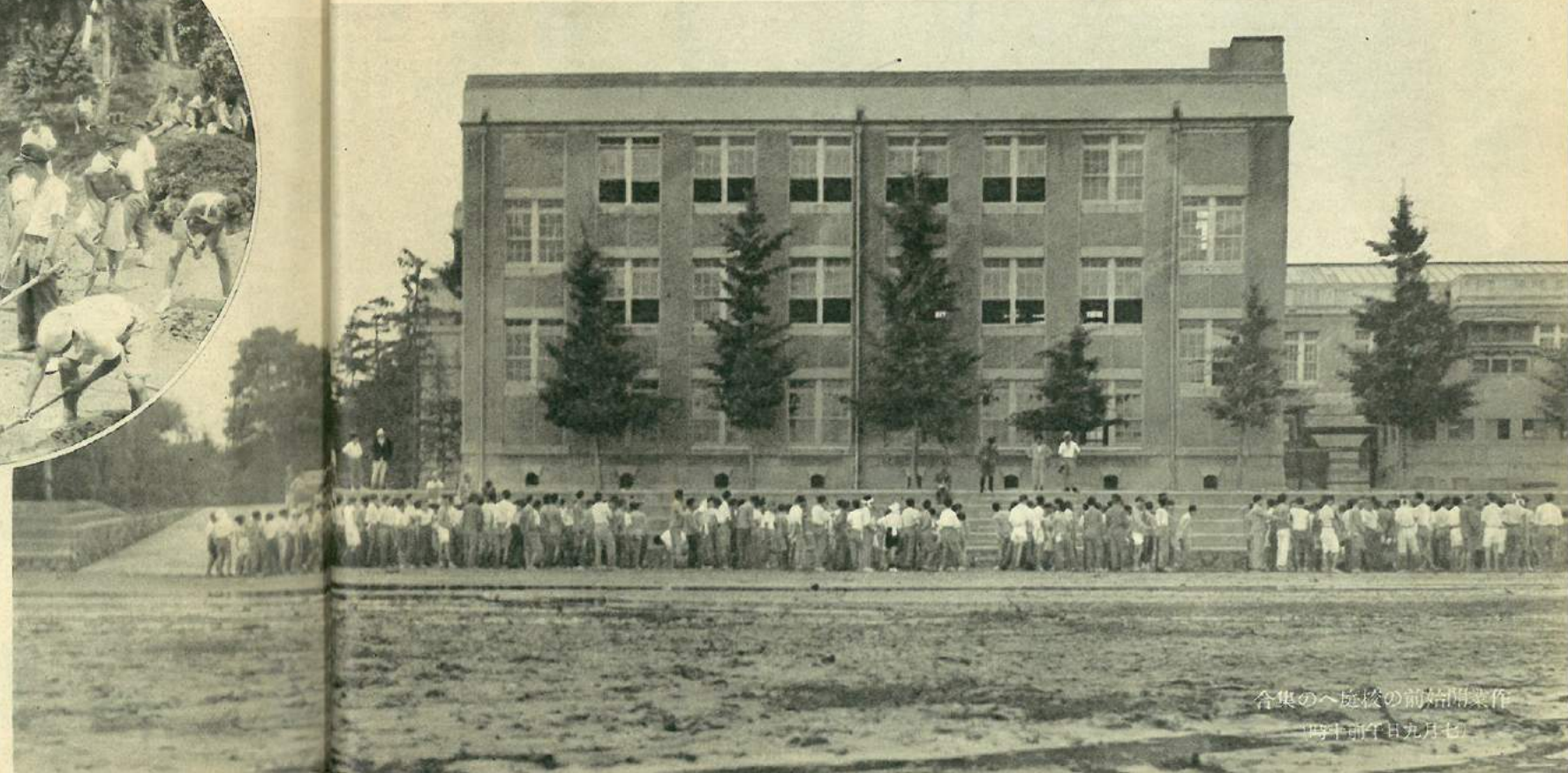
あの恐しい、そして烈しい大水害に見舞はれ、自然の暴威の前に全く打ちのめされながら我等は雄々しく立ち上つた。復興へ、復興へ、我等は邁進したのである



西館北側に於ける作業



運動場に於ける作業



作業開始の校庭へ集合
昭和十一年九月七日

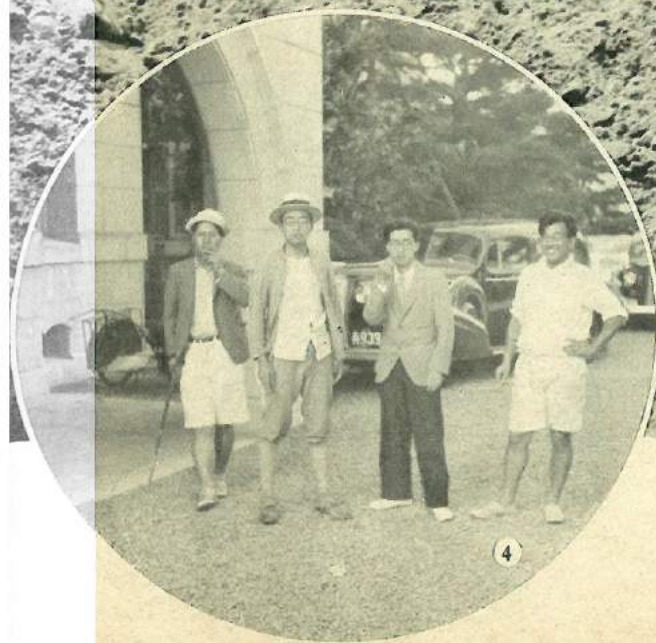
本校に於ける水害
復興勤勞奉仕作業②



本校に於ける水害
復興勤勞奉仕作業 ③



- ① 第二小隊第二分隊（校長を囲んで）
- ② 特別教室前（第三小隊）
- ③ 籠球コート附近（七月十日午前十時）
- ④ 労働後一服して歸途につかんとする先
生方



本校に於ける水害復興勤勞奉仕作業 ④



- ① 御熱心に作業中の藤岡生徒課長
- ② 甲南住宅前
- ③ 寮の前にて（中央は目下御出征中の山崎先生）
- ④ 東館西側中庭にて



本校に於ける水害復興勤勞奉仕作業 ⑤



（生先郷南は前子）隊 小 四 第



員全の隊オナリカ



仕奉のてに宅生先田神

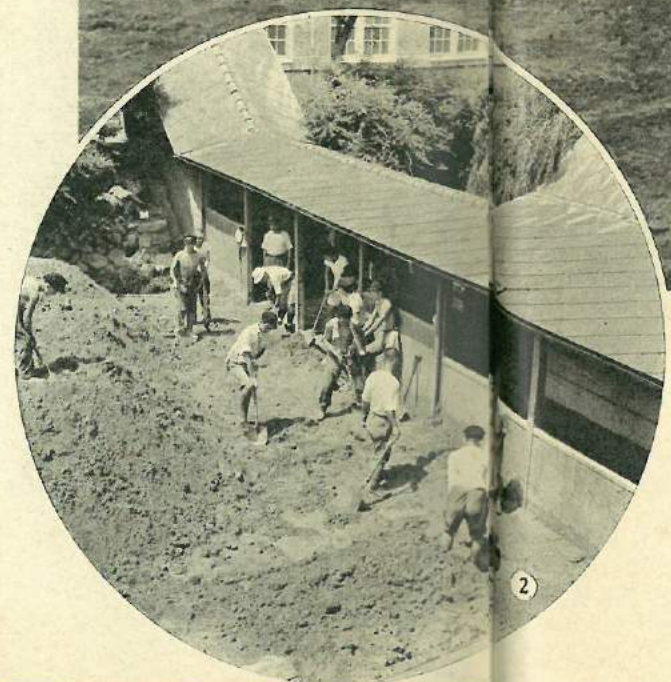
本校に於ける水害復興勤勞奉仕作業 ⑥

- ③ 西館西側の土運び
- ④ 東館西側の作業
- ⑤ 平生先生銅像前にて
- (第一小隊第四分隊)



①

① 運動場に於ける第四
小隊の面々
② 第三小隊第一分隊



②



③



④



⑤



し出が運の砂の内下廊



砂の場動運



出搬の砂の場動運



本校に於ける水害復興勤勞奉仕作業 ⑦

伊藤市町の作業隊員

⑧ 業作仕奉労働の興復害水るけ於に校本

(てに庭中) 隊 小 三 第



隊分二第隊小三第

第三小隊第四分隊



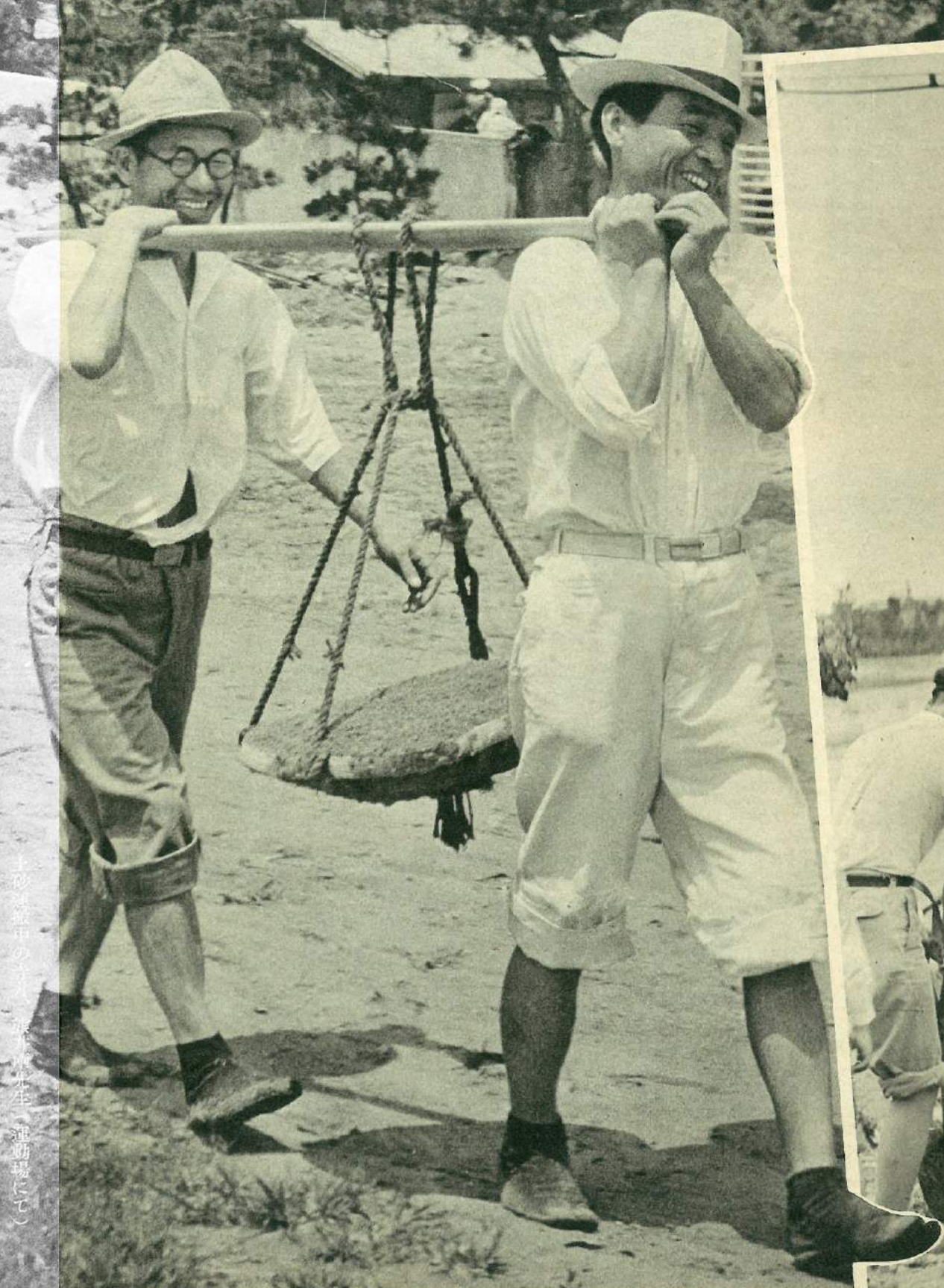
寮の荷物運び



第一小隊第三分隊

本校に於ける水害
復興勤勞奉仕作業⑨

運動場東北隅に於ける復興會議
（左より）水害復元委員長、伊藤校長、伊藤校長





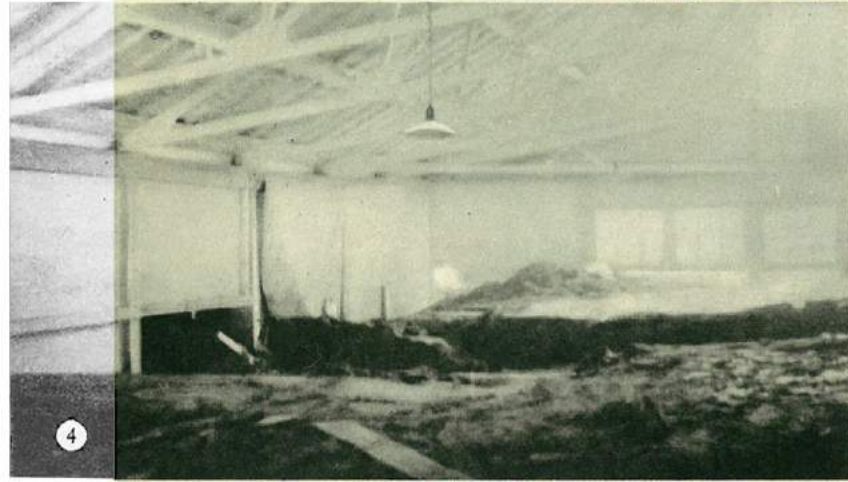
① 罹災状況視察中の理事の方々
 (右より村山、伊藤、平生の各理事及堤校長)
 ② 土砂に埋れた同小學校

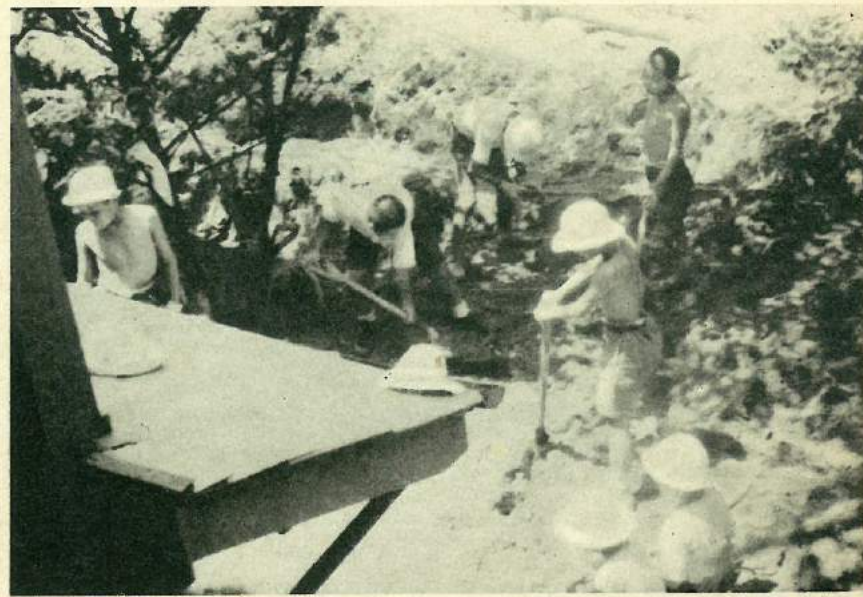
甲南小學校の慘狀 ①

③ 屋根だけ見える講堂
 ④ 講堂内に推積した砂

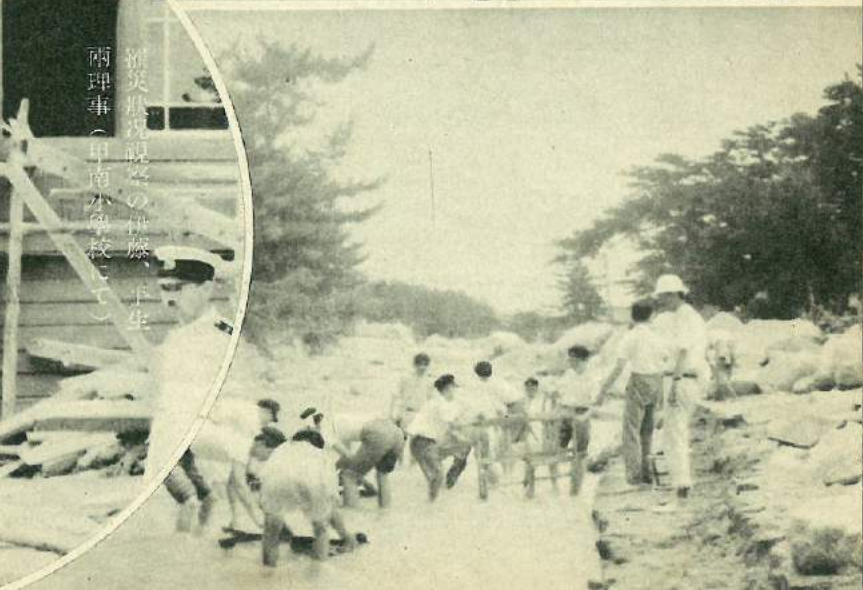
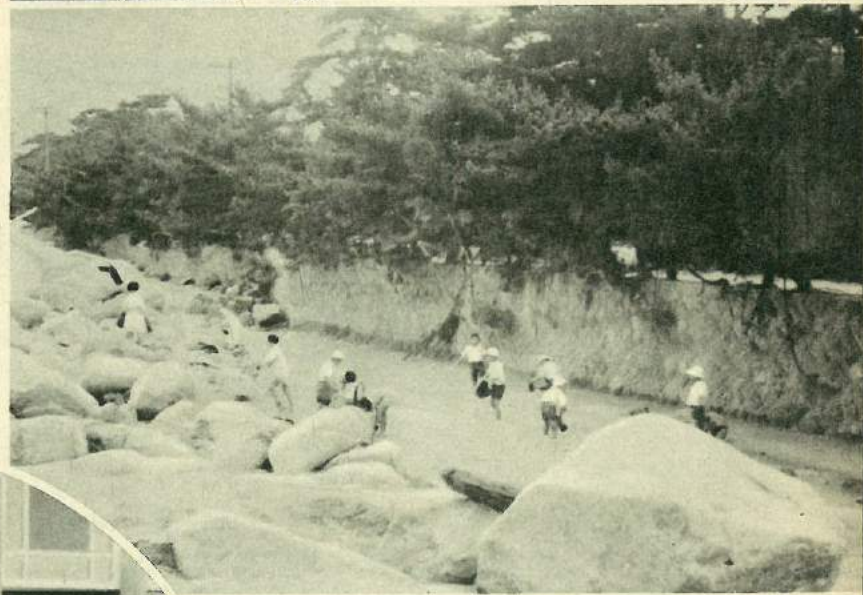


⑤ 無慘に砂壊された校舎
 ⑥ 同校生徒の勤勞作業





甲南小學校に於ける同校児童の作業



甲南小學校の慘狀 ②

破壊された甲南小學校の建物

同校の罹災のため土砂に埋れた机や椅子等を洗ふ本校生徒達（本校生徒中甲南小學校出身者は微力ながら同校の復興に力をいたしたのである）



罹災児童の慰問、上生
兩理事（甲南小學校にて）



力死に助救の強災校同
在巡千金たれきつを
先荒田村と（左しつ向）



同校に於ける罹災者の
死體發掘作業

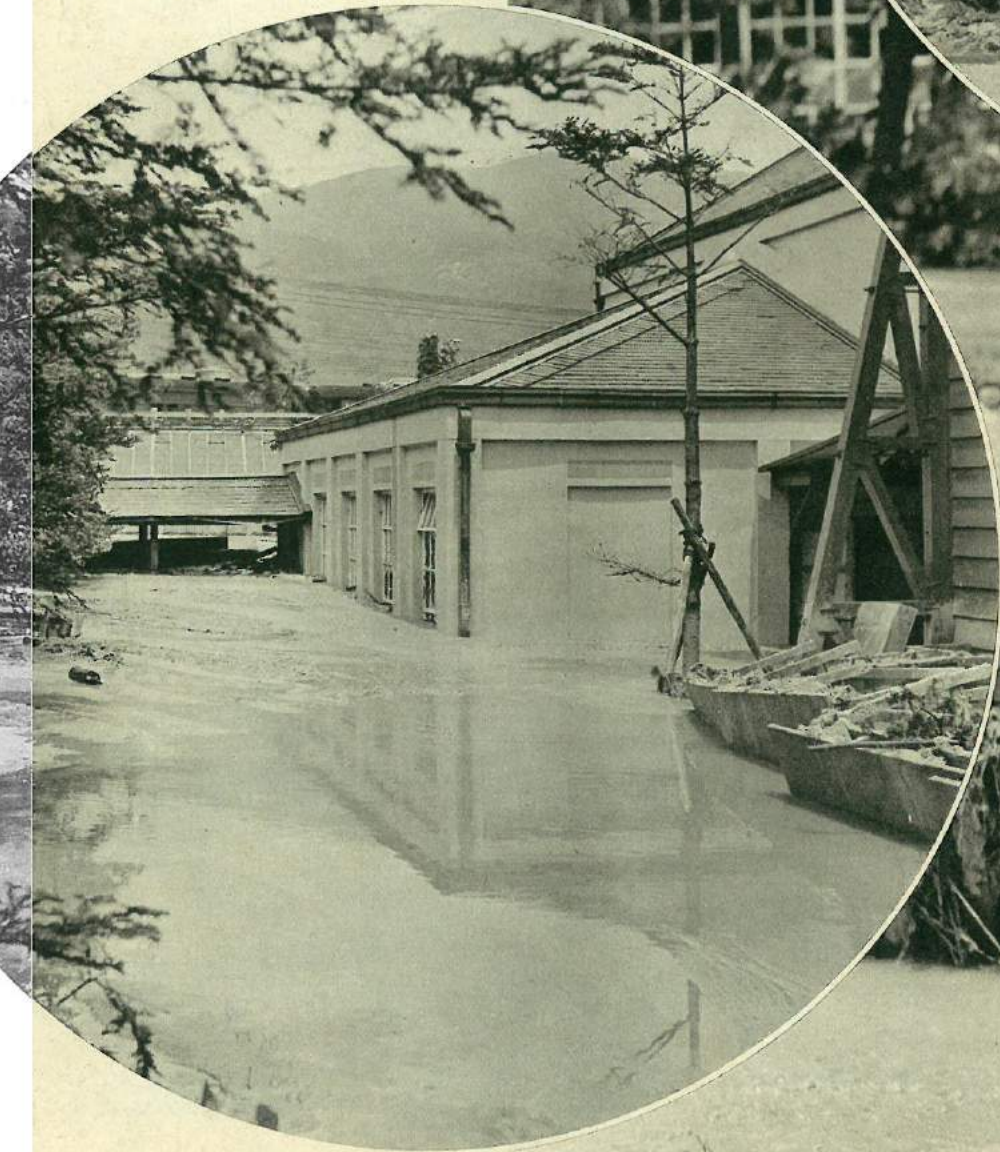
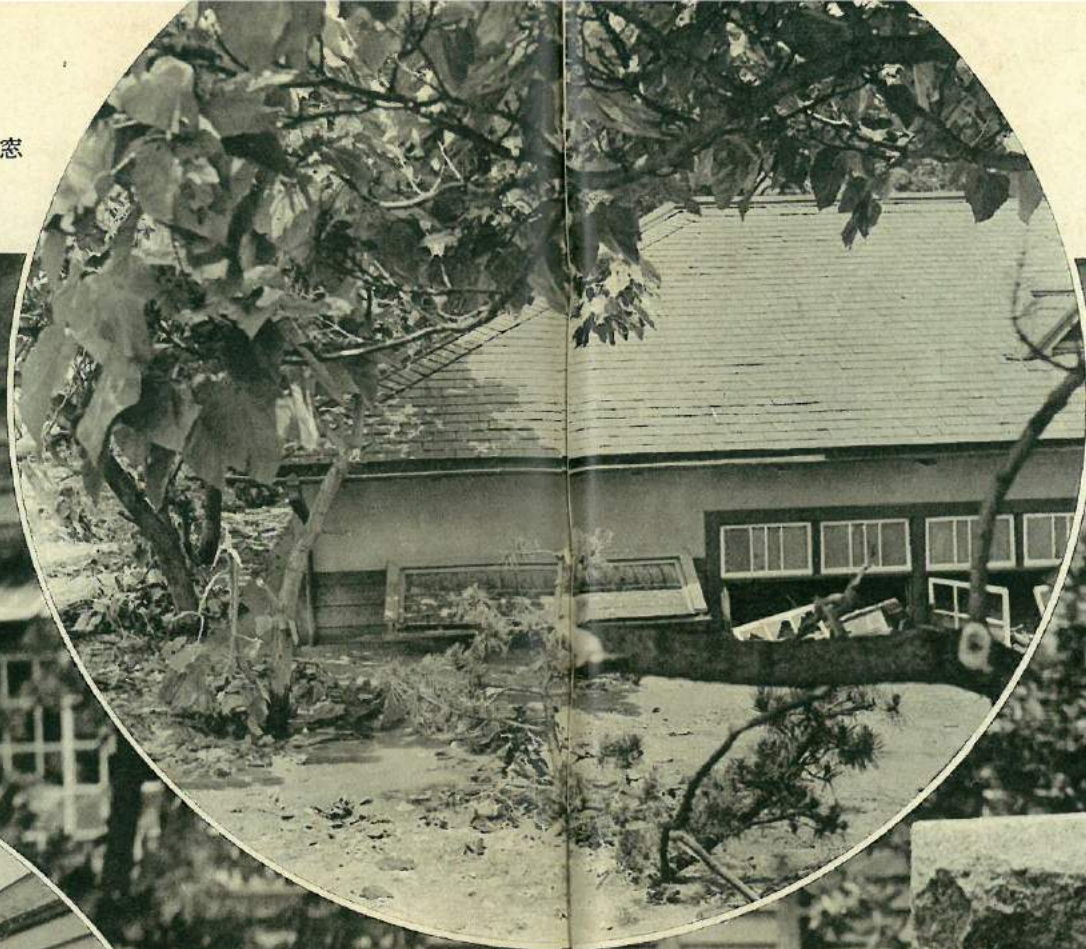
① 禍水の校學女等高南甲

門本の校同たし没埋に砂土

命校たつま埋でま窓



水濁たるでつ滞くら長に内校



場動運校同たし化と野荒

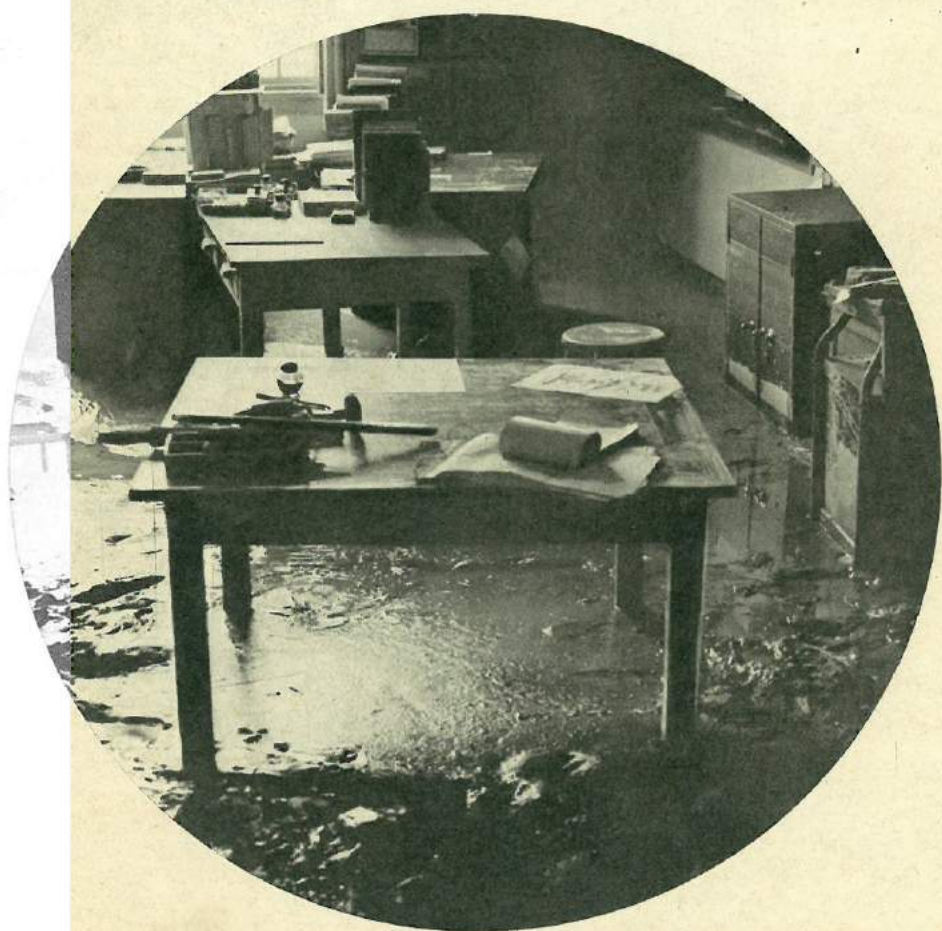


(てに校同) 仕奉労働興復の徒生校同



② 禍水の校學女等高南甲

!!さ惨無の内堂講校同



景狀一の内舎々校同る話物を狀慘

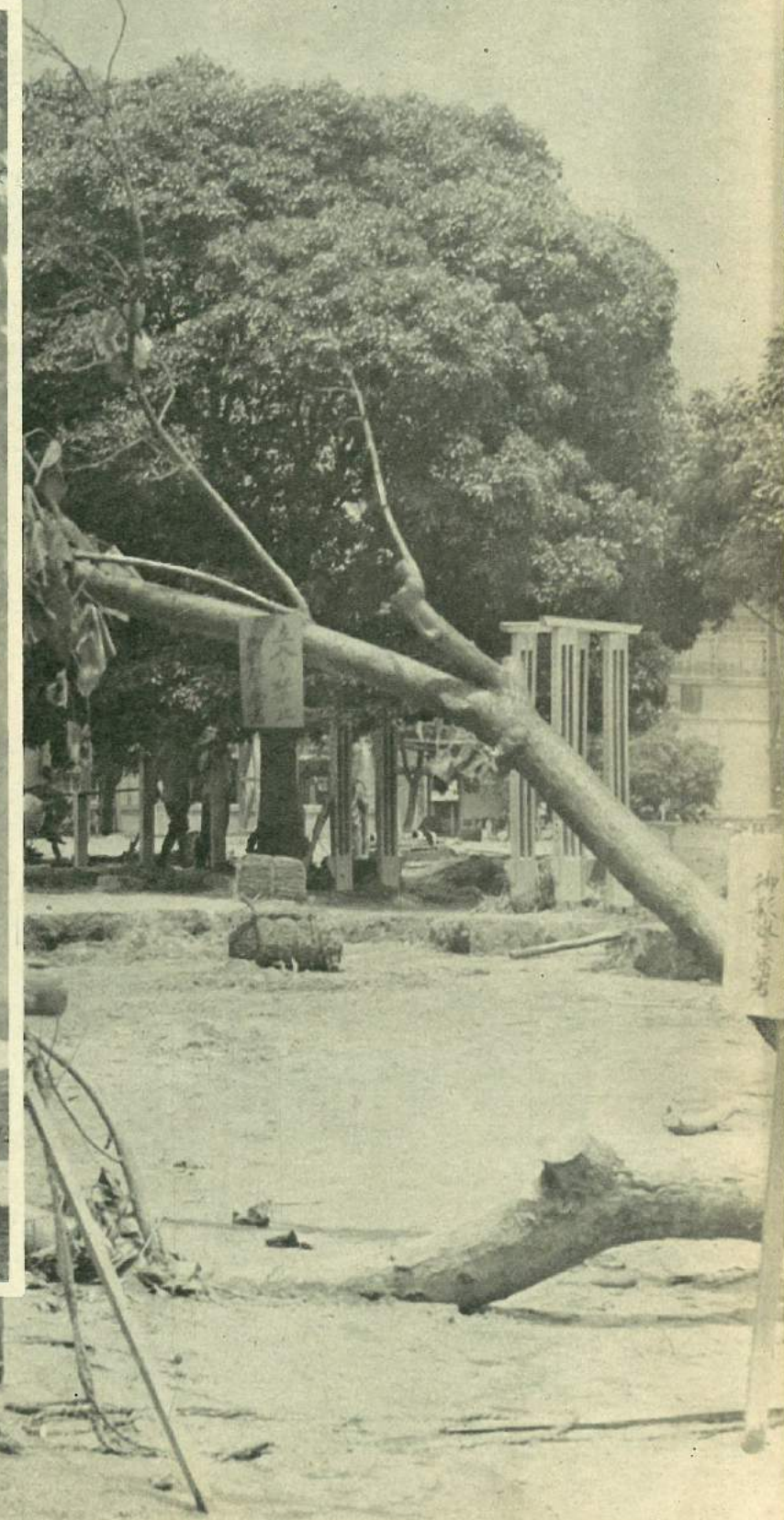
水禍にめげず鋭後女性の心意氣を示す同校生徒の土砂運び





原藤、本杉、木高、關、村奥、りよ右列前
川品、村西、崎大、山葛、見逸、りよ右列後
井奥、橋高、尾村、田坂

同一員委編輯に並員會究研肅光たし力盡に影障眞為



目次

想ひ出づるまゝに…………… 學校長 保々 隆 矣

慘禍の實相 (住吉川を中心として)…………… 一

住吉川…………… 一

(一) 被害に對する概観…………… 一

(二) 上流中流の被害實情…………… 三

(三) 下流の被害狀況…………… 四

芦屋川と高座川…………… 六

(一) 芦屋川の氾濫に依る被害狀況大要…………… 六

(二) 芦屋川上流被害狀況…………… 七

(三) 水車谷及河原毛附近…………… 七

(四) 高座川の被害狀況…………… 七

(五) 城山橋附近の被害狀況…………… 八

(六) 阪神國道附近及其以南海岸防潮堤間の被害狀況…………… 八

甲南學園の罹災…………… 九

本校…………… 九

(一) 當日の模様…………… 九

(二) 處置…………… 一〇

(三) 復興作業…………… 一〇

(四) 理事及び生徒父兄の水害狀況並びに感想報告…………… 一一

理事 伊藤忠兵衛氏…………… 一一

父兄 廣海三郎氏…………… 一二

靜 馨氏…………… 一二

芝川 まき氏…………… 一三

國府 精一氏…………… 一四

田所嘉四郎氏…………… 一五

阿部 藤造氏…………… 一五

水田 美繼氏…………… 一六

岡本 弘馬氏…………… 一六

田中 二郎氏…………… 一六

若林 金吾氏…………… 一七

(五) 本校尋常科生の水害に對する作文…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害…………… 一七

水害にさらされた附近諸學校生徒諸君の感想文

あの水を思ふ…………… 神戸高等女學院高等女學部四年 池尻 高子…………… 一六

水害に就て…………… 本山第二尋常小學校五年 福家 裕…………… 一六

水害回顧…………… 灘中學校四年 鷺見 敏郎…………… 一六

恐しい水害…………… 神戸市川中尋常小學校六年 木下 妙子…………… 一六

水禍の思ひ出…………… 本山第一尋常小學校高二女 高橋 ツギ…………… 一六

大水害を見て…………… 縣立工業應化科五年 金本 鶴…………… 一六

水害の思出…………… 魚崎尋常小學校尋六 吉野 柳…………… 一六

水禍所感…………… 神戸三中五年 永福 靖…………… 一六

この度の水害に就て…………… 神戸市成徳小學校 澤田 成夫…………… 一六

大水のこと…………… 神戸市小野柄尋常小學校二年 大野 政子…………… 一六

水害の思ひ出…………… 親和高等女學校五年 青條 麗美…………… 一六

水害の印象…………… 本山第二尋常小學校六年 高井 進…………… 一六

編輯後記…………… 一七

甲南高等女學校…………… 一七

(四) 御影響署署空區駐在所金子巡査談…………… 一七

水が い…………… 二年 弘世助一郎…………… 一七

天 災…………… 六年 古川 マリ…………… 一七

(三) 同校兒童の作文…………… 一七

同附屬幼稚園…………… 一七

同校兒童の作文…………… 一七

同校兒童の作文…………… 一七

同校兒童の作文…………… 一七

同校兒童の作文…………… 一七

同校兒童の作文…………… 一七

同校兒童の作文…………… 一七

同校兒童の作文…………… 一七

同校兒童の作文…………… 一七

想ひ出づるまゝに

學校長 保々隆 矣

昭和十三年五月初より降り初めた雨は連月、連日 晴天とは無く、人々を憂鬱にした。

「今年は何と言ふ年でせうネー、毎日雨ばかりでネー」と言ふ會話が到る處に交換されて居た。

此の會話が終に阪神地方にあつては、古今未曾有の六甲山南の大水災となつたのである。

當時、私は甲南に赴任直後で、南海線濱寺から通つて居つたので、自身一箇としては被害は皆無であつたが、學校、特に父兄關係者には絶大の慘事もある、又生徒達にも終生忘れられぬ仕事もあつたので、私はこれ等のことについて「想出記」を茲に綴ることも亦無要ではあるまい。

當日、私は大阪から阪急で豪雨の中を岡本驛近くに来ると電車は停まつた。車掌は「信號待ち」だと言ふので安心して居たが、五分、十分経つても一向に動かない。篠つく雨で山から落つる水は瀧の如くで、乗客一同不安な氣で窓外をボン

ヤリ眺めて居る。

スルト三十分も経つと、電車は後進して片屋驛に止まつた。雨は益々烈しくなる。不安は募る、二人降り三人降りて、片屋川の岸に濡れながら見に出る。忽ち全員が降りた。

私もその一人で、見れば川は満水で濁流は滔々と物凄く流れては居るが、猶一尺位の餘裕はあつた。彼是する内に、上流で崖でも崩壊したものと見え、直徑六七寸位の松樹が根こそぎ流れて、阪急鐵橋の三、四間上流のコンクリート橋に懸つた、繼いで戸板、酒桶等種々のものが巨石と共に松と橋脚の基盤目にかゝり初めたので、水は忽ち堰き止められ、急流は左右の護岸を洗つて、溢れ出た、アレ／＼と見る内に驛前の街路は急流となり、次に電車線も奔流と化し北側のプラツト、ホームは孤島の如く、激流に包圍され、其處に残留して居た大阪行の乗客は進退谷まつて顔も蒼白となつた。一阪急の如き高地、山裾ですら、此の濁流であるから、下流の水勢は察せられるが甲南の校舍は高臺であるから、と實は内心何等の不安もなかつた。

然るに午前十一時過になると東より中學生が逃れて來た、これで阪急線路傳ひには大阪に行けることが想察出來たが、學校には地理不案内の當時の私には見當もつかなくつたので、何とかして學校に行かむと片屋川右岸に沿つて數丁行くとハタと尋常科生に出遭つた。而して、生徒から學校の内外が非常な出水であるこ

と、學校には到底行けぬことなど聞かれたので、これ等低學年生中、大阪方面に歸る生徒を保護引率して行かむと決心し拾名を率ひて、阪急路線沿ひに歩き夙川で一同に食事を與へ、北口で一部分と別れ、四名を大阪迄伴つて弟の宅へ歸つたのであつた。

翌六日 早朝起床して 種々と學校の事情を想像しても、高地に在ること故、大事はなかるべしと獨合點して、自働車にて國道を田中迄行きこれより跣足で、急流を涉り漸く十一時に校庭に達した。

萬事は想像の外であり、慘害は絶大であつた。校舎には避難民あり、校長住宅及び寄宿舎は全滅して居ること等を知るを得たので、私は決心した。「久し振に懸命に働かねばならぬ」と先づ校長室に起臥する決心をした。

當時、校内には濁流が猶奔流して居る。寄宿は舎監察母の時宜の處置にて生徒に被害無かつた事を知つた時は、眞に嬉しかつた。

當時、私は想つた。自分は今赴任した計りである。斯かる際若し一人の生徒でも負傷したら、天災とは言へ、眞に由譯がない、然るに神佛の加護によつて人間に被害なかつたのは眞に難有い、此の上は必ず率先して働き、禍を轉じて福となさねばならぬ。

ソコデ、私は、交通が稍整ひ學校に通ふに危険無き迄、臨時休業すべしと考へ

八日迄休校としたが、只寄宿舎及神田前教頭、正田、田上兩教授を首め大小に被害もあるから先づ第一にこれ等の方々荷物を搬出せしめねばならぬと、學校附近の生徒有志を以て臨時に隊伍を造り、驛傳式にて家財を校内に移さしめた。

七月九日、開校した。蓋し交通が稍安全に成つたからであるが、私は全校を縦に四中隊とし、各中隊の能力を同一にして、先づ校内を四分し各隊に責任區域を定めて、校内の土砂運搬作業を行はしめ、且、各教職員を分ちて監督せしめた。

作業は午前八時集合 午後三時終了で、各隊に於て半数交代式にて土砂を掘り運搬する有様は、甲南生徒を兎や角と推想する人々に一見せしめ度い位、眞剣な效果ある努力であつて採取運搬せし土砂は數百坪にも上り僅々八日間にして生徒の顔は黒光りをする程になつた。

又、此の作業中、一部の生徒は甲南小學校の死體發掘に應援し、又雜誌寫眞兩部員は青年團等の無理解に因つて起る撮影妨害の危険を冒して、本冊子の材料蒐集に努力したのであつた。

要之、我が甲南に關する限り、物的損害は數萬圓に上りたるも、全校職員の一協力に因つて精神的落和、師弟間の親睦は著しく増進されたるを見れば、正に轉禍爲福と稱しても、過言ではないと信ずる。

(昭和一三、十二、八記)

慘禍の實相

(住吉川を中心として)

はし が き

昭和十三年七月五日神戸市及び阪神沿線を襲つた豪雨は遂に到る所に於て氾濫を見未曾有の大洪水を惹起せしめたのである。

この稀に見る大水害を永久に想起せしめ過去の恐しき記念となすと共に將來に於ける水禍防止の觀念發達の一助ともせんがために私達は先づ最も本校に近く従つてそれにより被害を蒙つた生徒父兄等の極めて多い住吉川並びに芦屋川の綿密な實地調査を行ひこゝに出來得る限り忠實に實相を描いたのである。

住吉川

(一) 被害に對する概観

住吉川はその源を東六甲頂上近くに發し、東六甲登山街道に沿つて約八軒の山間を流れて住吉村に入り、西の住吉村と東の本山村魚崎町との境界を爲す河川である。今回の水害の一大特徴たる山津波による被害の典型的な状態を示す河川中、住吉川はその先頭に置かるべきものである。

住吉川は平素は少くとも下流に於ては水流を見るこ

との稀なる川で、降雨と共に多量の水流を見るのである。即ち之を根本的に云ふならば六甲山南側は所謂典型的な斷崖地形を示し、且山脈が平野に近迫してゐる爲に一旦降雨を見る際には、水流は斜面を下つて低地部に集結、更にそれらの多數がこの河に流入するので極めて急激なる水量の増加を呈し、既に昭和十年度に於て阪神國道道路上に水流が氾出せし例があつた。

……(この際には降雨の爲に兵庫師範敷地の土砂が流されて川底を高めた爲、山津波でなく徐々に水流の増加を見たとの事である)……更に住吉川が他の東部河川に比して不利なる點は、川幅の點はしばらくおくとして、山系の近接が急激である事である。即ち試みに

百米等高線が河川を交る地點を求めて、その地點と海岸の河口との直線距離を求むるならば、住吉川が約二千五百米、芦屋川が約二千八百米、夙川が約三千五百米で武庫川の如きは、河口と寶塚間の約十三軒間常に五十米以下の平野を流れてゐる状態である。今住吉川断面圖(別圖参照)から、山津波を考慮に入らず單なる洪水の水速として、概略の水速を計算するに、山地では秒速五米乃至七米平地では一米乃至二米であるが、山津波の土砂岩石の壓力によつて水速は當然増加を見るであらうし、従つて被害區域に於ける水壓も増す事は當然推測されるのである。尙住吉川上流中流は古くより御影石の石切場として知られて居る程花崗岩の多い地帯である。云ふまでもなく花崗岩は風水に弱く、侵蝕が甚だしく、殊に花崗岩の既に土砂に風化せるものと、風化せざるものとの混合層が多く、且之は水浸に對して最も弱いのである。更に河川流域に地盤を堅める能力の弱い松が大部分であつた事も一原因とならう。又川幅は十年前に比して下流村落地帯に於ては乃至殆ど狹められ、堤防は崩れて住宅地となり、又上流に於ても住宅、道路、ドライヴウェイ等の爲切開かれた例は少くない。

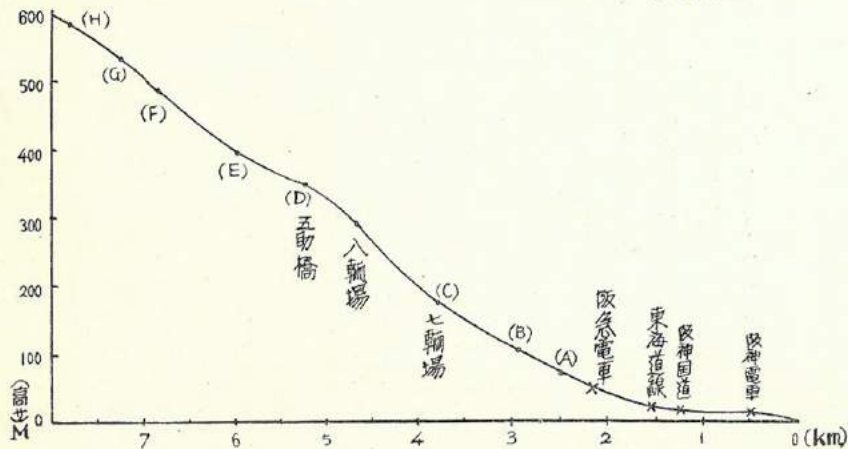
かくの如き住吉川に對し、既に梅雨期以前より降雨が繼續し、七月に入つてからのかの未曾有の降雨量が決定的役割を演ずる事になつたのである。

今水害による被害状況を述べる前に被害區域に於ける水流方向を概説すれば理解を助けるであらうと思ふ

七月の三日、四日の降雨により住吉川々底に土砂堆積すること約一米に及んだ模様であるが、差程危険を感じず、四日夜半に至つて水流水速加はり岩石の流れる音が附近の安眠を妨ける程であつた。五日未明阪神國道橋上を軽く洗ふ程度に水は氾出したが、之も大した事はなかつた。午前九時二十分頃上流各所に山崩れを生じ、所謂山津浪となつた水流は、河川と沿道、及び住宅の境なく一面の水を以て覆ひつゝ下流阪神國道に至つて西方に轉じ、國道以南の住吉村を襲つたが、之と同時にしくは少時後に觀音林阪急以北約百米餘の地點で西岸決潰し、その水流は住吉川全水流を入れて觀音林、反高林一帯を襲ひ、阪急以北は云ふに及ばず以南の反高林を埋没し、土地の傾斜に従つて住吉驛東部に至り、線路を越えて南下、他の一部は驛を迂回して住吉神社東側道路を下流し、何れも國道を越えて住吉村南部に流入した。國道より西進した水流と、觀音林決潰による水流とは相前後して川の西方約一〇〇米乃至一五〇米附近を本流として流れ住吉小學校はその中央に當り、此の附近の家屋は何れも一階埋没もしくは倒壊流出の浮目を見た。この水流は阪神電車以南の地域をも全面的に襲つたのである。かくの如く住吉川全水量は西岸住吉村に集中されたが、約三分後、再び阪急以北約二〇〇米附近の東岸を決潰し、水流の七分は本山村方面に、三分を住吉村方面に流入し、阪急以南の住吉川本流は無水状態となつた。何故水流が東岸に轉じたかを考察すれば、元來住吉村は本山村に比

して土地高く、例へば西岸住吉村の實踐女學校の位置と、川を基準にして對岸本山村の第二小學校は殆ど同じ位置にあるが、此の兩者を比較する時、前者は約海拔四〇米、後者は約二五—三〇米と云ふ結果を見るのである。更に決潰地點より約百米土流地點、即ち野村邸附近に於て川が部分的に彎曲し、從つて彎曲の際の水流の自然的方向と以南の本流とは約20度の角度をなす上に、侵蝕によりその角度は30度位に及び、加之に最初の山津浪により西岸に土砂岩石の堆積が丈余に及んだ爲自然の堤防を形成した爲水流は彎曲の際の水流の自然的方向、即ち本山村方面へと決潰流入する事になつたのである。之は午前十時頃である。本山村に流入した水の一部は久原邸内を通過して東側より魚崎町方向に流入したが、他の大部分は久原邸北部を曲つて本山村に入り、その水流は本山村全面に擴がつたが、その水流の中心は南東部に走つて本山第二小學校西側道路に入つた模様である。本山村は田地、空地が多く道路が廣いため全面的に擴がつたが、東海道線たる鐵道線路は約2米の土堤の上にあるため、それ以南はガ—ド下道路より來る水流のみ受けてゐたが、やがて鐵道以北の土砂堆積は2米余に及び省線は他の平地と同じ高さとなり、水流は南部魚崎町へも全面的に擴大し線路上の客車は立往生の結果となり、乗客は何れも附近の家屋二階に避難した。この本山村被害區域の水流の中心は大體三つと見られる。即ち久原邸東側を南方に直下するもの、本山第二、甲南高女西側道路、及び

面斷縦川吉住



田中同道停留所附近の三水流である。この被害全區域の中央部に無被害區域の三角形がある。之は國道以南の住吉川兩岸の地域で、之は上流に

於て決潰せる下及國道で水流が東西に分離せる下にもよるが、元來海中學附近を頂點とし、海岸河口より西100米、東一軒の地點を結ぶ三角形の扇狀地帯が、他の區域よりも土地の高いことによるもので、實例を上ぐれば、住吉川西岸の一部に於ては道路を中央に挟んで東の家は庭に水が流入した程度、西の家は一階全部埋没と云ふ奇現象を呈して居る。

(二) 上流中流の被害實情

實地狀況

一、上流、中流地方。

この地區には特別に人畜に對する被害は取立てて云ふものはないが、何と云つても被害の根本をなす地區である爲、その調査は將來にとつて意味あるものと思ふ。この調査は山岳部全部員諸君が被害直後、危険を犯して數日間實地調査された報告によるもので、我々調査班の深く感謝する所である。今上流よりそのあらましを記述する。

猫守谷——住吉川の究極點である。從來岩肌の露出せるロックガーデン型の地形をなしてゐる所爲が大なる變化は認められぬ。

水晶谷、猫守谷間の、六甲山より發する各支流流域は湖葉樹灌木が密生せるため崖の崩壊はない。唯川底は深く、川幅は廣くなつてゐる。一方六甲山天狗岩屋根東側の植林地帯は未だ完成に至らざる爲、四ヶ所に

大崖崩れが認められた。

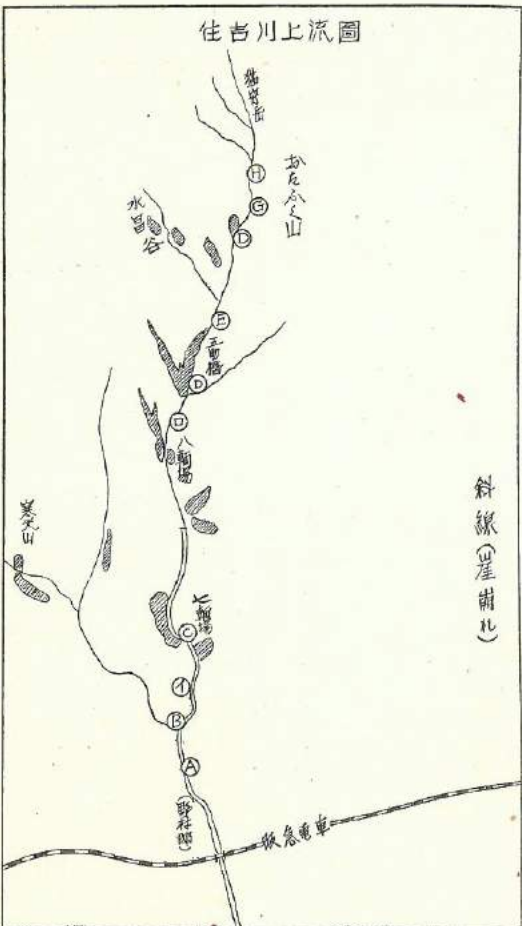
鳥居及び橋附近(最上流より約七百米下流)(H)——鳥居及び橋は元のまゝで、橋上には青草さへ見られる。小さな御影石流出の形跡あるも、土砂の運搬は僅少の様である。しかし川幅は擴大し、且岸邊の簾が下流へ向つて倒されてゐる點よりして水量が可成り増したことが察せらる。

G 附近——川は急カーブし、兩側緩傾斜の爲川幅約八十米の廣きに及ぶ。
F 附近——川の曲折の爲川幅二十五米に及び、F……G間の山腹道路(川底より三十米乃至八十米の道路)は二ヶ所に崩壊あり。又E……F間は通常、歩行困難な程川幅狭きも、今は約十五米に及んでゐる。
E 附近(五助橋の上流五百米)——附近が緩傾斜の爲、大きな崩壊はないが、川縁が赤肌を現はし、約十米の川幅が約五倍になつて居る。此處と五助橋間にも大崩壊はないが、時に直徑四米もの巨岩のずれ落ちた形跡がある。

五助橋附近——橋は跡形も無く、この土地を知らぬ者にはその位置も分らない。御影石と土砂の混合をなす附近の西岸崖は可成り削り取られて居る。この附近に約千分の第二石堰堤あるも効果なき模様である。五助橋の稍下方に於て本流と交する小支流(澤)は平常殆ど認められぬが、今は可成りの廣さを有し、その交叉點附近には觀音林附近に見られる如き巨岩の堆積がある。上流で巨岩の存するのはこの附近のみである。

第一石堰堤(D)——高さ約三十米の石堰堤は崩壊されず、此處より八幡場上流の發電所附近までは川底が深くなつたと云ふ奇現象が生じてゐる。多分石堰堤と附近の澤の水流の爲であらう。石堰堤の可成り下流では土砂崩壊の形跡がある。即ち簾は泥にまみれて下方を向いて雪崩跡の様である。
八幡場——此處の家屋は川より遙か高所にあるため無事で、道路も崩壊した様子が無い。住吉川が直線的に流れて居る爲であらう。しかし七軒場……八幡間は土砂、御影石の爲川底上昇し、七軒場上流の二軒の發電所の如きは本流の土砂と背面よりの崖崩れのため全壊である。

七軒場(火葬場)——C 住吉川は東南に曲折し、西岸は廣い崖崩れあるも、東岸の道路は残つて居る。下流の橋(落合橋より四百五十米上流)は勿論なく、約二十五米の川の深さが、約五米にもなつて居り、この橋と七軒場間に在つた二軒の製粉場の姿は認められない更に橋より下流の製粉場は、高所に存して居り、又直接土砂を受けて居らぬにも係らず、地盤の侵蝕によつて全倒壊の浮目を見て居る。
落合橋附近(B)——橋の形跡も認められぬ。道路上の駐在所は屋根のみを示し、東岸の二三の家屋は崩壊埋没して居る。即ち川底が駐在所の屋根まで上つた譯で、從つて川幅も遙かに廣い。下流程の巨岩はないが、それでも可成りの大きさの御影石が多い。
落合橋の少し下流で本流に合する川(寒天谷より流



阪急以北

阪急以北の被害區域は狭小な所ながらも、その被害程度は直接の決壊場所だけに激烈を極めてゐる。この部分は國道附近よりも川幅が狭く、深く、川の両側に草が繁り、兩側に道が通つてゐたが今やその姿は何所にも見られない。二百米近くの幅は一面の川原である。西岸の觀音林住宅地や東岸の松林中に散在した古風な家々も、或は砂の下に埋まり、或は流されてしまつて、四五寸から二尺位の直径の岩石でうづめられた廣場になつてゐる。その土砂岩石の量を見る者の眼を疑はしめ、以前の情況を知る者は眞實であると信ぜられぬ程である。阪急線路は實に砂面より三米の下方に埋まり電柱は文字通り鈴の如く曲り、西の住宅地と川とは全く境界を判別し難く、東方へ向つて新しく作られた住吉川が本山村へ滔々たる濁水を注いでゐる。この附近での土砂堆積は平均にしても二米近くあらう。深い所は勿論三米餘である。西岸に於ては、眞野、阿部、林安藤、伊藤等の大邸宅を跡形もなく流失し、十數名の犠牲者を出した。阪急線の鐵橋の一部が省線路上に流され、一部の犠牲者が遙か一キロメートル下方の住吉小學校で發見される等、當時の水流の強烈さは我々の想像以上である。東岸の翠松地帯も今や本山村へ廣々と續く石川原と化し、それらの間に半壞の農家や、夜具等の眺められるのも痛ましい。

阪急線—國道間

この被害地域は全く廣大な範圍にわたつてゐる。先

野村の石垣も可成り破壊されて居るが、住吉川はこの地點で急カーブして居るから、若しこの石垣が完全に破壊され、決壊したならば被害區域は全く違つた方面、即ち住吉村北部から御影町中心部に及んだことであらうと思はれる。この石垣は或意味で被害區域の分岐點の役割を果してゐるのである。

(三) 下流の被害狀況

下流被害區域狀況

住吉川下流の特に被害甚大なりしことは、既に「概観」の際に述べたが、今この區域を阪急以北、阪急—國道間、國道以南三區に亘つて、住吉川東西流域の被害狀況を眺めて見よう。

づ本流を見るに、勿論川と住宅地との境界は判別されず、一尺直径から、一間直径の巨岩が累々たる山をなして居る。川の中の土砂巨岩の堆積は道路よりも遙か高く、阪急直南部に於てその岩石の量は最大で、下流になる程幾分少くなるが、しかし石の大小は増して居り、國道附近には數十トンの巨岩が、松の太い幹や材木と共に人の身長よりも高く堆積して居る。全くこの區間の住吉川の本流は土砂が道路と平行に堆積し、その上に巨岩が無數につみ上げられて居る。今この本流の東、西兩岸被害情況を見るに、

西岸(住吉村)方面……阪急以北の決壊は水流を

最初全部この方面に注入した。阪急線直南の小田邸は洋室の半分を残して他は倒壊埋没し、同じ觀音林俱樂部の建築も一階を埋め、同俱樂部主任の關盛治邸は痕跡をとめない。更に道を隔てた(勿論道は無くなつてゐるが)南の反高林一帯は何れも水流の本流に直面し、一階を土砂、岩石に埋められ、その最北に當る阿部邸は住宅の半分と土藏(この土藏内の個人としては日本一と稱せられる支那書コレクションは難を免れた)を残して、土藏の窓下五寸まで土砂で埋まり、西の住友邸も一階埋没、以南の大邸宅何れも一階埋没である。(詳しくは他圖参照)本流は主として阿部、住友兩家間道路を通つて南西に向ひ、又直接川沿ひの地は川より直接の被害を蒙つて居る。阿部、住友邸以南に至つては殆ど土砂のみで、唯住吉川本流にのみ岩石が認められる。阪急、省線間では芝川、覺道、竹村、長

谷川、山口、靜、星、安宅、竹内、田中、岡谷、廣海等何れも一階埋没、その大部分は甲南關係者で、中でもこの地域に建てられた甲南小學校は校舍の埋没は云ふに及ばず、幼い數名の犠牲者を出すに至つた。この外教育關係では陸實踐高女も被害を被つて居る。この區域内何れも一・五米より二米以上の土砂の堆積である。省線は勿論土砂下となり、之を越えて國道に至つた土砂はその間の小住宅、住吉驛構内に一間近くの堆積を示してゐる。省線と國道間も同様被害を蒙り、一米半から二米の土砂を堆積して居り、日の丸ゴム工場のように營業不能の狀態となつて居る。この被害區域も上部住吉全部にわたつてゐるが、甚だしき區域は住吉川と住吉神社東側を南北に通ずる道路間である。住吉驛構内の多數の土砂は觀音林地區の決壊によるものが大部分ではあらうが、又省線直北の反高林區附近の全面的氾濫にもよることは、その附近の邸宅の家具類が構内で掘出されたよりして明かである。次に阪急—國道間の本山村の被害を眺めて見よう。

この區域の被害は極めて廣範圍に亘り、恐らく土砂堆積の範圍、及量は今水害の最大なるものである。住吉川の野村元五郎邸—水道路にわたる廣範圍の決壊により、住吉川の全水量を受け、しかも住吉村側が僅か三四十分の被害時間であるに對し、本山村は當日午前十時頃より約一週間に亘つてこの被害を蒙つた。

本山村は縦横に幅の廣い道路が通じ、更に田地が多い爲、當日は大波のうねる海原に家屋の浮び出た感を

與へたのであつた。住吉川阪急線附近にて決壊した水流は斜めに南東の方向に向つて流れ、廣い道路の通ずるまゝに全本山村に廣がり、西は久原邸東部より、東は田中國道停留所の間を海原と化したのである。その水流の主なもの久原邸東側の道(久原邸内を通つて)を、中心部は決壊部より本山第二小學校方面へ、それが更に分化して田中方面へと流れたのである。約四萬坪の久原邸は塀の爲比較的被害は少なかつたが、同邸の北東兩側は被害中心部で何れも一階埋没でさして特殊な變化は認められない。水道路以北では住吉川より佛天垣附近まで、それ以南では久原邸東側より本山第二小學校の約二百米東部まで、水流を幸運に免れた地區は別として、何れも一米半から二米の埋没となつた。元來省線は二米餘の土堤上を交通して居たが、次第に堆積した土砂は丁度この線路まで達し、それを越えて水は南下した程で、この被害區域全面が省線線路と同じ高さまでの砂原と化したと考へれば間違ひない。甲南關係では神田先生、正田先生の住宅及甲南寮(久原邸直ぐ東)、安宅、國府家等何れも二米近く埋没しその他本山第二小學校、甲南高女等も同様被害を蒙つて居る。今土砂堆積量を具體的に感得する爲、實例をあげると、本山第二小學校庭の講壇(約一・五米)は土砂中に没し、甲南高女の作法室(普通家庭一階の高さ)は唯屋根のみが上に現れて居る始末である。同校北側の半島人家屋等は跡形もなくなつて居る。ともかくこの地區の土砂量が最大である上に、家屋以外に廣

く堆積して居る爲、自然とその復興を遅からしめる結果となつた。

國道以南

國道以南の住吉川本流を見るに、山津浪によつて出た大水が國道に氾出して東西に分岐し、且上流に於て決潰した結果、山津浪以後は云ふまでもなく無水となり、従つて土砂も山津浪以前のものであり、流域地が無被害と云ふことになつたのは、昔屋川の國道以南の狀態と等しい。國道は橋上に巨岩、大木の流撥されたもの山をなし、住吉村方面へ向つて水が流れた爲、電車三臺及びトラクタ等立往生となり、車道、歩道上に岩石（直徑二、三尺より一間位のもの）が多數轉在した。今住吉川西側を見るに、氾濫した水流が國道を流れた爲、住吉川より約百米西側の道路間の南部反高地區は國道に面する家屋を除いて阪神電車に至る間殆ど無被害の奇現象となり、その道路（川より約百米西）と住吉神社前の南北道路が被害區域となり、就中住吉小學校を中心とする南北地區は、本流より直接受けた水流と、觀音村決潰による水流の兩水流を正面に受け、國道以南の被害地區の中心を占め、且數名の犠牲者さへ出した。反高地區は土地高い爲、被害極小であるが、道路一つ距てた西部一帯は約二米餘も土地低い爲、國道以北に劣らぬ土砂堆積を示した。住吉小學校を中心とする被害區域、即ち反高地西側より西約二百米幅の南北にわたる區域は水流の中心で、何れも一・五米より二米の土砂埋没を受け、その地區は阪神電車

高架まで、更に高架以南の小區域まで一階埋没の慘狀を示してゐる。住吉小學校附近（戀野）では一家四人の犠牲があり、又觀音林の被害者の死體がこゝで見されもした。同小學校の校舎は一階埋没、附近何れも之と同程度である。之より僅か西方部の區域（甲南住宅附近及その以南）は少きは床下浸水に留まつたが更に西方の住吉神社南部は、觀音林決潰の水流の一部が住吉神社横よりこゝに流れ落ちた爲、一階全浸又は床上一、二尺の浸水を見て居る。阪神電車以南も川沿ひの部分の被害は無に近く、住吉小學校直南に當る小區域が一階埋没の被害を受けてゐる外は、住吉神社前南北道路に至る間、殆ど床上一尺乃至二尺の程度の土砂を受けて居り、之が殆ど全部であるが、特に土地の高い部分、或は海崖附近の小區域では床下浸水と云ふ所が小部分ある。この區域は住宅以外に酒倉が多いが之等も一般住宅の床下浸水程度の被害状況である。概して國道以南の被害區域は國道以北の大邸宅に比して密立せる小家屋の爲、繁雜を極めて居る。

次に住吉川東岸を見るに、西岸同様川沿ひの地域は全くの無被害で、灘中學も無被害と云ふべく、その南部から魚崎小學校へ極小の水浸を受けた程度である。即ち灘中、魚崎小學校の東側道路までは被害僅少であるが、それより東に至れば、天上川に至る間、本山村の受けた全水量がこゝに流入した爲、久原邸東側の水流、甲南高女西側の水流、田中附近の水流がこの低地に流入し、阪神電車に渡る大部分は一階埋没、少くと

も床上二尺の被害を受け、しかも低地の爲水害當日より一ヶ月間水が退かないで居たと云ふ徹底的な被害を受けた。この密接せる小住宅區域の慘狀は西岸以上で木材の破片等道路を防ぎ、混雜を極めた。阪神電車以南では、住吉川から、阪神電車と住吉小學校東側道路と交る地點、及川口より海岸に沿つて東へ約一キロの地點を結ぶ四角形の部分は殆ど無被害となり、電車線直南で横屋南方に當る部分に、小區域の一階全浸は見られるが、西岸同様床上浸水が大部分の様であり、更に南の海崖附近（増谷高女附近）は床下程度で大した被害はない。阪神以南も天上川に至る間である。

以上が住吉川流域被害の概観である。徒らに觀察に過ぎても反つて理解し難いし、又具體的狀況は被害圖や寫眞によれば遙か明瞭になると思はれるのでその方に任し、こゝには被害程度を記したのである。

芦屋川と高座川

（一）芦屋川の氾濫に依る被害状況大要

芦屋川は六月下旬以來の降雨に依り増水をなしてゐたが、七月五日の早晩に至つて豪雨となり上流兩岸の崩壊に依り巨岩、土砂、樹木を流失し續いて城山の東南一帯の山岳の崩壊があり、芦屋上水道水源地、阪神

發電所の崩壊と共に午前八時頃城山下の新設のダム中上位ダムの西側が決壊し一大音響と共に激流は土砂岩石を流し附近二三軒の家屋を全壊又は半壊し下流へと奔つたのである。

一方芦屋川の支流たる高座川に於いても連日の豪雨のためロツクガーデンよりの土砂の流出甚しく當日増水した激流は土砂と共に溢れて岸際の二三軒の家を流失せしめ、一人を死にせしめつゝ下流へくつと押し流して來たのである。

これより先午前九時頃新設の橋は上流よりの土砂、岩石、流木の爲め橋脚を堰止められたため水流は東西に溢水し浸水家屋を出したのである。

又續いて十時過に至り城山橋、大僧小橋、大僧橋は夫々溢水流失せしめられ次いで開森橋及御園橋阪急電車線北側の橋は順次上流より押し流された家屋、土砂、岩石、樹木に依つて堰止められ激流は東西に溢水し殊に開森橋東の土手の決壊に依り芦屋川の東道路は奔流の中心となり水量丈餘に達し道路に接する家屋は無慘にも全壊又は半壊し二階より救ひを求める聲が人々の哀れを催したのである。

かくして阪急線北橋より西岸より溢れ出た水は水道筋を西へ約一丁一階迄位土砂を運び阪急芦屋川停留所西一丁のガード下を南下し附近一帯を荒し省線線路上に土砂を持込んだ。一方東に決壊した水は東岸第一帯を忽ち浸水せしめ激流は各道路に氾濫しその水勢は強く殆んど自然のなすがまゝに蹂躪せられ省線芦屋驛

附近に至り道路より一段と低い線路とを土砂にて埋没し南下して新設の決壊溢水と合し多數の家屋を浸したのである。

（二）芦屋川上流被害状況

諸所の兩岸壁の崩壊し岩石、土砂を堆積し以前の形を存せざる箇所すら有る。

（三）水車谷及河原毛附近

（阪急芦屋川停留所山手二丁の城山橋より以北）

阪神電車發電所は土砂及流木、岩石の爲め川床高くなりし爲め土砂浸入せり。南方の杉浦製粉所に隣接せる猿丸辨治氏所有の水車小屋の北側がくづれ芦屋上水道の水源地の殆んど壁際まで崩れ道は通行不能となつた。

寺澤氏邸横の川床に先般の水害後に作つた堰堤は一部破損した。北部の高尾山の一部崩壊、白井氏邸南の川沿ひの竹藪は半分程流失、笠ヶ塚に屬する川東の絶壁は崩壊以上の土砂、岩石、流木の爲め川西（河原毛）の宮崎、本出、中村、浪川氏邸は一部破損又は半壊し南隣の山中豊太郎氏邸は川沿ひにあつたので、向側の山（笠ヶ塚野田氏所有）が崩壊した爲その土砂が堰となり水が西の方に流れ川幅が狭くなり土砂堆積せしに依り川床非常に高くなりし爲め午前九時半過あつと言ふ間に全部流失した。一部西方の高所にあつた土堀を残すのみ、山中氏所有の平家建（城山橋西詰北側）

は屋根あたり迄土砂の爲め埋まる。

寺澤氏談……芦屋川水車谷

午前五時頃より川西の岸壁（高尾山）が崩壊し七、八時頃と同岸壁は山津浪となりあたかも水と砂とが噴火口の如く落下した。その後は徐々に落下し續けてゐた。その震動は地震の如く數知れぬ巨岩が落下した、午前八時頃新設のダムの上手ダムが岩石、水の激流の爲め決潰した。午前六時から十時頃迄の豪雨の爲め前記岸壁決潰した爲一二分間の間に少し下流の竹藪の岸壁が落下した。水量はその箇所にて二十尺位に迄増水した。阪神發電所の水の入口が何千貫の巨岩の爲め堰かれて停止した。五十年來私は芦屋に住んで居ますが未だこれ程の被害を蒙つたことは有りません。

（四）高座川の被害状況

午前七時頃高座川の西、地獄谷の出水甚だしき爲め義井氏の家屋全部流失し戸主政治郎氏は阪急停留所附近迄押流され死體となつて發見さる。附近の住家も小坂氏宅初め流失せるものあり、小坂氏の談に依ると物すごい濁水の爲め一瞬に家は押流された。自分は辛うじて城山に逃げたとの事である。非常な増水の爲め夾隘なる兩岸を破壊し岩井邸の裏一部破壊す。私設山芦屋水道鐵管の如く曲折した。午前九時頃鐵骨造りの高座橋は兩岸浸蝕され陥落流失、急流の爲め川床二三尺低下の異常現象を呈した。

鐵骨コンクリート造りの法泉寺橋は流木、土砂の爲め堰止められてその欄干を破壊されその勢に乘じて濁流は直ぐ下の山口氏専用木造の大僧小橋を破壊流出し土砂の堆積おびたゞしく平常は川床より四間位高所に位する芦田邸の石塀を破壊し浸入土砂は床上三尺位。

(五) 城山橋附近の被害状況

(阪急停留所山手約二丁)
本流、高座川合流點

高座川下流の大僧橋は土砂の爲め埋没し南側の阪上邸(道路より二尺位低い)平家建は軒迄埋没した南隣の川口邸の板塀を破壊し本流の土砂と合して床上三尺位、土砂堆積更に石塀、野瀬、稻垣邸の水は洗ひ金子邸床上三尺位浸水した。

某青年團員談……(金子邸に就いて)

午前十時半頃金子邸に行くとき水はすでに來て家人は大聲で救ひを求めた。團員數名は濁水益々増す中に手の施し様もなく一旦引返したが勇氣を盛返して家人と共に家に飛込んで速早く重要な物を取り出し運搬した。

城山橋は午前十時過に溢水し兩岸道路上に土砂堆積し兩岸の家屋に浸入し川西の坂上、川口(一階土砂)猿丸邸(一階土砂)魚虎事(杉原)柳生、井上邸は濁水に洗はれ一階土砂堆積した。尙川東の藤田、柴田邸は半壊した。

杉原氏語る(開森橋西岸)……午前十時半より急激

に濁流が押寄せ何物も出す間がなかった。午前十一時正午頃が一番甚しかつた。其の後徐々に水は減つたが、七月十五日頃迄家中の水が小川の如く流れた。

(六) 阪神國道附近及其以南海岸防潮堤間の被害状況

新國道業平橋の橋脚は午前九時過に土砂、流木の爲め堰止められた濁水は東西に氾濫一方川西に流れた水は午前十時半頃開森橋附近の氾濫した水は古屋敷、刈屋西ノ口方面を荒し省線路を越え南下し前田、中程を流れた水と合し相當な浸水家屋を出した。

某牛乳店談……(川西國道北側)

ハナヤ勘兵衛眞店近所は八時頃より約二百軒浸入し出した。初め小川、下水がつまり氾濫、國道業平橋の水が溢水した爲め濁水最高水量は大人の首程迄來た。

一方川西國道以南の地域は權の深を相當に荒し津知方面迄流れた。

大野氏談に依れば最初早朝より小川の増水に依り床邊迄水が來た。一時引いたが業平橋の氾濫に依り床上程度の浸水を見た。

川東國道以南の地域は業平橋氾濫の水と開森橋附近に於ける氾濫の激流と合して昔屋唯一の商店街を床程度に浸水を來たして阪神電車ガード下を通り更に南下し宮川小學校に於いては宮川氾濫水と合し相當甚大な被害を現出した。更に南下せる濁水は先般關西大風水害

直後施行せられたる海岸防潮堤に堰止められ水が停滯し附近一帯の住宅は床程度の浸水を見た。

某商店主談……(昔屋三八通)

濁水は早くから溢れ出た。其の後國道業平橋氾濫及阪急附近からの氾濫水の爲午前九時頃から急激に浸入して來た。手の施し様なくたゞ見まもる許りで、濁流は街路上を押流れ水流は午前九時半より午前十時過迄が最もひどかつた。

宮川小學校は午前十一時過から浸水した模様である

甲南學園の罹災

はしがき

今回勃發せる大水害により、わが甲南學園は各校共に少なからぬ被害を蒙つたのである就中佳吉川に面する甲南小學校に於て五名の死者を數へたことは全く遺憾の極みであつた、しかしながら未だ危険な時に歸途についた者多數に上つた本校。佳吉川の本流の中に島の如く取り圍まれた甲南高女に一名の死傷者をも出さなかつたことは、せめてもの幸といふべきであらう。

本 校

(一) 當日の模様

七月三日來降り續けた雨は依然として止まず五日午前及び文字通り沛然と雨足が激しくなつたのである午前六時頃非常警報が發令され當直職員直ちに校内を巡視せるに煙房汽鑪室西部の暗渠氾濫し、汽鑪室に浸水し、テニスコートに流入手の下し様もなかつた。

しかし夏休みを目前に控えての最後の頑張りとも言ふべき第一學期學期試験は七月二日(土)(但尋常科は同月四日(月)より始められてゐたため七時半頃から

らは生徒も萬難を排して登校し來るものも多かつた、こゝに於て裏門を入つた所へ假に木を渡して橋の代理をさせ生徒の登校を容易ならしめたのである。

登校中既に氾濫せる小河等により浸水したる商店なども見受けられたが、かゝる大事にならうとは夢想だにもせず佳吉川に來るとかなり水嵩は増してをり消防・青年團員等數名見張りについて居り、もの／＼しい空氣が感ぜられたが、未だに水と橋とは相當の間隔を持ち、曾て風水害の時の如くに橋上を溢れ流れる様になる心配さへもまだ／＼抱こうとしても抱けぬほどで、滿員の國道電車の中から佳吉川を見下しながら一種の安堵の念をさへ懷いた程であつた。試験中とはい

へ乗物の不通或は故障の續出に定刻の八時十分に至つても多く出校せられざるものあり稍々暫らく試験開始を遅らすことゝなつたのである。

その間教室での談合ひにつれて最早かなり各所に雨が被害をもたらして居ることは判つたが話はいつしか當日の試験の方に移つて行くぐらゐで誰一人として神戸のかくも悲惨な被害や佳吉川岸の昨日まで堂々たる玉櫃玉砌を誇つた大邸宅の岩また岩の廢墟同然の姿に考へ及んだものはなかつたのである。

かくて大部分の生徒は次第に學校へと馳せ參じ時間遅れではあつたが人員の揃つたクラスから試験は始められ揃はぬクラスは取止め亦は延期することになつたのである。

かくする中に既に八時半頃氾濫を見た本校北の天王谷その他の谷川の水が九時前後に及んで食堂の北部より激しく校内に突入し特別教室西方庭園小屋を水浸しとなし、雨天體操場裏より道場裏を経て水は校友會部室方向へと流れスタンドを洗つてほど同時に破壊された部室北の垣及び運動場東北隅野球バックネット裏より雪崩れ落ち込んだ水と合流して運動場を南へと走り寺の西側の石垣を破壊したのであつた。時に九時半頃であつた。他の一方は雞小屋の前から講堂の西側を経てバスケットコート、平生理事長銅像附近一帯を土砂に埋没せしめ午後二時頃に至つて南の石垣二箇所を崩壊して道路へと一時に流出したのである。

十時乃至十一時前後に試験を終へた頃には既に周圍

は河池をなし本校創立以来の珍事を惹き起してゐた。

(二) 處 置

其の時にして神戸其他の被害状況を知れる者は一人として居るはずはなく、生徒の一部は降り注ぐ大雨の中を或は教練服に着換へ或はパンツ一枚といふ元氣な姿で水に没して歸途についたものもあつた。が西方は住吉川にて全く渡る術なく引返すものも多數に及び尋常科下級生中には甲南高等女學校に助け込まれものも相當あつた様である。

かくする中に青年團員其他が避難民を伴つてやつて来るまでに至り初めて住吉川の大氾濫の事情を知り、南の本山第二、甲南高女兩校も奔流の眞直中に洗れて居り到底歸途につけぬことが明かとなつた「危険につき生徒は歸宅するな」との貼紙も出される仕末となり今まで校内の珍風景に面白げに見とれてゐた生徒たちも一時に不安の氣に襲はれ加ふるに「××邸は跡方もなく流失した」等といふデマ的な聞き傳えが廣がり、校内は次第にザワついて行つたのである。

しかも雨は尙も執拗に降りつき全く校舎内に籠城の已むなきに至つたため尋常科生は全部本館二階に集め高等科生を分つて警戒班、防水班、避難民係り、水事班等を設置し大雨の中を膝までどころか胸までも水に浸して各部署に活動したのである。

家を流され、住所を奪はれて生命から降りしける雨の中を避難所を求めて來校する者も漸次その數を

増して行き、その夜は約一千人に及んだほどである。

しかしながら午後幸にも何時まで降りしけるか想像もつかぬようだった雨もおとろへ僅かに安心を與えたのである。かくて二時頃水事班の努力による、にぎり飯に舌鼓を打ち始めた頃には全く嘘の如く晴れ上つてしまつたのである。

こゝに於て生徒を歸すことが出来るか否かを調査するため數名のものは住吉川方面へと校門を出たのである。先づ南國道へ出られるか否かを確めるために一二町南下して見れば全く驚いたの驚かないのつて、南北に流れてゐた住吉川が東西に流れて居るではないか、學校の西方二丁ばかりの所を北より南へ流れてゐるはずの住吉川が本校の南方五丁ばかりの所を西から東へと滔々と流れてゐるではないか。如何にしてもそれを渡することは出来なく思はれたのであるが調査の結果唯一つ、水に下の土を拂れて宙に浮いてゐる省線レールが存することが判り、それを渡れば西方へも歸れる事が解つた。

四時過ぎに至つて學校へ宿つてもよいが歸宅出來ればしてもよいだらうと云ふことになり大部分は歸宅し始めたのである。

今にして考へるに本校にとつて未曾有の水禍を蒙りしかも既に危険な時に歸路についたものも存したにもかゝらず一人の死傷者をも出さなかつたことは不幸中の幸といふべきであらう。

(三) 復興作業

この大水禍のため學期試験は中止され八日より直ちに復興作業へと歩を進めたのである。大自然の猛威に完全に傷めつくされながら流入の夥しき土砂のため廣場同然となつた荒蕪たる運動場に於て職員生徒歩調を揃へて炎天の下いざ復興へと邁進したのである。

七月八日(金)

1 作業隊の編成……四小隊編成(一小隊を四分隊とす)

2 作業の分擔

3 學校長の作業實施に就ての注意
等が行はれ先づ「自分の事は自分でせよ」との諺に則つて本校自體の復興に全力を注ぎ餘力を以て他校乃至は他區域に及ぶといふことに決定、翌八日より十五日まで七日間に亘つて作業は續けられ最後まで人員の減少を來すことなく平均三百八十九人にて豫期以上の効果を修めることが出来たことは誠に喜ばしい限りである。

この尊い勤勞奉仕によつて私達は必ずや大いに得る所があつたと信じて疑はないのである、かくて出場を疑問視されてゐた高專大會にも殆んど各々が練習の暇もあらず出役の其の朝までもアルバイトに参加しながらしかも意氣揚々と駒を進めたのである。

學生には過勞とまで思はれるほどの困難を伴つた勞働ではあつたが職員生徒一致團結し和氣藹々の中に作

業は進められ、稍もすれば缺如がちなチームワークの精神は強く、私達の脳裡にしみこんだことであらう。

(四) 理事及び生徒父兄の被害 狀況並びに感想報告

本校は生徒中一名の死傷者も出さなかつた事は非常に喜ばしい限りであるが、一家全部水魔に呑まれた伊藤一二君の家を始めとし住吉川、岸屋川附近の居住者の多いため家庭に於て死傷者を出さんまでも相當な傷手を蒙つた者尠しとせぬのである私達はこの不慮の被害により犠牲となられ甚大なる被害を蒙られた方々に對し心から御同情に堪えぬ次第であります

理事 伊藤忠兵衛氏

私は出勤せんと思ひしも今日に限り母が在宅を乞はるゝまゝに家にとゞまる事とする。九時前既に省線は不通であつた。降雨が次第に激しさを加ふるを以て大勢の生徒を預つてゐる學校の事が心配になる。そこで先づ甲南高等學校に電話をかけ直ちに生徒を解放して歸宅させられたき旨を從遵す。岩崎氏より本日は試験中にて且つは一時間遅らして只今始業した許りであるの故を以て直ちに解放し難き由を申さる。「解放させて欲しい」「解放させ難い」の押問答を暫くしたる後、事人命に關し緊急を要するを以

て結局下級生だけ直ちに解放する事に決して話を終る、それが九時十分頃であつた所が暫くたつてから九時三十分頃住吉川が阪急鐵橋北方にて決潰、溢水し猛威を振ふる由を知り、斯くの如くんば解放されし生徒が之に遭遇し、三十名位は避難者を出させしに非ずやとそれのみが心配になる。事實生徒が之の水に遭ひしも辛くも難を免れ却つて同道の婦女子を助ける事となり、不幸となるべきが却つて幸を生んだのは私にとつて誠に好運であつた、之等の美談の中には一般に知られざるものも多いが私共の學校では人に知つて貰ふより黙つて人の世話をさせて貰ひ之を喜ぶの情あるを思ひ、甚だ私として奥床しい感じを懷いてゐる兎に角之は後で知つた事であるが當座は私の落度として氣が氣でなかつた、私の處置が誤つた爲に多くの人命を犠牲にして申譯ない事だと痛感してゐたのである。今後斯様な場合は食料の用意を十分整へて學校に籠城する事にせねばならんと思ふ。九時半頃甲南小學校に電話するも要領を得ない只ざわつく音のみが聞えた後より考ふれば此は生徒を解放して部屋より出しつゝあつた時の騒音である。

雨は益々ひどくなるがまゝ家中にありて新聞紙をよむ上流にあたつて雷鳴の如き音がしきりとする、既にして家の庭に水が入り来る、夫々家の者を手分けして水に對する處置をとる事とし、家の中にゐる者は二階に物をあげ、私と下男とは外にて水を防ぐ、

板でもつて二時間足らずの間防いだのであるが、之によつて少くも一尺以上は浸水の程度を緩和する事が出来、床下浸水にくひとめ得た。水を防いでゐた時氣がついた事であるが、水は始終同じ様に流れてゐるでなく、時に多く、時に少く流れてゐる。時によつて一尺五寸乃至二尺位の差がある。之で洪水の襲來にも一種の周期的な波動があるのではないかと思つた、又この時に面白い事があつた。といふのは流木を除かうと私が努力してゐた時眞白な服裝をして長髪にテニス帽の如きものを被つた巨大漢が何處からともなく現れ物も言はずに手傳つてくれた。その力たるや三人力もあるかと思はれた、それもその筈だつたのである。丁度當時西宮で開かれてゐた東京のお相撲さんだつたのである、とかくする中に水も弱つて來た。上流に材木や砂礫が堆積したからであらう。

所が間もなく孝太郎(甥)の家が流出し、甲南小學校の生徒が半分死んだ由を聞き及び半信半疑のまま先づ甲南小學校へ向つた。有馬道に出たが水勢急にして途中より引返した。歸れば七坪位の納屋の屋根より落ちる水は瀧の如くである、それに身體を洗ひ濯ぎを食して國道筋より小學校へ廻るべく家を出た。鐵道線路に出で、レールをつたつて住吉驛ブラツトフォームに達した、列車の中に避難民がゐる。「こゝにゐて差支へないでせうか」と私に聞く老婆がゐる。「お上のものを斯かる際御便ひになるのは

一向かまはないでせう、後で不都合なことがおこりましたら、私はしかじかの者ですから御取りなし致しますせう」と答へる、老婆の孫でもあらう、十二、三歳位の男の子が薬籠をもつて来て御湯を沸かし度いと言ふ。それなら待合室でその邊の板をこはしてお焚きなさいと告げる。其の折老婆から此の邊へ子供が流れてきた事を聞かされた。此の話を聞いてあつた爲、後で甲南小學校の遭難兒童の捜査に當つて便宜を得、其處から「砂川君」を発見する事が出来た、余り不潔となつたので汽車の中で裸になつてすつかり洗ふ。併し數回歩けば又もとの通りになつて了ふ。驛あたりの家を通り抜け安宅氏の邸内の砂の山を越えて甲南小學校に辿りついた、石垣が三間位こはれて其處から水が瀧の如く流れてゐる、住吉川まで出て見る、水量は不斷の如く甚だ少く不審の念に驅られる、引き返すと田中、岡谷兩氏の二階に甲南小學校の生徒が避難してゐるの見える、學校へ来て兒童が四人、附添の女中が一人死んだ由を知る、堤校長が紫色の顔をして縮の襦袢一枚着て元氣なさうに立つてゐる。出水以來すつと水の中で戦つてゐたので心配の上に生理的にも弱りきつてゐたらしい。「遭難者を四人も出して誠に申譯ない」と校長がいられる。「いや四人でよかつた」と私が答へる、實際私に見れば全滅だと思つてゐたのが四人で済んだのであるから、そうしたくはぐな返事をするより外仕方がなかつたのである。廣瀬さんが

のだつたのである。

小學校には古川の子供が來てゐる。その子供と一二とを伴つて竹之助の宅に向ふ、途中古川の子供が一二の家の全滅の事を物語り或は散髪屋が何か口をきかんとする事に一二に與ふる影響を考慮して肝をひやし乍ら岡橋邸附近へ來ると八郎にも遭ひ三兒を連れて恰も凱旋將軍の如く竹之助の所まで來た。

やがて孝太郎、及び甲南小學校よりの隣伊藤邸に避難してゐて厄に遭つた阿部泰造君の遺骸が発見された。翌日は飯子夫人、金太、女中二人の死體が上り又十日には夫に捜査させた結果鈴子の遺骸も発見された、家の中に居た者は皆死んだのであつて女中一人は家の外にゐたので辛うじて助かつた、あつといふ間に意識を失ひ、氣が付いて見ると役場の二階に居り、打撲症を蒙つてゐた、死者のすべては一人も水を飲んでゐない、一瞬の打撃によつて命を失つたのである。

兎も角今回の水禍は實に隨間的なもので日本には甚だ珍らしいが歐洲のチロル地方では屢々見られるものである。電撃性の山津浪ともいふべきもので、ハイムが山崩をいくつかの型にわけてゐるがその第一型式 (Schuttrutschungen, die sich in einer einzigen Bewegungsperiode ganz Vollziehen) に當るものであらう。

廣瀬三郎氏

「出水の状況」 五日、早朝より降雨甚しき爲大阪行

孝太郎さんの家が大變だから其處へ行つてくれといふ、學校に氣が残るけれども辭し去る。やゝ行くと「伊藤さん／＼」と呼ぶ者がゐるので振返ると芝川氏の家の者である。「孝太郎さんの家が大變です」といふ、唯「承知してゐます」と夢心地のまゝ答へる、女中がたつた一人助かつて觀音林クラブにゐる由を告げられ、此處に始めて悲劇の動かすべからざる事實なるを知る、悲しいといふ感じも起らない悲しさを超越して了つてゐる、茫然としてゐるのみである。

知らぬ中に阿部、住友、觀音林クラブの面影のみは見られる、しかし捜し求める目的物は全然見えない一面の砂原のみである、孝太郎の屋敷だつたとおぼしきあたりは砂石の外一物もない全くの廢墟である。變化の甚だしきに惘れてなす所を知らない、又上から水が來はせぬかと恐怖心に襲はれる。

住友邸の方へ幅三間位の水流が去り、野村邸邊りの所から野寄の方へ奔流らしい五、六間の河が流れてゐる、このあたりの土砂岩石は阿部房次郎邸の二階の屋根の高さ位まで堆積し、試みにステッキを水平にして他の事物に目標を求むるに丁度住友邸の遭雷針の下の所に合致する様であつた

孝太郎の家の者は一人も残つてゐなからうと思ふ。この邊の河岸の決潰は九時十分——二十分頃に起つたものではあるまいか、丁度私が新聞をよんでゐた時大吾鸞を發せしがその決潰の音であつたのだらう

を見合はし、一時様子を見ることにしたる折しも、

午前九時過ぎ邸内の井戸附近水の爲陥没せる爲下男に命じ之れを修理せしめ居たる時、勝手口の扉の隙間より水洩れ來りたりとの報に接し、直に二階に上り表道路を見下したる時、濁流滔々と氾濫し、甲南小學校方面より住吉驛方面に向つて流下せるを見て腫て數分の後邸内は勿論床上に流入し來る怖れありと豫感し直に主なる家財を二階に運べる内、水勢急に激しくなり水量も亦次第に増加し遂に表扉を打ち破り、玄關並に台所勝手口の兩方より建具を押し倒し、土砂と共に流入し來りたる爲止むなく途中にて家族一同二階に避難し、形勢を觀望せしが、其内水勢益々甚しく遂に階下全部床上約四尺程土砂に埋没し、其結果流入の水量稍減少せる爲家屋流失の怖れなしと推察し稍安堵せしも、尙今後の状態を豫測し得ず不安なる状態を持続せる内約二時間を経過せりと覺し頃水勢次第に弱り來り、一同漸やく愁眉を開けり

「被害の状況」 庭園は勿論家屋も階下全部床上約四尺平均に土砂堆積し全く使用に耐へず、二階のみ無事に残れり。

「水害に對する感想」 上流地方の山林の亂伐、河川の狭少、河底の餘りに淺く甚しき其附近の土地より河底の方遙に高き事などより考察する時は既に今日あること強ち怪しむに足らずとするも斯かる根本的原因を問はずとして、何故に彼の連日の豪雨に際

兎角する中に伊藤竹之助氏、不破榮次郎氏が來る。既に午後一時頃である、私の家から此處まで道程にすれば極く僅かで普通ならば十數分で來られる所であるが、約二時間を要してゐる。甲南小學校までに一時間位を費してゐるであらう、此處にゐても手のつけ様もなく仕方ないと思つてゐる時住友家に死體のかゝつてゐる事が知らされる。行つて見ると地上一丈五尺位と覺しき木の叉の所に水死人がかゝつてゐる、十四、五歳位の女の様に思はれる併し果して誰であるか分らない、所がよく檢するに着物といひ帶といひ何れも私の見覚えのある品々である。そして如何にも小柄に見えるのは身體中に骨折がある爲である。此で私の姉である事が分つた。

甲南小學校まで出かけて平生さんに電報をうつ、漸くする中に甲南高等學校の生徒が姿を現はした、母校が心配にもなり、又懶しくもあつて立寄つたのであらう、甲南女學校は半壊で、高等學校はたいした事なく、生徒には全く事故のない由を聞く、伊藤一二もやつてくる。八郎の姿の見えないのが一寸氣にかゝるが他の連中と連れ立つて歸つた由を開き安堵する、私の處置の不當な爲此の二兒まで死なせてゐてはと思つてゐた所なので限りなく嬉しい、一二には何故八郎と一緒に連れて來なかつたのかと叱りつける。たゞ叱るのではない。嬉しいから叱るのである。その時の喜びは叱るといふ事に依つて表現するより私に方法がなかつたのである。それが唯一のも

し各町村の當局、消防隊、青年團等が、徒に姑息なる防水警備に終始するのみにて、前以て附近一般住民に避難の警報を發せざりしや、其措置に疑なきを得ず

靜 馨氏

三十年安住の居宅一瞬にして砂中に埋没しました、

自然力の偉大さに痛嘆措く能はざる所であります併し幸ひ本宅及び私方一同無事に避難するを得ました天祐に感謝致し且つ救助御見舞下さいました御厚志に對し厚く御禮申上げます。

家屋再建に就きましたは、住吉川治水の根本方針決定後着手致したいのですが、此の場合、一家一村の利害に打算して大局を誤つてはならぬと存じます、何分國家非常時でありますから、治水上諸設備に十分なる費を使へぬことも思はれますので、將來の水害防止に完全を期し得ない場合に於ても、大方針だけは決定されたい希望して居ります。彼の大岩石の流出を喰ひ止む方策を講ぜられたいと希ふものです。

芝川まき氏

怖ろしかつた當日の思ひ出書けば限りが御座いませ

ん。左の日記によつて御想像を御願申します。

七月四日 終日大雨降り続き住吉川刻々増水す。

激流の音と上流より流れ落ちる岩石の音
ごろ／＼と物々しく終夜眠らず。

七月五日

午前七時半、又夫阪急電車下手に併行せ
る橋を渡りて學校に行く、川水非常に増
せども未だ橋は危険と云ふ程ではなし。

重は頭痛の爲め學校を休み就床す。

大雨益々激しく益々増水す、萬一の危険
を慮り二階東窓より川の水を注視す。

午前九時半突然庭園の北手より水浸入す
之れは二町上手にて山津浪にて住吉川堤
防決潰の爲めなり。

危険なりと感じ家族女中、下男居住の別
棟家屋に在りし下男一家六人を本館二
階に避難さす。何一物も二階に運ぶ暇も
なく激流階下へ浸入し日本間の家財家具
が忽ち何處ともなく流出せるを二階より
眺めながらも一命を全うしたる嬉しさの
爲め其刹那に別段惜しいとは思はず。

下男居住の家は流出し跡方もなし。住吉
川西堤防を決潰したる水は非常なる勢を
以て省線住吉驛と住吉川の中間地區を浸
水し間もなく東堤防も西堤防決潰箇所
の對岸（阪急電車上手）より決潰し七分通
りの水は此方面に流出し本山村を浸水せ

る爲め村は三分通りの水量に減水し住吉
川の本流は流水皆無となる。

されども此三分通りに減水しても尙激流
にて渡る事出来ず、しかも此新住吉川が
私共の邸内の西の部分正門と本館との中
間を流れつゝあるのを見ては悲觀の外な
し。

午後一時迄は雨降り續く爲め減水せず電
話不通故此危難を何人にも知らず方法な
く徒らに焦せるばかりなり。

午後一時より小雨となり午後三時雨止む
と同時に減水量も著しく御影本家より主
人家族其他救援に来る。

午後四時前家族、女中、下男と其家族計
十三人身柄だけに御影の本家に避難す
此日は晝食は喫せざりしも夕食時も空腹
を感じず精神に衝動を受けて終夜眠れず
怖ろしかりし思出のみ脳裡に去來す。

七月六日—七月十五日 階下納戸に在りし家財と西

洋館に在りし家具は流出を免れしも何れ
も激流浸水の爲め轉倒汚損し之等の破片
付と南隣の大原孫三郎氏邸庭園内に埋没
せる家具家財の發掘とに忙殺さる。

以上の仕末で本日漸く整理も一段落付きました。家
屋の破損は本々園内に巨岩四個、内々園内に一個浸
入せる爲め支關の柱を折り支關前の庭園は巨石累積

期を過ぎてより迎へを出して歸宅致せました。

三、階下は床上約六尺餘土砂にて埋没、家財道具流出
（水の來るのが早かつた爲にすつかり流出いたしま
した）長男の教科書流失には母として深く心に咎む
るところがございます。

四、此度の水害は未曾有の事故かくもひどくなるとは
夢想だにいたしませんでした。只床上の浸水程度位
と考へてその應急處置だけをとりました事は大失敗
でした。後にして思へばあゝもこうも被害を幾分
軽減せしむる方法もあつたやうに思へます。當時は
近隣の人達を當家へ避難させたり、入院患者に不安
の念を抱かしめず動搖を來させなかつた事だけが今
考へて満足な思出の一つでございます。

水害後のあと片付けはなか／＼大變でございますが
床をコンクリートにしておくとか好いと存じました。
いろ／＼建築様式も研究され、又河川問題及山林問
題等も斯界の權威者の卓見により萬遺漏なく施設さ
れて第二の水禍問題の起らないやうにと切に祈るも
のでございます。

阿部藤造氏

（氏の令息で本校理科二年藤治君の令弟甲南小
學校五年生泰治君は級友伊藤孝太郎氏令息金太
君と共に同邸に避難中水禍の犠牲となりました
衷心より哀悼の念にたへません）

住吉川の大津浪は誠に三百年來の事と云はれていま
すが、平素この附近に生活してゐる者に取つては夢

して手が付けられません。階下の疊建具全部流出庭
園は一體の川床となりました。家は五尺土砂にて埋
没しました。家屋は大修理を施して其儘住むか日本
館を取毀ち再建するかは未定の問題ですが、それよ
り尙大切な事は今後此住吉川を縣が如何に改修する
かであります。

此反高林が水害に絶対に安全な土地となる様根本的
に改修せなければ私共は再び元の古巢に歸る事が出
來ません。何時の日にか再び私共は此地に歸る事が
出来るでせうか。

國府精一氏

〔出水状況〕

當日の朝は何とも感じませんでしたが、九時半頃半
鐘が鳴り非常な音響がし出て見ると、北の道を水が
流れてゐて、刻々増して來ました。そこで洋間・食堂
の絨毯を上げ、椅子を積み用意して、日本間へと來
ると、はや泥水は廊下をちよろ／＼ながれ疊もぬれ
ようとしてゐました。机をあつめつんで、その上に
疊を上げました。又地袋中の品物も二階に上げまし
た。かくする内に次第に泥水がふえて來ましたが、
建具等も出来るだけはづし疊の上に重ねました。又
食器箱も二階に上げた。そして水洗便所にうすい
古座蒲團をつめたので後片付けに助かつた。二時頃
から家の中の水はなくなつたが、二三日庭へは水が
流れ、前の通りにも急流が流れましたが、次第にお
さまりました。住吉川の本流は家の南の畠を流れて

想だもせぬ事で、天災の偉大なる人智の微少なるを
痛感する次第であります。拙宅附近の住吉川は川底
迄も五十尺もあつたものが、一瞬でその深い川底を
埋め盡し兩岸よりも川底が高くなるとは思ひも及ば
ぬ事でありました。而かも何百貫何千貫と云ふ大石が
ごろ／＼と流されて居り、阪急電車の鐵橋が五、六
町下の久原邸の前に流されてゐるなどは、その力の
強く恐ろしかつたことが想像されます。私はこの一
面の砂原を見て、來る九月の出水期の再度の被害を
恐れて、内務厚生兩大臣、兵庫縣知事閣下に意見書
を次の如き趣旨で呈出しました。

○根本的對策としては六甲山を一括國家の監理に移
し治水植林の根本對策を必要なりと存候

○河川の將來は鐵道、電鐵線上の關係を徹底的に調
査し鐵道を高架止し河川との關係を不自然ならし
めざることを必要と存候

○臨時對策としては堆積せる土砂及石塊の處分にて
これには河川沿岸に埋立築港を作ること
以上

拙宅は以御座何等の被害も被らずに済みしました。乍
然四男泰治（十二歳）は甲南小學校五年生在學中で
した。學校では九時頃歸宅を命ぜられた様で、觀音
林迄は先生のお見送りがあつた様ですが、住吉川の
激流の爲め渡川歸宅出來ず友人の伊藤孝太郎氏令息
金太氏と同伴同氏邸に避難中、同邸が九時半頃の大
津浪の爲め流出し終に伊藤氏一家と共に遭難しまし

みました、本當の元の住吉川に復してからは湧き
出る水が流れる位です。

〔被害状態〕

水の割合に被害は少かつたが、家の北の垣と、南の
菜園が全滅、井戸がうつまり、家中に泥・砂が一尺
ばかりたまつたが、庭には芝生が頭を出してゐる程
度です。鶏をかつてゐましたが、雞五羽・雌鳥二羽
が埋まりました。

〔感想〕

此の度の水害は實に人間が自然を侮り、自然を征服
せんとして起つた事で、此の爲に如何に人間の力が
小なるか、自然の力が大なるか、天が示してくれた
物と思ひます。以後は、自然に對する心がけを改め
ねばならぬと思ひます。

田所嘉四郎氏

一、五日午前十時過ぎ折柄の豪雨の爲に大石川の橋梁
に大石、流木等引掛り爲に東西に氾濫いたし大石川
附近の大慘狀を呈するに至りました。東の門扉の下
より濁水流入いたし次いで北隣の家より約三尺低地
の事故隣間に境界の板塀を破壊して物凄く、下座
敷に流入直ちに一同二階に避難致しました。東側門
前の道路は激流と化して滔々と流れ、階下は大川の
流れのやうな状態になりました。水の引いた後では
土砂が床上六尺餘も堆積致し寸時にして變化しまし
た狀況に只々呆然と致しました次第でございます。

二、入院患者及家族一同無事、小學生二人は午後危険

たことは千秋の恨事で、この大津浪の回顧と共に忘れられぬ思ひ出となりました。(七月二十八日記)

水田美織氏

(1) 出水時日、昭和十三年七月五日午前六時十分頃突然河水が土砂と共に表門を破壊して宅地内に浸入しアツといふ間に宅地内を北より南に貫流し南側約一丈許り隣地より高きため激流は一大瀑布となつて南方に落下すると同時に西側河沿ひの「コンクリート堀」の脚下を流れ河の石垣の崩壊と共に地盤陥落し「コンクリート」堀約二十間許り河中に沈み込み激流を本の河筋に誘導せり。午前十時半頃表門の位置が一丈許り浸蝕せられ本の河底と同一の深さとなるに及び激流は宅地を貫流することを止めて此の新河底を経て舊河底に還流したり。

(2) 水害原因神戸水道路天井川架橋が流木、流失家屋、流出死體等の爲めに完全に閉塞され茲に水の通路たる機能を失ひ此がため水は其捌け口を東西に求め東側沿ひの小生宅地を午前六時より同十時半頃迄約四時間半南北に奔流したるものなり。

(3) 本山村に限らず六甲山下各町村の南北貫通大路線に此際新規に三間巾の排水路を構築し將來洪水の危険を可成分散せしむること。

(4) 橋を水面より相當高く架し洪水に閉塞せられざる様設計變更をなすこと。

(5) 六甲山下の私有林を保安林に編成替をなし檀の植林に努力すると同時に朝鮮にて既に成功せる砂防

工事を阪神間の溪谷に應用至急實行すること。

(6) 山津浪の原因となる觀光「ドライヴウエー」の新設の如き外國の模倣を地質の異なる阪神間に輕率に應用せざる様慎重を期すること。

岡本弘馬氏

(出水状況)

此度の水害に付き寺澤先生及生徒諸君を御遣し被下親しく御見舞被下御厚情感謝に堪へず。當家は菅屋川の下流に近く其邊は川幅廣く、水のはけよく水が此邊の堤防を越す恐れ殆どなく當日の大雨にも敢て不安を覺えざりし所正午過ぎ俄に川と反對の方面より流水し來り遂に床上一尺の浸水を見るに至れり。後より聞けば午前既に菅屋川上流阪急附近は堤防決潰し大騒ぎをなし居りたる由、堤防を破りたる水は村内を東南に縦斷し村内東方宮川の氾濫と相合し海に出でんとしたる處防潮堤に阻まれ出口なき爲め水嵩は次第に増し東西に擴がり遂に當家地區に迄及びたるものなり。逸早く防潮堤を切り水はけを作らざりし事と堤防決潰を逸早く警報せざりし事の斷と用意とを缺きたる事がかくの如き被害を大ならしめたるものにして實に遺憾に不堪、將來の水害防止に就ては山の砂防工事堤防の強化、橋梁の改築、防潮堤の排水口新設等専門家の研究すべき事項多々有之べしと思考す。

田中二郎氏

數日來の豪雨で五日の朝は住吉川の増水甚しく濁流

斯ういふ有様で此の未曾有のアクシデントはほんの數十分の中に住吉一帯の大住宅街を廢墟に化したのであつた。

若林金吾氏

一、私の家は舊岡本梅林の眞下にありますので相當高臺であります。東側には約一間半の徑と幅三間程の空地を距て、今回氾濫した天井川があります。道路より私の屋敷迄は約二十尺程あり、其徑に沿ふて屋敷内に約六、七十年を経過した松の太木が六、七本あります。空地(一) (二) 及び道路は天井川の底から約五尺程の高さです。空地(三) は空地(二) より十尺程高く、私の屋敷より十尺程低い。空地(四) は所謂舊岡本梅林で數年前から住宅地に開拓して居りましたが、昨年以來積極的に此工事が進められ最近漸く石垣も完成し、既に賣約済だとの事です。此新宅地は私の屋敷より五尺位高位に有ります。

林邸の屋敷は三段に分れて居りますが、何れも天井川より一丈位の高さに有ります。

二、此附近に於ける天井川は幅一間位で深さは所に依り相當相違はありますが、大體路面より五、六尺あります。天井川には平日も上流は相當水も有りますが、是れを大部分林邸の東側の道に沿ふ小川に取つて居りますので、本流は殆ど水が有りませんでした。然し一旦大雨がありますと忽ち小川を閉ぢ全部本流の方に流す事になつて居ります。従つて豪雨の

時等は水量が急に増加し、轟々たる水の音の爲に安眠を妨げられる事も珍らしくありませんでした。此附近の天井川の勾配は、地形の關係上相當急であり二三尺乃至四五尺の落差が所々にありますので、水量の増した時には小さい流の如き觀を呈します。

三、天井川決潰當時の實況

前夜來の豪雨の爲に水量は非常に増加し巨石が濁流と共に流れる音が身に喰入る様でありましたが、五日前六時十分上流の方が崩潰したと見え轟然たる音響と共に林邸の東北隅より大浪が押寄せて其附近の電柱を打折り、私宅の東一帯は勿論の事北側迄一面に水となりました。其際間約八尺位の門柱の上の外燈を破壊し門扉を取去りました。當時は判然としませんが、此第一回の浪の爲に林邸及び林邸裏の堤防も決潰し田邊方面阪急電車に到る間が之が爲に害を被つたものと考へられます。此大決潰後豪雨は依然として降り續き水量は少しも減ぜず、午前中に私宅東側全部を洗ひ去り水勢は眞直に私宅へぶつて來ました。従つて家及び邸の流失も到底免がれぬものと思つて居りましたが、本家下の地下室が鐵筋コンクリートであつた爲に、此の恐るべき水勢に直面しながらよく耐へ家には何等損害も受けて居りません。只道に沿ひ地下室へ入り込んで居た松の大木二本が残り屋敷の三分の一即ち東側一面は洗ひ去られました。

四、天井川に關する口傳

今や堤防に溢れんとして居た。先年の例もあり少しは氣附はれる状態ではあつたが、大したことにはなるといふと割合樂觀してゐた。前夜歸つてゐた大學の子供が水勢を見に出かけた直後の事、四、五人の消防夫が土足のまゝドヤ／＼と上り込み「水だ危い」と叫んだときは既に水は猛烈に土砂や石と共になだれ込み臺所や玄關に押寄せ居た。直ちに重要品をまとめ、女中達には各々の荷物を持つ様に命じ辛うじて二階に上らんとした時は濁水は物凄く階下の壁や建具を突き破つてゴー／＼と流れてゆく。二階へ辿り着いてホッとした時先刻外に出て行つた子供が居ないのに氣が付いたが、此の流れ方では如何する事も出來ず、剩へ家全體が地震の様に震動して今にも家屋諸共流されて了ひそな氣さへする。而も豪雨は益々激しくなる許り、一時も早く戻つて來ればよいと願つて居た。とやがて三十分ほどしてビショ濡れ眞青な顔をして庭傳ひに歸つて來た。その内附近で水禍に會ひ漸く宅まで辿り着いて來た人も三人あつた。又甲南小學校より避難して來た二十名餘りの人達は皆恐怖と疲勞で全く氣の毒な状態であつた。それ等の方々には手許にある限りの浴衣、シャツを出して着せたが飲み水の全くないには困つた。その内方々より握り飯、壽し、漬物、飲料水等を運んで頂いた時はほんとに感謝そのものであつた。三十分程して水流が次第に代り附近の流水も少なくなりやつと安堵したのであつた。

今から十三年前私宅を建築する際に、地中の到る處から巨岩が累々として出るのを見て、且つて此地方は大洪水に荒されたのではないかと考へて居りました。然るに今回の水禍に際し當村の古老談に依れば今から約六十年前にも今回同様の洪水が此附近にあり、現在天井川の上流にある松の木も當時に植ゑたものであるとの事です。偶々今回の水害に倒れたる松の木輪を數へますと六十二、三あり右古老の言と略一致する様に考へられます。十三年前に建築する迄の天井川には今日の如き堤防らしきものもなく、川幅も相當廣かつたのが其後改修されて此様になつたものです。昭和十年の夏二回東側の空地にまで多少の氾濫をしたといふ程度のものでありまして、それ以上の災禍は見ませんでした。

(五) 本校尋常科生の水害に對する作文

水 害

一A 淺野 二郎

「ザイツ」といふ屋根をうつ雨の音、僕は又今日も雨か、とがっかりした。しかしよく降るなあと感じた。雨は續なくりに吹つける。長くつは、はいていけな

いらしいがこの雨では學校でもゆるして下さるだらうと思つた。傘を折られないやうにしながらやつと三宮驛についた。電車はよくこんで居た。ドアの所に立つて外をながめてゐた。僕はこの時もう一時間たぬ中に自家が来びたしになるなどとは夢にも知らなかつた。住吉驛に汽車がとまつてゐる。僕はこんな所に汽車がとまるはずはないのになあと思つたが別に氣にもとめなかつた。しばらく行くと又汽車がとまつてゐる。ます／＼不思議になつた。電車の中の人も色々と話し合つては不思議がつてゐる。この邊は水が出てゐたらしかつたがそれはわからなかつた。本山驛に着いた。此時下り線は最早や不通になつて居た上り電車も僕等も乗せて行き、次の電車からは全線不通になつたらしいが此時は知らなかつた。友達と一しよに線路にそつて、歩いて居るとすぐ近くの川が氾濫して其の邊は通れない。皆面白がつて喜んでゐたが、橋が無くて渡れない。僕と富山君は長靴をはいて居たから平氣で「ジャブム」は入つて居た。皆僕等が水の中でも自由には入つて行くのでうらやましがつてゐた。そして

「僕も長靴をはいてくればよかつた」とか、
「君ら、いゝなあ」。などと言つてゐた。

橋がないので鐵道の上を歩いて行つた。だがどこまで水がたまつてゐて、皆大弱りだつた、が僕は鼻高でわざと水の多い所を歩いて見た。しかし長靴も役にたなくなつた。だん／＼水が増えて来て靴の上から

水が入つて来るやうになつた。もつと上の方の道を

行かうと言つて行きかゝると、上の方もだめだとがっかりしたやうに上の方から来る。ひざまでつかれば行けるが其の時はなんだか恐しかつた。(後ではそのくらひは、少い内であるが)水の来ない少し高い所を今にも落ちるかと思ひながらよこにはつて行つた。運の悪い時はしやうのないもので其所にはいばらが生えてゐる。やつと足の踏み場も有るか無きかの所を手もつかまる所が無し一歩あやまれば水の中だし雨は容赦なく降りかゝるし、こんなに苦しい事はなかつた。氣が焦り立つと共に家が心配になつた。が家の方は大丈夫だらうと思つた。やつと川の中に少し早瀬になつて草が生えてゐるのが見えたので喜んで飛移つたが泥で「ズブム」とは入る。皆は編上のまゝなのでとても弱つてゐた。僕がひよつと向ふを見ると向ふ側を歩いてゐた先頭の杉田君が、こえつぽへはまつた。僕等はびつくりして立どまつたが大へん氣の毒だつた。僕も注意しながら行つたが、終に水の中へ、はまつてしまつた割に淺かつたが首までは入つた。やつとのことで這ひ出したが、長靴に水はたまるとはしほらなければならぬし、とても弱つた。やつと坂道まで来た。こゝは水が来てゐないので水を見に来て居た人が一ぱいだ其の人たちが僕等の姿を見て、「まあ、可愛想に」。などといふのでよいけい悪しくなつた。どうかこうか學校へ着いた。ほつとして、教室へ来た。教室の中は水の話で持切である。大急ぎで教練服に着かへると濡れ

た服を乾かした。上衣はよいがシャツがぬれて氣持が悪かつた。

一時間目の授業がはじまつた。缺席者が大分居た。ぼつり／＼と來だしたが皆はそろはなかつた。一時間目もすんだ。二時間目は數學である休の時皆便所へ水が来て行かれないのでこまつてゐた。長靴をはいて雨天體操場へ行かうとしたが腹のへんまで水があると聞いて行かれなかつた。教室へかへつて、窓からぼんやり外を見て居た。運動場は泥海と化し、あの美しかつた校庭ももうだいなしと思ふと残念でたまらなかつた。そこへ先生がは入つてこられて、

「今日はこれで授業はありませぬ」。

と言はれた。皆「わあつ」といつて大急で歸り支度をして校門を出た。がさどどこから歸らうかと思案したあげく、やつと阪急の線路つたひに行くときまつたので、そこまで出た。少し高くなつてゐるので水は來て居なかつたが少し行くと低くなつて水が來て居ても行けない。その横の路をやはり水につかりながら行つた。もう水の中を行くのも平氣になつた。

本山驛について見ると不通だといふ。其の時はすっかり落膽してしまつた。住吉驛まで行くと電車が出ると言ふデマがとんで皆に止められながら線路つたひにあるいて行くものもあつた。僕も行かうか行まいかと色々思案したがどうともきまらず停車中の電車に乗つて休んで居たがどうも家が心配になるので行かうと決心した。皆本をかつたりキヤメラルをたべたりして暢

氣にして居るが僕はそれとてではない。たう／＼行ける所まで行かうと言つて三四人で出かけた。途中線路が水で洗はれて中ぶらりんになつて枕木の上より歩けない。もしふみあやまれば「ドボーン」である。やつと不通で停つてゐる列車まで來ると、窓から友達か首を出して、

「これから先はとても行けないから此處へ上つてこい」。

といつた。行けなければし方がないので列車によじ上つた。其處は寢臺車だつたので上衣をぬいで乾かした。上級生が、「今日は此處で翌日まで居なければならぬいかもしれんから腹をへらさぬやうになるべく物を言ふな」と言つた。皆はそう言はれても心配顔で外ばかり見てゐる。僕も心配でたまらずいつ水が線路をこゑておしよせても逃げられるやうに支度をした。

其の時不意に水が越えたと、といふ聲と共にその邊をトランクや何かをもつて、裏の方へとびおりる人々の姿が見えた。僕も、驚いて上級生と一緒に飛びおりその拍子につまつて、がけからころげをちた。随分方々うつていたかつたが、そんな事は言つて居られない。頭上に木材が水と共によつと出た。駄目だとは思つたが、もうどうでもなれと泥海の中を無茶苦茶に走つた。その後で「ゴーツ」といふ聲を立て、水が瀧のやうに上から落ちて來た。こんな所に居てはと思つて歩かうとしたが足が泥にうまつてうごかない。と目前に熊手が出て、

「早くこれをつかめ」。

といふ聲がした。

やつと、救ひ出されて、甲南女學校まで皆と避難した。上衣を繩飛の繩にとほしてほしておいた。火鉢にあたりながら色々心配さうに話してゐる者もあれば、窓から、外の濁流をながめて居る者もある。僅か一時間も十時間の様に長かつた。黒板に、

「おなかのへつた人はおむすびを上げます。但し二人に一つ」。

と書てあつた。二人に一つでは食べる氣もしないので食べに行かなかつた。別に腹もへらなかつた。そこへ小野先生がパンツ一枚でこられて、「神戸の方へかへるものはつて行つて上げるから皆私についていらつしやい」と言はれた。僕等も早く歸りたくて、わく／＼して居たので乾してあつた服をぬぐのも面倒と思つてはさみでちよん切つて引かけると、先生について行つた。ところが運動場が渡れない。轟々と渦をまいて流れて居る水を見ると誰でも尻ごみする。僕等もほと／＼困りぬいて居た時、其處に居た人が向へ渡して上げやうと言つて先づ僕をおぶり、渡して下さつた。其の時は涙の出る程うれしかつた。皆渡してもらつた時先生は

「先生の通る所をちゃんと歩いていらつしやい」といはいれ先に立つて行かれた。とても流が強く今にも流されそうであつた。緩やかな所へ出たかと思ふと又急流、やうやくにして、國道に出ることが出來た。

ふと見ると僕の立つてゐる所は屋根と高さが同じである。其の少し高い所から氣眞班が盛にとつてゐる。

僕達の方へその寫眞機をむけたので顔をそむけた。

先生に分れてから、「てく／＼」と重い足をひきずりながら住吉驛まで來た。途中、酒の瓶を片手に、よろめきながら人夫風の男が二人大きな聲でわめきながらやつて來た。そして互に、

「おい、お前の家も流れてしもたんか、おれの家もあらへん、この水の畜生が……」と盛に目の邊をこすつてゐた。この人達もあの水魔におそはれたのだなと思ふと可愛想でならなかつた。住吉川の所は、六疊程のひろさの石が驚く程流れて來て居た。

住吉からも電車は出て居るはずがない。すると御影から阪急が通じてゐると聞いた。大よろこびで行つて見ようと阪急目あてに歩いて行つた。がこの邊は水が出て來てゐないので歩きやすかつた。神戸の方から來た人は僕達の姿を見て皆驚いてこれから先はこんなですか、と言はれて行き合ふ人に皆そう言はれるのではづかしかつた。其の時上の方から來た人が

「阪急なんか通つて居るもんですか」と言はれてその場で石に腰かけてしまつた。しばらくは皆立つて元氣もなく、べた／＼と土地の上にすはりこんでたど呵呆のやうにぼかんとした。腹は次第にへるし、つかれるし、心配はますます／＼つるし、もう歩かないで居やうかとさへ思つた。しかし皆が歩き出したのでやつぱりそれにつれて歩いて行つた。六甲道からなら通

つてゐると勵まされてゐる。とつても遠い。長靴に砂が入つて、まるで足にペーパーでもかけてゐるやうだ。良いことがあれば悪い時もある。こういう時は、普通の靴の方がよかつたかもしれない。砂を出すまでもなく、やつと停車場の見える所まで来た。近いやうで中々遠い。ふう／＼いひながら、来て見ると、「なだ」からだといふ、その時そいつた驛夫をなぐりたふしたくなつた。だが、次だ／＼といはれてそう言はれたからこそこゝまで來られたのだ。始めから「なだ」までと言はれたらそれこそ歩けなかつたらう。

こゝが最後の五分間とばかりに、一生懸命歩いたがとてつかる。皆しよんぼり下をむいたまゝとぼ／＼と歩いてゐる。ふだんこのやうな恰好をして居たらそれこそ見ものになる。柔道着をきたり、教練服の上下を一しよに着たり、はだしの者やらびつこをひいて居るものもある。

大石川を渡つてまるでひきすつてゐられる見たいにしてホームへは入つた。椅子もなしそのまゝホームへへたばつてしまつた。長靴をさかさにすると泥や水が驚く程出て來た。そして足は土左衛門の足のやうになつてゐた。

三十分もしたころ、やつと電車が來た。のろい／＼やつとホームへは入つて來る。人々は待ちかまへて居て、とまらぬ先から、我先にと窓からとび込む。それはまるで大喧嘩のやうであつた。やつと乗りこんだが近くに居た人が「布引の下の方は家もたんと流れまて

すからなあ」と話して居た。僕はびつくりした。では家が流れてしまつたかもしれない。もう心臓が早鐘の様に鳴るし、早く三宮に着けばよいと氣をわく／＼させた。

やつと着いた。僕は、かけだすと段々を三段づゝとびおりた。下は水で一ぱい。その中もかまはず走つた出口まで來て立どまつた。土臺がつんであつてその向ふは大人の首まである。此處を渡らなければならぬ。僕は驛の中をわけもわからずかけまはつた。しかしどこも水でとりかこまれて居た。僕はもとの所からとびこむつもりで居た。僕がとび込まうとしたとたん、「あぶない、お前なんかせいたゝへんぞ」。

と人夫にしかられた。そこへ渡らうとして居た人が「おうて行つてあげよ」。

といつておぶつてくれた。この時はどうお禮を言つてよいかわからずぼんやりしてゐる間にどこかへ行つてしまつた。

上から流れる水にさからひながら上つて行つた。早く家の様子が知りたくてその邊の様子なんか目にも入らなかつた。十字路の所で遂に一二町流されたこの時は全く生きた心地もなかつた。こゝで家も見ずに死ぬかもしれないと思つて情けなかつた。その時僕のバンドに何かひつかゝつた。人夫が熊手でひつかけてくれたのである。そして屋根の上へひき上げられた。そしてこゝからうごいてはいけないといはれた。けれどそつとぬけ出し又水の中にとび込んでやつと一時間もかゝ

つて家にたどりついた。家は下は泥が一ぱいでそれを使用人が出してゐた。皆僕の姿を見て頭から足の先までつく／＼ながめてゐる。僕は二階へ上がるなりそのまゝ、く／＼とすわつしまつた。

水 害

3 B 安宅 謹一

きよう怖のあの日！ 例によつて午前七時半頃試験の問題を空想しながら登校、雨は猛烈に飛まつを上げ降りしきつてゐる。國道の所へ來るといほうが一箇所決くわいしかけてゐるではないか？ 松の木をほうりこみ、汜らんを未然にふせこうとしてゐる人々、水は茶色を帯びて滔々として何物をも近ずけずと云つた形。水がたまつてゐる道路に歩を運び學校へと急ぐ。今から考へても其の當時にはあの様な尊き人命を奪ふと云つた惨狀を豫期しやうか！ 薄と云ふ薄は皆、あふれ水が道路を洗つてゐる中を進む。ぬれぬずみに化して學校に到着、級友の数は數へる程度、皆試験が延びはしないかと嬉しい豫想の言葉をかわしてゐる。雨は依然として降りしきる。時計の針が前進するに連れて教室内はそう然としてくる。試験の事など忘れたかの様に時を過す。然し一時間おくれで試験は開始された。試験中は流石に自然のものたらす雨と云ふものを離れて只ペン先を力こめる。たしか博物の試験中だつたらう。バックネットの後方がけが物凄しい音響を

残して碎け落ちる音を耳にした。試験を終へた高等科生の何事ならぬ叫びがひびいてくる。待ち遠しかつた試験終了を告げるサイレンがなつた。一同は期せずして窓の所へ集中した。食堂の方から庭球コート・バスケットコートを通つた濁流が正門に突進してゐるではないか！ ひなんみんの群が續々學校におしよせてくる。

此の恐ろしき水勢をついて歸宅をする者、自分も其の一人であつたが、水勢強く如何にしても歸れないので再び學校にもどつてきたのだ。其の中に歸校することならぬとおたつしがあつたので歸りたい氣持は萬々ながらやむなく學校にろうじやう。雨は依然として降りしきる。恐怖はつる一方。にぎり飯によつて腹を満足さす。其の中に雨は小やみになり何時しか止んでしまつた。それから水のひくのをまつて家に歩を運んだのは二・三時間の後、濁流をのりきからうじて家に到着する間に見たものは何か？ 家の倒くわいの物更い惨狀である。それこそ筆舌には盡せぬ。只水舌自然の力偉大さにはきようたんする他の何者をもたない。

家に歸つてから其の當時の慘狀恐怖についてきく、只もうあ然とするのみ。此の水害にうけた自分の感慨をのべて結びとする。

數年間かゝつてごうしやをきそつておつた家々が一しゆんにして消えてしまつた。これをたとふるに人間がいかに苦心してさいをためてもすこし怠けると一

しゆんにして失はねばならない。と云ふ事を感じた。水勢の偉大さ、自然の偉大さみなわかつた。水まをのがれていきることが出來た自分の幸福を喜ぶ。

水 害

2 B 大谷 光 紹

本年の梅雨は入梅の六月十一日より始と連日の雨天で降雨日數に於ては三十四年ぶりのだら／＼雨であつたとの事だ。そして七月三・四・五の三日間こそは中々の豪雨で、殊に深刻に暴威を振つた五日の雨は戦慄すべき大山津浪を伴ひ、未曾有の洪水となつて住吉川畔に襲來し、濁流滔々上流より巨大な岩石、砂礫を運出し、兩岸の堤防を決潰して住宅も交通機關もその他あらゆる文化施設も、一朝にして濁水の奔流下に蹂躪されてしまつた。あゝ呪はしかりし凄慘な水禍よ。

顧へば、五日前僕は午前七時半登校すべく豪雨を顧いて家を出たが、いつも渡る住吉川は、増水してはゐるものゝ水位はまだ橋に達するには一米半もあり、僅か一時間後に彼の大水害現出しようなどとは夢にも思はれなかつた。學校に着いて西館前の水溜りを迂廻し教室に入つてそれから博物館教室に行かうと、階段を下りてくると、つたひ廊下のあたりも講堂と東館との間も一面の水溜りと化してゐるではないか。博物館教室へ行くのを止め、水に洗はれてゐる運動場をガラス越し

に眺めてゐる中、十五分ばかりも遅れて自修として一時間目が始まりやがてその時間が終るや直ちに歸宅してもよいといふ事になつた。僕は水の爲にはぐまれ二階から廊下つたひに西館の玄関に出た。併し、この時先に校門を出た友達が住吉川を渡れないといつて引返してきた。僕は職員室にその旨を報告するや間もなく學校では住吉川以西への歸宅を禁止した。住吉川は丁度自修時間最中に決潰したものらしく、解散がもし決潰直前であつたならば、それこそ我々學友の間にもどんな慘事が惹起されてゐたことか。やがて學校への避難者を背負つたり或は手を引いたりして收容する高等科生徒の美しい姿や、正門を開いて水の流通を計らんと濁流と戦ひつゝ作業する上級生の雄々しい姿が窓から見られた。やがて十一時頃雨が上がり日が照り始めたので、本館の屋上に上がつて四方の恐しい被害の状況を眺望してゐる中に晝飯となり二個のお握りを二回に分けていた。やがて二時頃全生徒が講堂に集まつたが、「歸宅出來るさうだ」。との先生のお言葉があり、解散する事ゝなつた。そこで僕は三十人ばかりが一團となり歸宅すべく先づ東門を出た。鐵管の露出した道、岸を洗はれ流木の立塞がつた天井川べりの道を通つて、不通となつた省線の土手に辿り着き、右も左も一望の泥海と化した沿線の凝い光景に唯唯然としつゝ西に歩を運び間もなく激流の爲に土手を洗ひ去られて宙にぶら下がつてゐるレールの枕木を渡つたが脚下に流れる轟々たる濁流の上をしかも人が通るはず

みで動揺するレールの梯子は平常にはとても渡れさうにない。こんな危険な所を幾箇所渡つたであらうか。漸く干上がつてしまつた住吉川を越え、中半土砂に埋もれて水腫に腫脹された母校の惨状に且は驚き且は悲しみつゝ歸宅したのは凡そ五時過ぎであつた。

僕は何の被害も受けて居ない我が家をまのあたり見て先づ安堵したが、話によれば一軒東の有馬道にも一時は激流が襲來したのださうで成程アスファルトが高く盛上がり雨側の軒下には泥が着いて濁流の名残を止めてゐた。安心も東の間蟻の燈の下で夕食を済ませると今度は僕の家も危いとの事である。一體この家は上流の白鶴美術館から略々真南にあり、そこから南走する急傾斜な道路が家の東西程近くてゐるので、「もう一度降雨があれば、美術館附近で決壊しさうだから、サイレンがなつたら立退くよう」。との警報が出たのである。もしかうなれば附近一帯は愚か住吉村全體が水腫に見舞はれる。小雨がきたり、警報が發せられたり不安は尙も續くので、小學校より避難し來た人々と共に田、邸に避難して一夜を明した。その後八日に至り、午前二時頃再び同様の警報に眼を破られ、戦々兢兢水禍に對する不安は去らず且つ天氣が定らないので遂に歸郷する事にした。

學校では八日から土砂取除の作業といふので、七日の晩からスコップを求め、思ふ存分勤勞の尊さを味は

岡君が、

「こんどは上の方で川がきれいになり。」

といった。僕はなんだかへんな氣持がした。西門の道へ行くとき先刻より大分水が増して居る。もうしかたないから南へ行かうと相談して歩きかけると、汽車の線路の横の道にはまだ水がきて居ない。そこへ行かうと思つたが僕は急に流れかけた。松井君と岡君とが傘で引張つてくれた。やつと上つたものの、これからどうしやうかと思つてゐると、丁度朝からとまつてゐた汽車の人が、こい／＼と云つてくれたので客車に這ひのぼつた。そして僕等ははつとした。この汽車が僕等の生命の親であつたとは。僕等はなるべくいす等をよこさない様に立つてゐた。上衣は全部そこらに掛けた。靴の中の泥もはらつて腫もふいた。

窓から外を見ると水の量は増して前の道にも水が來た。本山小學校の邊は泥の海と化し水は東へ東へと進んでゐる。雨はしきりに降つて居る。國道の方で消防の非常サイレンが鳴つて居る。前の客車を見ると避難民がたくさんゐる。ガヤ／＼と聲がして中學生が這入つて來た。それは二年生の二川君等であつた。甲南の者だけかたまらうと言つてすはつて居ると、A組の南君なんかも來た。皆で話合つて居ると車掌が來てもう一つ後の車に行つてくれといふ。なんでやといつて聞くと、

「前の方に水が來たからです。」

ちと思ひつゝ寢についたが、歸京してはその望も仇になつたのである。併し京都にあつても友達が一心に作業してゐる時に僕が出られないのが口惜しく何とかして住吉に歸り、作業に参加せんものと十一日には大阪まできて雨の爲に交通を遮断されて引かれし、翌十二日にはもう暫く見合はせた方がよからうとの事で思止まつた。漸く十四日から参加する事を得、友達と一生懸命勤勞を共にした。かくて僅かの期間ではあつたが勤勞の尊さを最もよく味ひ且自分の責務の一部を盡して休んで不愉快であつた氣持の幾分を解消した。

水害の日

一B 酒井淳三

朝いつもの通り家を出た。一日から降り続く雨はまだやまない。川の水は昨日よりも増水し、堤防のけつぐわいが氣づかへれた。何だかへんな氣持がしたので道をかへて學校に急いだ。その途中の溝は全部あふれて水は道を流れてゐる。國道のトンネルを通つて汽車の線路を見ると急行車が停つてゐる。僕は東海道本線が不通だなと思ひながら足を早めた。

僕はズボンをびしょ／＼にして登校した。教室に入るとまだ少ししか來てゐなかつた。ハンカチでズボンをふいて居ると坂本君が來て、

「阪急が不通だから御影から歩いて來た。」と云つて居た。授業する時には二三人をのけて全部出

にすはつた。窓から見ると、外は一面に茶色で、／＼といつて居る。すぐ前をオートリヤカーが流されて行く。水はだん／＼ふえてもう線路の上にあふれやうとしてゐる。僕は頭の中で、「水、水は何とおそろしいものであらう。」と考へた。雨はまだやまず。時間の立つのは全然わからない。水は遂に一番北側の線路まで來た。僕等はそれをたゞじつと見てゐる。心の底から恐ろしい様な氣持がわいて來る。皆でもう一つ水が線路を越したら何處かへ避難しやうと決心した。車掌と機關手が來て、

「なるべく車の中心をとつてもらいたひが。」

といった前の車に乗つて居た避難民は續々後の車に來る。嗚呼遂に二番目の線を越した。避難民の中で、

「死ぬなら一しよに死にましょ。」

と聲が聞える。僕等は遂に第二の避難場たる甲南女學校に避難を決定した。おゝ線路の南側は水は浅くなつてゐる。郵便屋さんを先頭に水を渡つた。水は浅いが泥でひざの邊まですぶ／＼といはる。北の垣をやぶる腰まで水につかつたどつた。又はつとした。そこで約二時間程してゐると小野先生がびしょ／＼になつて這入つてこられ、

「もうたぶん歸れると思ふ。」

とおつしやつたので先生の後について歸る事にした。女學校の前はまだ／＼と水がながれて居る。先生や二年生の人々に渡してもらつて、國道に出る。國道には水を流れてゐないけれども石・木・砂の山だ。垣

席して居た。一時間目は數學で、寺澤先生が「今日は全校で大分缺席してゐるから授業を中止するかも知れない。」とおつしやつた。そしてその時間は復習をあたへられた。先生が出て行かれるとすぐ水の話が始つた。一時間目すんでから便所に行かうと思つて行くと便所の所に水が一ぱいたまつてゐて行かれなかつた。皆教室にかへつて居ると引間先生がいっしやつて、

「今日はこれで授業を中止する。歸り途あまり無理をせぬ様に。」とおつしやつた。僕は一人では危険と思つて、岡君、松井君等をさそつて學校を出た。本門を出てから二すじめの道を西にまがらうとすると水が一ぱいだ。しかたなくズボンをまくり上げ西門のすじを南へあるいてゐると、本山小學校のところで青年團の人に出會つたその人は、

「住吉川が國道の處で溢れたから眞直行くと危いぞ。」と教へてくれたのもう一つ西の道を下に行けば國道のトンネルの處に行けるから其處を行けば大丈夫と思つて行つて見ると汽車の横の道を濁流がたう／＼と流れて居て行かない。僕は完全に歸途をさされた仕方なく上の方へ行かうとすると、ざあ／＼と水音がして黄色な水がまるで大きな波の様に流れて來た。その上に桶や木片が一しよになつて流れて來てゐる。僕等は必死となつて逃げた。そしてもと來た道にまがると

々たるアスファルトの姿は見えない。急に二川君が、「酒井君お父さんが來てるぞ。」

といったのではつと見ると、父と男仕がきて居た父はすぐ、

「兄さんは。」

と聞かれた、僕は知らないよといふと心配さうにさうかといはれた。僕は男仕と二人で家にかへることにした。空は青々として日が照り出した。そして空は今日の恐ろしい日を知らぬかのやうに。僕は家で母が心配してゐるだらうと思つて男仕と二人で急ぎ出した。

水害の日

二B 小島茂俊

忘れもしない七月五日だ、一昨日來の雨は五日に入つても止まず、いよ／＼はげしく大豪雨となつた。學校に行く時最早や天井川にかゝつてゐる橋は二三切れでゐた。しかたなく大勢一しよに遠廻りをし阪急の線路を通つて學校に行つた。一昨日來の雨もすこし小降りになつた。然し薄は氾濫し道が川のやうに水ばかりになり浅い水を越え急な溝を渡つてやつと學校にたどり着いた。

學校では此の豪雨にかゝはらず組では半数以上も出席し電車が雨の爲に遅れた爲か二三人遅れて學校にやつて來た。一時間自習をして家に歸ることになつた。僕は作業ズボンを膝から上にまくり上げ運動靴を

はき皮靴を雨腰につるし悲壯な支度をして學校を出た。雨は先にもまさる豪雨となつた。道路は川となり眞黄色な濁流は所々に渦をまき電柱にぶつかり飛沫を上げ、ガードの石垣にあたつて飛びちり富士川の急流にまけじと荒れ狂つてゐる。阪急の線路を通り下をり途中危険なく省線橋津本山驛に着いた。電車は不通で一臺驛に止まつてゐた。電車の中に入つて休息した。その間に雨は益々はげしく、水はどん／＼増し線路のレールを没するまでになつた。雨は益々はげしくなるばかりである。後で新聞を見るとその時つまり午前十時頃が一番はげしかつた事を知つた。僕と福井、綿谷、岩井、西松、森本君の六人は到底電車も通じそうもないし、大阪に行くうちには電車か自動車があるのに違ひないと考へ、又一生の思ひ出話になるであらうと思ひながら一行六人は省線の線路すたいに東へ東へと向つた。一行は黙々と歩いて行つた。驛を出てすこし行つた所では線路の堤が切れて線路の眞下を眞黄色な水がしぶきを上げて下の方に落ちて行く。若し足をすべらしたらそれこそ大變流れにさらはれなければならぬ。枕木を一步々ふみしめながら濁流の上を渡つた。道路で大阪のタクシーが立往生をしてゐる。だん／＼青屋驛に近づいて行つた。向ふから來た人に尋ねると青屋驛は青屋川の氾濫によつて水がつかつて驛には行けないと云ふことであつた。我々一行は路をかねて下にくだつて國道に出る事にした。青屋川の氾濫によつて附近は膝を没する程である。川の方から濁

水害の思出

一A 富山 康吉

「ザア／＼。」すごい雨だ。校舎の窓から見ると運

りとしたものが流れ氣持が悪い。黄河揚江子の水も多分このやうなものだらう。本山驛の前に水が一ぱいたまつてゐる。驛の周囲にはむしろ土塵をつみ上げて水のはいるのを防いでゐる。パシヤ／＼と水の中を通つて中はいつた。

驛員は省線は不通で住吉川はとも渡れないと言ふ。「何時頃通じますか。」と聞くと、「この調子なら何時や分りません。」と言ふ。大變だが仕方がないので待つことにする。水がはいるので二年生の者がほろきではき出してゐる。しかし水は少しもへららない。僕もかはつた。ぐ／＼と掃くと横から新しいのがす／＼はいつて来る。それを又ぐ／＼とやる。土塵のすき間から水がじび／＼わき出す。一生懸命やつてゐるとつかれて來た。外の者にかはつてもらつた。約半時間水にとらめつてゐた。

水の勢はへらず、雨もますます降つて来る。學校に居ればよかつたと思ふ。かうして居ても仕方がない。何時までたつても同じことだ。一寸危険を感じたが線路すたひにかへる方がましだと思つて、佐藤と澤野とを誘つて三人で又じやぶ／＼と出かける。

線路へ上らうとすると前の女の人のめつた。みぞへはまつたらしい。無理もない。一面水でどこに何があるか分らぬのだ。足の生づめがめくられてゐたが、それをきちんとはめた。生づめをはくのは痛いものだ。それを平氣ではめたのは緊張してゐた爲だらう。でも僕はその時痛いだらうと考へる餘裕がなかつた。

流がおしよせて来る。足をさらはれそうになるのをふみこらへながらやつと青屋川の橋の上にたどり着いた川は氾濫の結果水量は少なくなり橋上に皮のむかれた大木、大岩石、小石等がごろ／＼して水害の眞相を物語つてゐるかの様に見える。川は土砂の爲に水底は高くなり橋のすぐ下を流れて行く。時々石の流れて行くのが見える。此處で森本君と別れ一行五人はまた東へと向つた。天井川である青屋川は川の附近はあまり水害は無いが、少し離れた低い處は水が國道一ぱいに廣がり滔々と流れてゐる。後からは壘、材木等色々の物が非常な勢でおし流されて來るその中を渡りながら東へ向ふのである。皆あはれな姿をして歩いて行くが、附近の人達も別に氣にもとめず水のはいつた家から首を出してゐる。水中の進行はなか／＼容易でない。しかも後からは材木等が流れて來るのである。時々後ろを振り向きながら前に進んだ。國道電車のレールに足をすべらしたり、後から來た薪にあたりそうになつたりしてやつと水をだつた。一まづ福井君の家に一ぶくし雨の止むのを待った。雨はだん／＼小降になつた。西宮は水につかつてゐるさうである。前途多難を思ひながら晴れるのを待った。

線路上上つて歩く。不圖下を見ると天井川が渦巻きながら流れてゐる。あの中にはまつたら命がない。ます／＼身がしめる。これからどうしやうかと相談する。

「住吉まで歩いたら何か乗物があるだらう。」

「六甲道までは歩けるから、もうあそこは何もないだらうから大丈夫だ。」

「然し住吉川が渡れぬとどうする。」

「それはまあその時だ。どうかして渡れるだらう」

雨がすこく降つてぼんやり煙つた所を濁水が「がう／＼」と流れる。水は急に増してゐる。濁流の物にぶつかり物すごいしぶきを上げ更に流れて家をも流さんとして物すごい様だ。

不圖足もとにかに二匹居るのを發見した。住吉川に居れなくなつたので上つて來たのだらう。雨が上衣にしみこんで冷い。やがて前方に汽車のあるを發見した。止つてゐる。そこで行くとして「川が渡れぬから上つて來い。」と驛員が言ふ。中へはいつた。

はや二十名程生徒が居つた。その前の二臺には避難民が乗つてゐる。荷物を置いて長靴の水を出した。

避難民の居る所に行く。泣きさうな顔をして話をしである人、南無阿彌陀佛となへるおばさん、じゆばん一枚でふるへてゐる人、實に慘憺たる様だ。一人は「さつき人が屋根にのつたまゝ流された。」と言つて泣きさうな顔をしてゐた。生徒はしかし割合平氣だ窓から北を見ると、本山第二小學校の一階の窓から濁

動場は水が一面にたまり、下のお寺へ龍のやうにどう／＼と落ちて行く。來がけに天上川が氾濫して道路が川のやうになつてゐたのを思ひ出し、「これはきつとすごい洪水になるぞ。」と思つた。

一時間目の書方の時間も雨の音で身が入らない。二時間目になる。數學の先生が入つて來られた。プリントを持つて居られたので試験かもしれないと思つたが先生は「授業を中止します。プリントは夏休の宿題ですからぬらさぬやうにもつておかへなさい。」といはれる。鈴木先生も「二年だけだから大勢でかへるやうに。」といはれる。さてはいよいよ來たなとズボンも作業ズボンにし、用意をと／＼のへ友達と歸途につく。

學校の門の内側の砂利がわけなく流され平生先生の銅像附近から來る水がすごいしぶきをあげてゐる。水の流れは來がけの數倍ひどい。道は水の深さも相當あつて、ひざまでつかるときもあるが、さう心配する程もない。然しこの邊の農産物は相當影響するだらう。阪急の線路すたひに行くことにした。線路の上へ上る。こゝなら水は來ない。皆同じやうに線路の上を歩いてゐる。阪急は不通らしい。省線も不通かも知れないがきつと大丈夫だらう。早く驛へ出たい。しばらくすると線路上に水が來てゐたが線路の上なら大丈夫だ。

本山驛へ出る爲右へ曲つた。又足が水につかる。長靴の中で水がばち／＼いつて歩きにくい。流れてゐる水は茶色に濁つたきたない水で、所々黒茶色のどろ

流が飛出し目を下を見ると濁流と濁流が互にぶつかつて、相手を押流さんとしぶきをあげてゐる。とう／＼本格的なものすごい洪水になつたのだ。二年生がどうして歸るのか相談してゐる。

突然前が危い。皆後へ／＼といふ聲がした。それで後の三等車乗客の所へ下つた。避難民は眞剣な顔をしてゐるのに僕等はそんな氣持になれない。何か演習をやつてゐるやうだ。しばらくすると杉田と淺野が服をびちや／＼にして上つて來た。始めは窓ばかり見てゐたが、何をする事もないので遊んでゐたが、やはり何となく不安だ。列車と本山驛の間にも水が線路へ上つて來た。水の來ぬのはこゝだけだ。

何となく外が見たくて數度も窓を開けて見た。相變らず濁流がもみ合つてゐる。六甲山脈は雨で少しも見えない。

かうしていくつたつたであらう。やがて水の流がかはつて、南は水が少なくなつて砂が見えたが、北側は益々ふえる。そろ／＼こちらも水が線路の上に上つて來る。ずぼ／＼と砂地を歩いて來る人の足跡は非常に深い。ひざまではいるのだ。もう水が線路を越え出した、危険だ。甲南女學校へ避難することにした。

汽車を降りずぼ／＼と行くと前に幅二米ぐらゐの流れがある。とてもきつい。前の者が流されさうになりつ／＼向ふへつた、危い。よしと決心して流れの中にふみこんだ。うっかりすると流されさうだ。流れで足が前へ出しにくい。足をふみしめ／＼やつと渡つて

向ふの砂地へ足をふみ入れたと思ふと、ずぼりと片足が腰近くまでは入った。はつと思つて片手で前の柱にしがみつくと、夢中になつてはい上つた。ズボンは一面に泥がつき上衣も所々に泥がついてゐる。やつと甲南女學校についた。かうして来たものゝ前にまだ流れがあつてとてもはいれたものではない。今立つてゐるすぐ横に小さい戸があるが開かぬらしい。すると中からこの學校の先生が來られて、こつちへ來いと言ふ。それで一歩々々ふみしめながら流れの中にはいりやうやく乗切つた。一階の唱歌の教室にはいつてゐると、(こゝにも水はいつてゐた) 上へ上れといふので二階へ上つた。

階段を上つた所でちつて見るとカバンが水でべちや／＼だ。かさも泥だらけ。長靴の中に水が一ぱいは入つてゐたので水を出した。やがて僕等は一案に通された。こゝへ来たものは主に甲南の生徒である。普通の人は極く少した。汽車へ残つた者はどうしただらう。きつと來られぬので汽車の中で前のやうに心配してゐることだらう。

上衣をぬいだ。びしゃ／＼になつて上衣一面毛のやうなものが出てゐる。ス・フだから破れるだらう。氣持が悪いので長靴をぬいだ。足が白くなつてふくれてゐる。渡されたタオルが茶色にかはつた。置いてある着がえのシャツを着ると、それはエプロンのあるのだつたのでびつくりしてさがしたら、普通のシャツがあつたのでそれを着た。さふきんをもつて來たので、そ

れで服や足をふいたが、すぐ茶色になるので敷靴をつかつた。

運動場を見た。西から來る濁流と東から來る濁流がぶつかつて中央に山をつくつてゐる。時々木が流れる向ふの西洋館の家の一階が没して屋上へ家族が避難してゐるのが見えた。この調子では何時歸れるか分らない。家へ電話をかけやうと思つて聞くと電話不通ださうである。家で心配してゐると思ふ。女學校の生徒が僕等の上衣をほしてくれた。ズボンを乾かす爲火鉢にあたつた。雨はまだ止まぬ。單語帳はどうなつたらうかと出して見ると、ぐちや／＼になつて中のインキがにじんてゐる。然し乾かせば使へるだらう。靴の中はどうしやうと思つたが、新聞紙を入れようといふと友達に教へられたので入れて見ると少しよくなつた。

一體どうなるのだらう。何時まで此處に居るのだらうか。

雨が止んだ。六甲山脈が次第にはつきりと見えて來る。少し水が引いたやうだが、やはりすごい音を立てゝも合つてゐる。早く水が引けばよいのに……。おなかをすいたが食物はない。その時黒板に「おなかのすいた人はおむすびを上げます。但し二人に一つ。」と出た。然し一つの小さいむすびを二人で食べたらかへつておなかをすくだらう。

突然一人の先生がはつて來て、「もう水が少し引いて元氣な人なら通れますから。又渡したシャツはぬいで置いて下さい。寒くてほしい人は言つて出て下さい。」

僕は自然の力の大きな事に今更のやうに感心した。土の上を歩くと或所ではすぼ／＼と足がはいつて歩きにくい。その足の中に砂や土や水があるのでなほ更だ。砂が足をこすつていたい。皮がむけさうだ。又所々あまりはげしくはないが濁流が流れてゐた。向ふに半埋した電車が見える。安全な所は自動車が通つてゐるが極く少い。人が一生懸命家の中の泥を出してゐる。

横に曲り上級生の家による。井戸水で足を洗はしてもらふ。足がす／＼とした。僕等におかきやお茶や菓子くれた。腹の空いてゐる時なのでおいしかった。長靴も洗はしてもらふ。きたない水が一ぱい出た。こゝで一息休んだので元氣が出た。キャラメルをもらつて又外へ出た。こゝで休ましてもらつて有難かつた。

又西へ歩く。知らぬ間に御影へ來た。長靴を洗つた爲歩きよい。西へ行くに従ひだん／＼被害が少くなる。時々道を行く人が「田中の方はどうですか。」とか「角崎の方はどうですか。」等と聞きにくる。それで向ふの様子を聞かせてやると、びつくりして心配顔をしてゐる。やはりあの邊が被害の中心らしい。

六甲八幡へ來た。この上の方へ行くと叔父さんの家が行つたつて電信不通だ。かへつて家が心配する。それより少しでも早く家へ歸る方がよいと思つて行くのをよしした。

又上級生の家の前で止つた。そこでいよ／＼神戸まで電話不通と分つた。その人が「この洪水だからき

い。」と言つた。

用意をしてゐると小野(圖書)先生がとんで來られて「國道は大丈夫ですから皆用心して行くやうに。」と言はれた。上級生が行き出した。杉田や南が「みんなで行かう。」と言つて、ゆつくり外の者待つてゐるので、上級生から離れるのが心細かつたから「おい早く行かう。」と言つたが「待たう。」と言ふので佐藤と二人で後を追つた。所が學校の外へ出るのが大變だつたが、助けられて前の砂地へ上つた。

そこには上級生や先生が居た。前居た列車を見ると線路の上へ木やごちや／＼したものゝ重なり水がそれを越えレールの下の土がとれて、レールがちゆうぶらりになつた所もある。向ふ側の家は半ごはれで、その上二階は全部埋まり二階の上部のぞいてゐるのみで實にひざんだ。先生はちよつとそこに居れと言つて一人で前の川のやうになつた所をちやぶ／＼と向ふ岸へ渡り向ふへ行つてしまはれたが、やがて歸つて大丈夫だと言はれた。そして先生はふと北を見て何を思はれたのか又中途までおはいりになり「あつ堤が切れた。」と言はれる。はつとなると「早く／＼向ふへ上れ。」と叱るやうに言はれて飛ばれて飛出して來られた。急いで後へ下つた。しかし水は少しふえただけでどうもなかつた。

杉田や淺野等はもう降りて來るはずだが來ない。やがて先生は「諸君は大丈夫と思ふからわしの後をついて來い。少しでも道を外してはいけませんよ。」とい

つと試験はない。わしが證明する。」と言つてゐた。本當にさうかも知れない。僕等(其の時は十人程だつた)とその家の人々と六甲の省線停留場の前へ様子を聞きに行つた。すると省線不通であつて、今何も動いて居らず自動車はあるが、それでは大石川が越せぬさうだつた。それで上級生が相談して歩いて行くことゝした。

線路の上へ上る。この線路が一番安全な路らしく線路の上には多くの人が往來してゐた。まだ歩くのかと思ふとだるいが、難からは折返し運轉を行つてゐるさうなので安心した。今は何時頃だらう。石屋川に近づくにつれ又被害が多くなる。橋の北側には一ぱい材木が盛上つてゐる。このへんもひどかつたらしい。

灘驛につく。もう歩かなくてもよいのだ。水と戦つてつかれてゐるのによくこゝまで歩けたと思ふ。神戸はどうなつてゐるだらう。早く歸りたい。みんな心配してゐるだらう。電車を待つたがなか／＼來ない。プラットは人で一ぱいだ。電車が來た。降りるもの乗るものけんくわのやうだ。人で神戸の様子がよく見えなかつた。元町驛へつた。はつとした。この邊は何ともないやうだ。向ふの様子と比較するとまるで夢のやうだ。家の前まで來ると衛生のおぢさんが「早くかへりなさい。皆が心配してゐますよ。」と言ふので飛んで家にはいつた。みんな事務所の所で心配さうな顔をしてゐたが、僕が歸ると「よう歸つて來た。」と言つて喜んだ。聞けば神戸も水害を受け又住吉川の方が大

「これから先は大丈夫と思ふ。もし行けなくなつたらわしの家へ來い。」と小野先生の御注意を受けテ／＼と國道を西へ向つた。

國道へ出るともう水は來ない。然し砂や土が一ぱい盛上つてゐる所を見ると水の引いたあとらしい。今まで緊張してゐたのがこゝへ來てはつとすると。こゝなら大丈夫だ。だが何も通つてゐない。この水の調子だと神戸も出水だらう。僕の家は高いから大丈夫だが、もし水が出てゐて神戸まで歩かねばならなくなつたらどうしやう。神戸までは遠い。それに夜になつたらどうしやう。いろんな心配が起る。いろんな事を考へてゐる間に難中前へ來た。多くの石が何處にこんなにあつただらうと思はれる大きい石がころがつてゐる。人間の力ではとても出來ぬことを自然はわけもなく行ふ。

變ださうなので心配してゐたが、なか／＼歸つて來ず
僕の歸る一時間前に杉田等が歸つたので尙更心配して
ゐたのださうだ。後からかへつたのが先に歸つたのは
意外だが、多分休んでゐる間に追ひこしたのだらう。
だが他の者はどうしたらう。うまくかへつただらうか
皆に向ふの様子を話すと驚いてゐた。然し神戸も低い
所は大變ださうで、食料品を買ふに苦勞したさうだ。
水道も出ないので風呂も出来ない。この水害で被害は
きつと多いだらう。僕は又今までの事を思ひ出した。
汽車から見たあの激流、又女學校へ避難する時ずぼり
と腰近くまで泥にはいつた時、又國道へ出る時に流さ
れさうになつたあの時……。よく歸れたと思ふ。

その晩お姉さんの行つてゐる縣立女學校の生徒が家
へ歸れぬので泊りに來た。

朝思つた通りすごい洪水になつた。何となくだるく
て、早くねどこにはいつたが、足が横に押流されるや
うな氣がしてねむれなかつた。

水 害

二 B 千 原 一 夫

あらゆる困難をおかして學校へ來た。もう大部分の
人は來てゐるが、大阪から來る三四人がまだ來てゐな
い。一時間目の博物の時になつて、ぼつ／＼やつて來
た。折からの大雨にしばらく勉強をやめて、これを眺
めた。運動場は川の如く濁流が滔々と流れてゐる。

一時間目の終りになつて鈴木先生が入つて來られて「
今日の授業はこれで終りますからお歸りなさい途中で
流される手をあげなさい。」とおつしやつたので、
うれしいやらおかしいやら教室もわれかへる程「わつ
」といふ歡聲が舉つた。

僕も制服の上に作業服を着て、それに運動靴といふ
見るからにいさましい姿で歸途についた。

歸 途

門を出た。物凄い雨だ。道といふ道は、全く川と化
してゐる。この濁水の流れる中を一步／＼力強くふみ
しめてながら阪急の線路の所へ來た。そこからは阪急
線路を東へ進んだ。岡本驛の手前から又下に入りて省
線本山驛に來た。

しかし省線電車も勿論不通となつてゐる。仕方な
いので、僕は末久君、中上川君、松下君とで、歩いて
歸ることとした。國道を通つて歸らうと思つて行きか
けると、どこかで、「國道を通つたらしかられるぞ」

「物凄い水だぞ」といふ聲が耳に入つたので、國道を
通るのはやめにした。そこで省線に沿つて東へ／＼と
進んだ。大雨はなほ繁く、濁水滔々として流れる中を
半身ずぶぬれになつた僕は、片手に傘を、片手にか
ばんを持つて、元氣に進んだ。

心配なのは皆屋川が渡れるかどうかそれだけであ
る。僕は國道の橋が渡れないのを見てその上の大正
橋へ行つた。さひはひ水が大部分少なくなつたので難
なく渡れた。

の一擲も國家の爲だと考へると、自然に一心にするや
うになる。

水害當日の自己の行動

三 B 窪 田 武 彦

物凄い雨の音に目を覺せば五時頃そのまゝ飛起きて
今日の試験物理の復習を一通りやり始めた。六時頃だ
つたか、すさまじい雨の音の中に確かに半鐘の音がす
る前日むかひの小母さんからこの魚崎は一寸水が出た
らすぐ鐘がなると聞いてゐたので別段氣にもとめな
かつたが龍のやうな雨の音を聞くとさすがに無氣味であ
る。

傘をな／＼めに豪雨の中を少し急ぎ目に出た、國道ま
ではいつもと同じやうに何事もなかつた。省線、阪急
を過ぎるとすでに濁流がはらんしかますを積んだ消
防自動車サイレンの音を氣味悪く立てながら走つて
行く。此れで始めて水が出たなと感じたが、血氣盛りの
僕等はその時は、これは面白いもつと出たらよいの
にと思つたりした。學校では豫定の試験はどうやらす
ましたものゝその頃になるとネットの後から襲つた濁
流が塀を壊し運動場を池となし、西の方から來た濁流
が正門からすさまじい勢で流れて行く、黄河の決壊も
かくやと思はれるばかり。此の時始めて恐しい氣持に
なつた。學校が流されないかしら等、今から思へば太
陽が西から出るやうな事を眞面目に心配したりしてゐ

省線青屋驛の少し西で末久君、松下君等と分れた僕
と中上川君は、驛に向つた。驛の前はより一層すさま
じい濁水が流れてゐる。この邊はこしの所まで水が來
る。此の難所を切抜ければすぐに家へ歸れるのだ、僕
は決心して水の中へ入つて行つた。中上川君も負けじ
と入つた。それからどこをどうして行つたかわから
ないが、何しろ難所を切り抜けてゐた。其の時は眞に
心から嬉しさを感じた。かくして無事に全身びしょぬ
れになつて家にたどりついた。

二階で横になつてゐた僕は、ふと思ひついて下に降
りた。さうして下駄をはいて外へ出た。言ふまでもな
く水を見物に行つたのである。空はもう暗れてゐる。
水ももう大分へつた。弟と姉とはまだ歸らない。僕も
そろ／＼心配になつて來たので、家に歸つて、窓から
外をながめてゐた。しかし、いくらたつても歸らない
ので、二階へ上つて、暑中休暇の代敷の宿題をし始め
た。少しした時突如！、悲しい報告が僕の耳に入つて
來た。それは弟が小學校で行方不明になつたといふの
である。僕は二階から飛んで降りた。下ではもうこの
しらせをきいた母や姉のすゝり泣く聲が聞える。僕は
應接室へいつて、靜かに目をつむつた。弟の笑ひ顔、
おこり顔、泣き顔等目にちらつた。「弟は生きてゐ
る。死んでゐるものか。死んではゐない。そんな馬鹿
な話があるものか。」と思つたが、すぐその後で、
「何と言つても此の水だからな。」

た。

漸く四時前になつて歸宅の許可が出たこの頃には既に
氣分も落ついてゐたし、物好きな心からあの濁流を渡
つて見たいと思ふやうな考もあつたので勇んで學校を
出た。

鐵道の北百米の所までは無事に出たがこゝで物凄い
濁流に合つた。そこには池があつたぞと驚かされたり
してそこで立往生してしまつたが芝川君と安宅君に助
けられ勇氣を振つて可成流されてどうやらこうやら渡
る事が出來た。此の次の難關が鐵道渡りであつた。水
のため梯子のやうな形になつた鐵道の枕木を義經のハ
そう飛みたいに渡るのは命がけであつた。下を見ると
目もくら／＼とするやうな濁流が落ちて來たら一ぺん
だそといはんばかりに待ちうけてゐたが龍の手を無事
にのがれて水のない住吉川を南に下り、こゝで最期ま
で一續だつた酒井君とも別れて一人で恐しいやうな淋
しいやうな氣もちで住吉川の坂を東に下つて行つた。

魚崎小學校までくると、省線から國道を突破した黄河
の如き濁流は道といふ道をすつかり川に變じて阪神の
鐵道にぶつかつてゐた東に行く程水は深くなる後にも
先にも行かれないこの時ほど情ない恐しい氣持になつ
たのは始めてだつたが勇を振つて東に進むと何たる奇
蹟ぞ僕の家の通りだけはおとに變りぬ土を見せて行つ
たこんなに嬉しく思つたのも始めてであつたらうが僕
の家も裏の畑から入つた濁水で庭はどろ／＼であつた
がまあ無事にすんでよかつたと思つた。そこで母が萬

等とも考へる。母はもう小學校へ行つた。僕もこうし
てはゐられない。「行かう。」と決心して、長靴をは
いて家を出た。やつと自動車に乗つたが、田中までし
か行かない。しかし、一刻も早く小學校へ行かうと思
つて、いくつ／＼ある川を渡つた。或はこけかけ、
或はロープにすがりつき、或は大人の人に助けられて
やつと小學校についた。この小學校の有様を一目見た
僕は、思はず、「だめだ。」とつぶやいた。どうして
あの小さな體でこの土砂からのがれる事が出來やうか
さう思ふと涙がとめもなく／＼をつたつて落ちた。
そこから、母と共に村役場へ行つたが、そこには弟に
ついて何の消息もない。さうかうしてゐる中に大分暗
くなつた。こんどは母と僕と二人で、他人のてらす電
氣をたよりに、力もなく／＼と歸つた。家に
歸りついた時はもう九時を過ぎてゐた。弟はあの土砂
の中にうづまつてゐるのだらうか。その晩は皆一睡も
せず泣き明かした。その日から毎日父は朝早くから
夜おそくまで小學校へ弟の死體をさがしに行かれた。
そのかひあつて、三日目の朝遂に弟はかきり果てた姿
となつて見つかった。僕は、五日の朝元氣に家を出て
行つた弟の姿を思ひ浮べて、この世のはかなさをしみ
／＼と感じた。

僕は終りの二日しか勤務奉仕には行かなかつたが、
二日間の間勤務奉仕の尊さをつく／＼感じた。時々
この様な事をするのも非常時の體位向上にとつてよい
だらうと思ふ。一心に働いてのちの食事も楽しい。こ

一を慮ばかりであげた學等を下し、かたばかりの夕飯をすましてごう／＼といふ音のやまない氣持の悪い一夜を神に佛に祈りながら過したのであつた。

水害の日

一A南 顯三

七月五日雨の中を學校へ行つた。此間から降り續いて居たが今朝の降り方は又格別だ。洋服はビショぬれになつたので教練服と着かへた。さすがに今日は缺席も多く遅れて来る者もずる分多かつた。

運動場の北側のスタンドからは水が烈しく流れ落ち運動場は川の様になつてゐる。便所も水に浸りお互に背負つて行かねばならぬので面白半分にきたりくもな便所へ行つてキヤツ／＼騒いだりしてゐた。

一時間目の授業が終り二時間目に寺澤先生が来られて夏休みの宿題のプリントを配られた後「今日はもう歸つてよろしい」と言はれた。そこへ鈴木先生が来られて今日は要心して早く歸りなさいと注意せられた田中君と學校を出たが途中は水が道路を流れてゐたのでよく注意しながらやつと本山驛まで来た。大勢の人が改札口に立つてゐるので何事かと尋ねると省線が通はないといふことだつた。驛の前には水が溜つて驛の中へ浸りし様としてゐるので驛の人は總出で土囊を築いて防いでゐるので僕等も浸入した水を外に汲み出す事を手傳つた。驛の人に「尋ねるといつ開通するか

からん」と言つて居り又阪急も阪神も通つてゐないといふことだつたので仕方なく歩いて歸る事にした僕は二年生の芝山さんと二人で驛を出て線路傍ひに神戸の方に向つて歩いた。すぐ前に二年生の人達も数人かたまつて歩いてゐたので一つしよになつたが甲南女學校の側で汽車が停つてゐたのでその中へ入つて見ると一年B組の須田君等四五人乗つてゐた。その不通列車中で休息してゐると大勢の人がこの汽車に避難して來たが中には朝鮮人も大勢混つてゐた。線路は高いので水は上つて來ないが住吉川が氾濫したのであらう上の方からは川の様にはけしい勢で大きな木や屋根等を流して來るし、本山第二小學校は一階を水の中にうづめて居た。

列車の中では朝鮮人の子供が「あいごーあいごー」と泣いてゐるのは可愛いそうであり、又着物をぬらせてがた／＼裸で居る子供も哀れであつた。その時女の人に背負はれた顔色の大そう悪い病氣の老人が入つて來、又子供を連れたお婆さんが「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」と念佛を唱へながら入つて來たので僕も初めて不安な氣持におそはれた。

車掌が來て寢台車に入つてもよいと言つたので、その方へ行つた。僕等十四五人も賑やかにしてゐたので不安もいししか忘れハンカチ取り等して呑気に遊んでゐたが先き程のお婆さんが又「なむあみだぶつ／＼」と念佛を唱へ出したので皆我に歸つた様にそれをやめてだまつてしまつた。その中にだん／＼水が増して線

路の上に来さうになつたので甲南女學校へ避難しやうといふ者が有り皆それに従ふことになつた。汽車を出るとすぐ前に自轉車が置いてあつたのがいつのまにか殆ど埋つてしまつてゐた。やつとの事で校舎にたどり着いたがどこの戸も窓も鍵がかかつて居て入ることが出來ず困つてゐると校舎の中から女學生が覗いてゐたので門けてくれと言つたがなか／＼開けてくれなかつた。その時候は一二歩寄つたと思ふと深い泥の中にずる／＼と胸の邊まで埋つてしまつた。驚いて袍を放り出して兩手でやつとはひ出ることが出來たが服は滅茶々々になつてしまひ氣持が悪かつた。

やつと戸を開けてくれたので泥まみれで校舎の中へ入つた。二階へ上ると避難民はどうぞこちらへと言はれたので苦笑せざるを得なかつた。皆そろつて二階の端の室に入つた。

暫くすると女學生が布を持つて來てくれたのでそれで足をふき又裁縫の時作つたのだらうエプロンやシャツを持つて來てくれた。泥まみれの洋服を脱いでこれ等を重ねて着ると妙な格好になつて我ながら本當に避難民が出來たと思つた。窓から見ると先程まで居た汽車はもう傾いてゐた。

本等を見て退屈をしのいで水の引くのを待つてゐる時騒ぎが聞へるので見ると一人の男の人が校舎の前に流されて來たがやつと僕等のゐる二階の下あたりで何かにつかまつて助かり二階へ上つて來た。外を見るとまだこの學校の運動場は水がどう／＼と流れ自動車か

どこからか流れ込んでゐる——僕等の居る校舎の前の講堂の窓の水が破つて流れ込み中は大かた埋つてしまつてゐるし、この校舎も一階は水に浸されてしまつてゐる。こゝも安全だとは言へない氣がし出した。

晝頃に握り飯が有るから取りに來いと言つて來たが誰ももらひに行く人も無かつた。暫くすると僕等の圖書の先生が泥まみれになつて入つて來られもう大分水も引いたからそろ／＼歸りなさいと言はれたので僕も歸らうと思つて芝山さん等と一しよに歸ることにした。出口は半分程土砂に埋つてゐたがそこから出て水がはけしく流れて居る道路をロープ傳ひに歩いたが暫く同じ所に立つてゐると踏占めてゐる砂がずん／＼流されて行つて自分も流されさうになる。やつとの事で國道に出てこゝで先生に別れた。先生が危険を冒して泥まみれになられて僕等を保護して下さつたのを有難く思つたがお禮の言葉も述べずにすまなく思つた。

靴に砂が入つて歩きにくいので脱いで裸足となり國道を歩いたが釘等を踏んではと思ひ又痛いしがしかたなく靴をはいた。

住吉川へ來て驚いたことには大きな石が澤山流れて來て居り樹木が途中で物に打ちつけられて皮をはがれて汚い姿になつて澤山引つ掛つてゐた。住吉川を渡つて少し行くと秋山先生が普段着の和服で來られるのに逢つた。先生は學校を休まれたのだらうお家が水でどうかつたのではなかつたのかと後で思つた。途中で一つしよになつた大阪醫大の學生は神崎から歩いて來

たさうだ。御影からは阪急が通つてゐると聞いたので其方へ行かうと山手に上つて行つたが途中で不通と聞いて又逆戻りして今度は汽車の線路を傳つて歩いた。大勢の人が行つたり來たりしてゐるので尋ねて見ると誰か通じてゐますと聞いたので元氣を出して歩き續けた。

六甲道も過ぎて大石川にかゝり細い板の橋を渡つて向ふ岸に着いたがこの邊の家は滅茶々に荒されて居た。避難民はまだか／＼と思ひながら歩き續けた。やつと着いた時は嬉しく又ほつとした。大勢の人が待つてゐたが其中へ加はり漸く電車に乗つた。

僕等は今まで神戸の町が水害をうけてゐるとはおもつてゐなかつたのだが電車の中での人々の話の様子では神戸の町も余程被害を受けて居るらしい。三宮驛の前でその頃の附近がどう／＼と流れて川をなして居るを見て急に家が心配になつたが僕の家は高い所にあるから大丈夫だらうと思つたが一しよに歸つた浅野君は布引の方で常友君は天王川の暗渠の側なので大いに心配した。

神戸驛に着いて外へ出たが其邊一體は水浸しだ。市電は勿論不通で徒歩で我家へ向かつた。途中電車通りの相當高い土地にある家でも水が入つた様子だつた。平野終點近くなると大通りの真中に樽や板や色々の物がころががつてゐた。終點で常友君に分れて歸つて來たが幸ひ家の邊では安全だつたのでやれ／＼と思つた。夜間へ入ると近所に住んで居る高等科二年の茶谷さん

のお母さんが來て心配さうに父母等と話しておられた

らしく僕を見て皆非常に喜んで僕をとらへて色々話を聞かれた。父母も茶谷さんのお母さんも僕等の歸りが遅いので途中で事故がないかと心配して居られたらしい。茶谷さんのお母さんは茶谷さんが僕と一つしよでなかつたと聞いて心配して居られたが「もう歸つたかも知れませんか」と言はれて急いで歸られた。

父母は兄がまだ歸らないので心配らしく僕が三年生の生徒を神戸驛で見たと話した時母は未だ歸らぬ兄を心配して泣きそふな聲を出して居られた。母はたまになく父に途中まで迎へに行く様に頼んで居られた。父は兄の通りさうな道順を三手に分けて行かうと三人の男の人と相談して出けられた。

兄は漸く八時過ぎになつて歸つて來た。母を初め家の者は皆大層喜ぶ。間もなく父からまだ歸らぬかと途中から電話がかゝつて來たので兄の歸つたことを知らせた。

風呂を上つて寢ようとした時田中君のお父さんから電話で「まだ私の子は歸つて來ませんがどうしたのか知りませんか」と問はれたので「本山驛まで一つしよでしたがそれからは知りません」と言ふと大層心配しておられた様であつた。

兄の友達林さんもまだ歸つて來ないさうでお母さんから心配して様子を電話で尋ねてこられた。

翌朝心配なので田中君の家へ電話をかけたが通ぜず案じてゐると晝前無事歸つたから安心せられたとい

ふ電報が田中君の家からとき林さんも其日は友達が知合の家かで泊つて翌朝歸つて來たとの電話があつたのでやつと安心した。

新聞を見ると伊藤君の兄第二人は學校へ行つてゐたために助かつた家が流されてお父さんお母さんを始め一家皆亡くなつたと言ふ悲しい記事が出て居たので驚いた。父母を一時に失ひ家を流された伊藤君の心中を察して暗い心になつた。學校が始つて伊藤君に逢ふた時にはどういつて慰めてよいか言葉もしらない。

水 禍 !!

三 A 伊藤 一二

七月五日あとなつて考へれば實におそろしいまるで夢かうつゝのやうな氣がする。あれだけの土砂巨大な岩石が一時にして樂土住吉を荒野と化したのであるその日の自分の行動について見ると、朝目がさめた時から陰氣でうつとうしいなと思ひながら家を出た。夜の雨をしらぬ僕は電車が不通な事を不思議に思ひながら初めて線路をわたり愉快の氣持で登校した、登校時分は雨が小降で住吉川もまだ小量の水しかなく考へて見ればその水が阪急の鐵橋でつまずき、そして上流で溢れてその水のため、その朝出立した家とも、見送つてくださった母、祖母とも二度と顔をあはす事が出来なくなるとは、その時毛頭考へなかつた。學校につけば早學校の前は池の如く運動場は、水の原と化し

てゐた。そろ／＼雨が強くなりだした。試験の日であるので皆試験がやめになれといひつてゐる。一時間一時間半試験がない。もうれつな豪雨となつた。その時はなんだか面白いやうな氣がしたが、これが神戸初つて以來の豪雨だつたとは、終に三時間目に入り物理の試験が行はれた。皆熱心に考へてゐる。外では雨がふりつき、人々の心を不安にさせてゐる。とその時なんと云つてよいかまるで飛行機が低空を飛んだやうな音がした。つゞいて、又異様な音がした。なんだと皆顔を見合してゐると守谷先生が頭の上で急に「おゝ」とびつくりされたが、その實像等は外の光景のものとごに驚かされた。東の道には泥水が波をうつて奔走してゐる、といふに、電柱が倒れた。學校の塀がくずれた。水はなんのちゆうちよもなく流れこむ皆試験もわすれて呆然としてそれを觀てゐた。次に博物の試験が初つた。そろ／＼避難民がやつて來た。老母を背に幼子をかゝへてゐる感心な人、自己の荷物のみもつて我さきにとかけこむあさましい人、種々の人が來た。しかし僕等は學校におつて下の方がそんなにひどいとはしなかつた。試験後歸途につかんとし階下におりた所がなんたる事だ、校舎内はなんともないが通行道中庭や、テニス、バスケットのコート、雨天體操場はもうれつな水びたしである。大波に勢をつけた如き、水が流れる。歸るのもおぼつかないので教室に戻つた。教室から見るとなんたる壯觀、家は見え、線路と路が一樣になつてその見通しのよいことは、この上

もなかつた。いたる所泥水にうづまつてゐる。寺澤先生もまだこんな事は初めてだとおつしやつた。又一二年で遭難したものがある。何々の家は全滅だとか流言ひごが飛ぶ。運動場のけがくづれる。寺は半分うづまつた。そこで僕等は水止に従事した。雨もやんだので一まつ屋上にのぼつた。すると井の中の蛙大海を知らずで、住吉の方は土地が隆起してゐる、さてはと不吉な感を感じた。そこで心配なのでにぎりめしを無理にのみこんだ後八代君と廣瀬君とで見に行つた。阪急の住吉川の近くに行くともうれつなもんだ。今朝來た道を總書にして濁水が流れてゐる。僕はこれが人家の所へ行けばどんな事になるのかな、自然の力は大きいなと痛感した。そこでも少し西に行くくと決潰した所の稍南に出た又その猛烈さは筆舌にひあらはす事が出来ない人聲は水音の爲聞こへない。巨岩や鐵製のゴミ箱が時速に二百軒位の勢で流れてゐる。この水では人家や人はあつと言ふひまもないだらうと思はれた。も少し北上して野村さんの東岸に出ると住吉川はもとの二倍にも増大してゐる。神社、眞野さんの家があとかたもない僕の胸は高なる。南を見れば家もない。しかしやつとその方向に家を見つけた。我が家か他の家か泥中に足ふみ入れて確めようとしたが、明かならずしかたなく學校にひき上げた。そこで二十分後解散した。その後の行動はよくもあんなことが出來たものだと思ふ。道は川と化し、その深淺がわからず幾たび腰まではまつたかしのれない。幾たびこけさうになつたか

あゝ甲南小學校の水禍

一 B 山田 誠 一

あゝ、僕達の母校甲南小學校は今もう無慘なやつてしまつた。昭和七年、一年生に入學してから六年間共に親しく勉強を續けて來た僕達の校舎は今見る影もない姿を横たへてゐるのであつた。

しれない。やつとの事で本山第二小學校に來た。しかしこれからは難所である、住吉川の本流だ、必死の覺悟で走つて眞中まで渡つた、ともうれつな水がおそろした。足は今にも流されそうだ。しばらくは動けず靜々と立往生して覺悟したが幸ひ、少し進んで流を外すことが出來た、そこに汽車が半分こけてゐた。そこは唯一の住吉——本山の連絡道である、僕等もその由ぶらりんの線路をこわ／＼渡つて住吉川の本流まで來たそこでも一苦勞せんなんと思つた。しかるになんと水一滴流れてゐないのだ。これは幸ひと、わたり對岸はと見ればこれは又、本山以上の慘狀巨岩がまるで、石ころの如くあり、岡谷田中兩君の家はめちや／＼である。その上、もう一驚たのは母校甲南小學校が見るもいたましい姿になつてゐる。學校におつてからうじて難をのがれたものはどろ／＼の姿でなき友のことを思つて泣いてゐた。しばらくしてそこにいとまをわけ困難な道を家へいそいだ。ところがその北に上るほど悪く、けんとうがつかない、靜君、星君覺道君の家ものずこい。からうじて、我が家の所へ辿りついた。ところがなんたることだ、家のかけも形もない。砂と石ころがあるのみだ、一本の櫻が風に葉をちらしてゐた。僕は、父母、弟妹の死を聞き果然として、親類の家にいそいだ。

思へば七月五日、僕達が學校へ行く時最早國道の橋は危なかつた。學校で友達の話を知ると甲南小學校の前へ消防が來て盛に土嚢を築いて居たと言ふ。あゝそれじゃあ、甲南小學校も危いのだなあと思つたがどうする事も出來ない。僕も其の時は住吉川の橋といふ橋は全部落ちて學校に残つてゐた。一時間、二時間と雨はなほ降り續く。不安は次第に高まつて行く。小使さんらしい人の聲が聞えた。「觀音林の方は全部駄目だ。」はつと思つて聞き返して見ると其の人は危険をおかして近くまで行つて來られたさうだ。やつぱりかと僕は大ききため息を吐いた。然し、其の時は何が何だかわからなかつた。晝過、やつと雨が止んでから引間先生と一緒に僕達四五人は住吉川を見に出掛た。どろ／＼といふ水の音とどろ／＼といふ石の流れる音とが一緒になつてごう／＼となつてゐる様である。實に物憂い光景である。附近にあつた家は流され、松等の大木が根こそぎになつて倒れてゐる。成程話に聞いた通り川幅は何倍と廣がつてゐて、毎日登校する道

さへもどこにあるのかわからない。向ふ岸にも家らしきものは見えない様である。實際に水の威力を見た僕の不安はますます高まつた。然し、幸に五時前、九時間振りに歸ることが出來る様になつた。僕は上級生、友達と共に省線の線路をつたつて物憂い流れの上や、線路が宙ぶらりんになつた下は急流が激しく流れてゐる所等いろ／＼な危い所を通つて漸く歸つた。さて小學校の近くへ來て見ると何百何千貫いや何萬貫とあらう大きな巨岩があり無數に轉がつてゐてさながら巨岩の山である。あゝ小學校は……と思ひながら校内に一歩足を踏み入れると、あゝ何といふ事だらう。昨日まであれ程雄大に聳えてゐた甲南小學校の雄姿は今もう見る影もなく、階下は全部土に埋もれて悲惨な姿を残してゐるのみであつた。あゝつひ此の間まで勉強をして來た懐かしい母校の荒れ果てた姿を誰か涙なくして見てゐられやうか。僕は唯茫然として何時までも／＼こゝから去らうとは思はなかつた。翌朝僕は再び父母に連れられて小學校にお見舞に來た。毎朝、小學校の時に登校した道も何だかわからなくなつてしまつてゐた。さて小學校に來て見ると講堂は殆んど全部埋まり、屋根だけが僅かに残つてゐる。あゝ懐かしい幼稚園、皆と一緒に遊戯をした室も今はもう土の下に埋もれてゐる。校内動物園の鳥、家鴨孔雀、鵜、等は僕達幼稚園時代のよい遊び相手であつた。これ等も今は何處へ行つたか影も姿もない。盛ん

に愛蔵を振りまいた四匹の猿も小屋と共に地下へ埋められてしまった。毎日馳け足をした馳走道も勉強して疲れた頭を休ませてくれた花園も何もかも當時の美しい姿を消し、荒れ果てた姿となつてしまつた。

學校では取りあへず幸に難をまぬがれた二階を事務所とされ、荒れ果てた運動場に一先づ天幕を張つて先生方は皆、其處に居られた。あゝ、先生方の悲痛な顔、不意といへば餘りの不意、一瞬の間に襲つた濁水に學校は破壊せられ、その上、生徒四名、迎へに來た女中一名、合計五名の犠牲者を出した先生方の心中は如何なるものであつたらうか。僕は此のお氣の毒な立場に立たれた先生方に對して少しでも學校の爲にお手傳ひをして先生方をお樂にして上げなければならぬと心から思つた。さて校長先生を始め、諸先生方にお見舞を申して他の人々と共に濱野先生から其の時の様子を話して頂いた。

「丁度私が國道の方へ歸る者連れて出て行かうとした其の時、水だ！、水！といふ聲と殆んど同時に、講堂へ逃げる！講堂へ逃げる！と皆を講堂へ入れ、更に幼稚園の二階へ避難させやうとした時、物凄い音と共に土砂が流れ込み、水がごうごうと押寄せて來ました。そこで皆に柱にくらひつけ！と叫びながら講堂から幼稚園へ行く道の柱にだきつかして置きそれから廊下の屋根へ上げやうと思つて屋根をこはして穴をあけてそこからひつぱり上げました。穴をあけるのには何もないので仕方なしに此の手でガン

／＼とやりました。」
といつて先生はハ、ハ、と笑はれたが其のお顔は昨日の事を思はれてか悲壯なものであつた。先生のお話は續く。

「そして皆をひつぱりあげて調べて見るとその四人（五年、山中美賀子、二年、千原博、一年、横井元宣、一年、砂川勇雄）が居ませんでした。……氣が付いて見ると肝腎の校長先生が居られない。これは大變だと又、探しに行くと講堂の窓から手だけ出して助けてくれ！といつて居られたのです。」
それより校長先生のお話になる。

「私が逃げやうと講堂まで來た時、どうつと濁水が押寄せて來たので一生懸命柱にだきついてゐました。其の時あちらの方に一年生の田村もつちやんが流されかけてゐたのです。その瞬間、講堂の床がぼつかりと上つて來ました。實に不思議です。そこで私はその上を這つて行つて田村さんを助けて來ました。もうあの時は駄目だと観念しましたよ。一と言つて力なげに笑はれたが其の時の先生のお心はどんなものであつたらうか。あまり長く居てもいけないので先生方にお暇を告げて出やうとした時、五、六年の時の受持であつた村田先生が出て來られた。目は眞赤に充血し、手や足にはあちらこちらにかすり傷を受けられていかにも其の時の先生方の御苦勞の程がよくうかがはれる。「もうあきませんわ。」といはれる先生の胸の中はどんなものであらう。一、二、三、四年

を受持つて下さつた高岸先生は家は一階全部埋まり、あらゆるものは全部流され、學校は此の通りの有様にしよんぱりと力を落され、机にじつとよりかゝつて居られる。あゝ、僕も大ききため息を吐いた。

さて翌日からは學校では五人の死體を掘出すのに一生懸命である。僕は七月の補習が始まると二時間の授業が終つてからすぐに小學校へ手傳ひに行つた。山の様な土砂が運動場を埋めつくしてゐる僕は小學校の人と一緒に廊下等の土砂を取り除いた。あたり一面の土砂、しかもかなりの高さに埋もれたのを取り除くのはなか／＼根氣が要る。三十分程一生懸命やると汗がたら／＼と流れ落ち、ついでいやになつて手がにぶる。然し母校の爲だと思ふとどうしても意気揚々では居られなくなる。用事があつて都合の悪い日の他、僕は毎日小學校へ學校の歸りに寄つた。そしてお晝まで一生懸命スコップを振るつて土砂を取り除いた。

かゝつてまづやつと土砂も取れてかたつきかけたその時、あゝ、又しても第二回の水害に會つたのである。甲南小學校の不運はどこまで續くのだらう。折角土砂を取り除いた教室も廊下も皆、又土砂に埋もれてしまつた。幸にして前回はひどくなかつたが學校の中は三筋の川となり、住吉驛の方へ流れた。

僕は第二次水害の後には都合で行かれなかつたけれども又、八月七日の慰靈祭の前日再びお手傳ひに行つた。然し、先生方の方でも山中さん、千原君、砂川君の三人の死體が出て來たのでまづやつとやれ／＼となさ

つてゐるがまだ出ぬ横井君の死體を掘り出すのに一生懸命お心をつかつて居られる。これらの三人はいづれもあちらこちらの遠い所で出て來られたさうである。

「朝から晩まで働き通しに働かれる先生方は、どんなにお疲れだらう。」さう思ふとどうしてもお手傳ひに行かなくては御恩を受けた先生方に對して申しわけがないやうな氣がする。そこで八月六日慰靈祭の前日、友達を誘つて小學校へ慰靈祭の準備のお手傳ひに行つた。先生は非常に喜んで下さつて有難う／＼といつてゐられた。僕達も喜んで椅子運びや先生のおつしやる用事をした。運動場では御影町の青年團が大勢來て天幕を張つてゐた。僕達もそれに負けずに一生懸命働いた。母校の爲、大恩ある先生方の爲に……

あくれば八月七日今日は悲しき慰靈祭の當日である。朝八時より母に連れられて小學校へ行つた。運動場へ天幕を張り、椅子を並べ祭壇には學校で遭難された五名と伊藤金太君、同齡子さん、阿部泰二郎君の八名の寫眞がお祭りしてある。やがて八時より少しおくられて式は始まつた。運動場の土を平たくした天幕張の祭壇には父兄、同窓生、小學校、幼稚園の生徒等が入り切れない位であつた。式は奏樂裡に降靈献酬せられ横田齋主がのりとをあげられ、續いて平生理事長の祭文、堤校長先生、横田村長の弔辭朗讀があつたが、校長先生は泣かれたのでよく聞き取れなかつた。小學校児童總代の六年生島君が戦慄すべき當時の生々しい状況や、亡き學友等の思ひ出、永田家の女中さんのあく

まで水田君兄妹をかばひ、激流に押流されながらも「お坊ちやま、お嬢様、どうか助かつて下さい。」と言つて流された尊い殉職等、肺癆を打つ弔辭を述べて祭典は終了した。

此の後に小學校の父兄が集つて復興の協議があつたさうであるが復興費は約四十五萬といふ事である。僕はこの變り果てた小學校が一日も早く元の樂しき學園に復興する様に念すると共に、不幸にして此の奇禍に遭ひ、犠牲となられた八人の方の冥福を祈つて此の文を終る。

阪神地方水害に就て

二A 前田 正次

忘れもせぬ昭和十三年七月五日二三日前より降り續いた豪雨の爲阪神地方一帯の百餘萬の人民が水害に襲はれ古今未曾有の大悲惨事を惹き起した。

昨日までは線滴の六甲の峯々からあの恐い山津浪が起らうとは、夢にも思はなかつた。僕はあの日、大阪驛から省線に乗つたが、物凄い吹降りの爲窓ガラスが曇つて何も見えなくなつたので、指先で内側の曇を拭いて外を眺めると丁度電車は淀川の鐵橋にさしかゝてゐた。何時もならば青々とした淀川の流も、濁流、渦を卷いて滔々と流れてゐた、やがて武庫川の鐵橋にかゝる電車の汽笛が耳に傳はつた、何だか鐵橋が流されそで、少し心細かつた、本山に着いてから雨は益

々烈しくなつた、傘が叩き壊されさうだ、びしよ濡になつて校内へ飛込んだ、おまけに眼にスッが混つて居るのでべたつとひつゝいて非常に氣持が悪い、窓から外を眺めるとその邊がぼう／＼として唯唯の如く降りしきる雨の耳をつんざく様な音が聞えるのみだ、運動場もさながら、「甲南池」と名づけた程水に浸つて仕舞つた、ネット裏の金網の柵が倒れて運動場の水と混合してどん／＼南へ／＼と流れる、僕は英語の試験勉強（自習）をやつて居た、遂に二時間で授業中止となつた、そうして、先生から注意があり、皆様の異様な恰好をして、再度猛雨の眞只中に飛出した。水はすでに平生さんの銅像附近を洗つて門に通じる、入口の様な所から門を通つて國道方面へ流れてゐる。阪急の線路を傳つて驛へ／＼と急いだ。天井川は既に氾濫し外の道も全部、川と化し、新住吉川、新天井川、新岸屋川等が幾つ出來たことであらう。漸く驛に着くと、驛の改札口附近には水がは入つて、一年生がバケツで水を汲んで外に出すのに大奮となつてゐるので僕もこれを援助した、然るに又岸屋川が氾濫して交通中止だ、電車は驛の構内に停つてゐたがぞ／＼と寒氣がさして來た、これはいけないと執行君と相談した結果もう一度學校まで行つて柔道着を取つて來て着たならば少し位は、温くなるといふことゝなり再び、猛雨の中を突進で行つた、學校には避難民が大勢集つてゐた、大へん混雑してゐる、柔道着をしつかりとくつた、道場はもう少しで浸水しそだ、柔道着を小脇

に抱へながら、高等科の生徒の「注意して歸れよ」の温情のある聲を後にして綱にしつかりとつかまつて渡らうとした瞬間、僕は足をさらはれた様に感じた、その時は胸にまで及んだ、歸り途、トラツクの運轉手が先刻天井川の氷屋の前に溺死體が浮いてゐた」といふことを話した。電車に乗つてみると、井上君だけしか居らない、外の者は皆で一諸に何處かへ行つてしまつたのださうだ、僕等三人は柔道着の帯に制服をくゝりつけて悠々と驛を出た、出口君と途中で別れ、阪神國道に出た、僕と執行君は特に人目を引いた一路片屋まで行かうと思つたがなか／＼行かれないので高橋といふ耳鼻科のお醫者さんの家人が見兼ねておにぎりをして下さつた、その時はもう二時近くであつた、誠に命の恩人と言はねばなるまい、今度お禮に行く積りだ。厚く／＼お禮を言つて片屋驛へと急いだ。途中執行君は小川にはまつて帽子を流したのが命だけは助かつた、片屋驛で服等を全部擲けて乾かし折返しし電車を待つた、執行君は「近いから線路傍に歩いて歸る」と言ひ出して止めるのも聞かず哀れな姿をして歸つて行つた、本などを乾かしてゐる中に電車が来たのでホツト一息つきながら、椅子に坐つた、西宮からも四年生が二人乗つた、早く大阪へ着いて呉れと願つてゐる中にとう／＼大阪に着いた、時正に六時十五分前、僕はいち早くこの元氣な顔を見せようと思つて喜ばせてあげようと思つた、僕は幸福であつたのだ！死な／＼いでも濟命に歩いた、僕は幸福であつたのだ！死な／＼いでも濟

水 害

一A 杉田 太一

二三日前からの大雨は夜も晝も降り續いて今朝五時頃起きて見ると、まるで空から瀧の様に降り頻つてゐる。

餘り大雨なので母が「少し小降りになつてから出かけては」とおとしやつたがだん／＼激しく降り出すばかりである。弟や妹は面白がつてまだ／＼早いに出かけた。僕も七時にズボンのすそを高くまくり上げて外へ出た。今更雨のひどいのに驚いた。空にはよくもこんな大水があつたものだ。まるで大空に湖水でもあるのではないかと思はれる位である。

元町驛で富山君と一緒に省線に乗つた。電車の中もじめ／＼として薄く／＼皆びしょ濡れである。三の宮驛で浅野君が乗つて来た。住吉驛をすこし越えた時であつた。一番後の窓から外を覗いて居た二人の他校の生徒が下りの電車が大水の爲線路上に止つてゐることを話して居た。驚いて窓の外を見ると、確かに下り電車が立往生して居た。

間もなく攝津本山驛に着いた。改札口から外へ出て見ると雨は益々物凄くあちこちに池の様に水たまりが

漸く向ふ岸へ上つたかと思ふと向ふ側の深い水たまりの中へど／＼と首まではまつた。しまつたと思つたがもうおそい。死物狂ひでど／＼這ひ上つた。今まで氣をつけて濡れないやうにして居た靴もすつかり水づかりになつてしまつた。早く行かないともう學校も遅れそうであるがあせる程なか／＼足がはこべない、やつと坂道の所まで来た。それから流れもなく大いそぎで校門へ入つた。

學校へ行つて大いそぎで教練服に着かへた。まだ三四人しかきてなかつた。後から入つて来る人は皆びしょ濡れで途中の有様や非常に困つた事をまるで自慢話してもする様に話し合つてゐる。第一時間目の書方の時間には八名も遅刻があつた。二時間目は算術で先生が何か洋紙を持つて這入つて來られた。僕は心の中で試験だと思つてびくつとしたがそれは夏休みの宿題であつた。先生はそれをお配りになると皆に向つて「今日は二年はこれで授業は終りにするから皆注意して歸りなさい。」と言はれた。僕は來る時の事を考へて教練服のままで運動靴をはき、かばんをバンドにしぱりつけ物々しいでたちで學校を出た。今度はさつきとはちがつて北側のなるべく安全な道を通つて途中で阪急のレールの上をつたつて驛へと向つた。僕は先頭の方を歩いてゐたので後を振り向いて見ると同級の省線で歸る者が一人もいなかった。心配であつたが今更引き返すことも出来ないのそのまゝ皆と一緒に線路にそつて行つた。進むにつれてだん／＼水が多くなり

とう／＼底が見えなくなつた。所々に溝がよこぎつてゐて、それに二三回もはまつた。足先が見えないので盲目と同じである。手に持つて居た傘で足さきをつ／＼とた／＼と用心しながらよち／＼と進んだ。阪急岡本驛へついたがプラットホームが高く腰に靴を着けてゐるのとび上れないのでひき上げてもらつた。そこから阪急の驛を出て省線攝津本山驛へと向つたがここから本山驛へ行くのは僕一人で心細かつた。

途中でいく度も道が丈夫であるかを尋ねて本山驛へ向つた。入口には先に一緒に學校を出た友達がたくさんゐた。體の大きい者は驛の中へ入つてくる濁水を一生懸命に出してゐた。皆になぜプラットホームへ行かないのかと聞くと電車がうごかないと云つた。僕は驚いた。阪急は故障してゐる。國道や阪神は南の方にあるから多分故障してゐるだらう。其の上省線も不通では神戸へ歸る方法がないからである。浅野君とプラットホームへ出た。ホームには常友君が座つてゐた。ホームの東の方に一臺の荷物電車が止つてゐた。僕はシャツを着ていないので寒くてたまらなかつた。上りのプラットホームには電車が止つてゐたので僕もその電車へ入つて行つた。車内にゐる人達は皆たいくつさうに本を讀んだり、尙も激しく降り續いてゐる雨をうらめしさうに見たりしてゐる。僕は全身ぬれ風の様にびしょ／＼で腰かける事も出来ない。荷物をそこへ置いてゆつくり休んだ。皆たいくつであるので驛前の菓子屋でキヤラメルを買つて分け合つて食べた。又本を

出来、川の様に水が流れてゐた。僕等三人は面白半分に水の流れの多い線路に沿つた雨側の道へ向つた。西へ進むにつれて水はだん／＼多くなり出した。平常は川底を流れてゐる溝の様な小川も今日は一面に溢れ橋も川も一つになつて渡ることが出来ない。仕方がないので線路の枕木の上をつたつて川を渡つた。上級生の後について道を左に折れ水道路へ出て左へ折れた。四つ角の所まで来て見ると一面に水が出てとても渡れない。僕は前に來た道を引き返して僕等三人に上へ行かうと思つたが、そこは一層ひどいので、又引き返した。今更雨は驛から比較的水の少なかつた北側の道を行けばこんなにも困りはしないだらうと後悔した。いつまでた／＼づんでゐても仕方がない。早く學校へ行かなければならない。思ひきつて道に添つた細い石垣の上を通つて行つた。この石垣は幅二十程程で一方はとげのある木が一面に植えられもう一方は大水の急流である。辛うじてそれに添つて流れのゆるやかなところへ來た。いつも青々と作物のある畠も雑草の生えてゐる野原も一面の濁流で上下の段のある所ではまるでナイヤガラ瀑布を縮めた様に／＼と落ちて居る。一難去つて又一難、今度は前よりも水の多いところへ出た。仕方がないのでその中を渡らうとすると向ふ岸に居た巡禮姿のお爺さんが「こちらはこんなに深いよ」と云つてもつて居た杖を流れにさし入れた。杖は大部分水につかつた。僕は遠まはりでもよいから安全な道を行かうと思つて向ふ岸へ急流を乗りきつて渡つた。

買つてきて讀んだりして居る。暫くして富山君や南君等の居ないのに氣がついて改札口の方へ探しに行つてもどこにもゐない。皆が住吉驛まで行けば通じてゐると云つたのでこの豪雨をおかして行つたのかも知れない。僕達もいつまでたつても電車が通じないので、浅野君と常友君とB組の三木君と四人でレールにそつて住吉驛まで行かうと決心して早速用意をと／＼のへて出かけた。途中で度々の苦しみをしたのはいふまでもない。家も大分こはされたのであらう。多くの板やふん等が無数に積みかさなつてゐる。驛から二三十米へ來た所に汽車の下に一匹の犬がふりつゞく雨に困つた様にしょんぼりとすはつてゐた。ふと上を見ると汽車の窓から甲南の生徒が汽車の中へ入つて來いと呼んでゐた。そこで四人は大喜びで汽車に乗りこんだ。汽車の中にはさつき驛にゐた富山君や南君等數十名も乗つてゐたのでほと／＼と安心した。上級生が「今晚はこゝで泊るかも分らないからゆつくり體を休めなさい」と云つた。汽車の窓から外を見ると今迄静かだつた車内が急に／＼といふ水の音が聞えて、しぶきが窓から吸ひ入れられるやうに入つてきたので大いそぎで窓を開めた。そして再び窓の外を見ると道と川との區別がつかない程水が盛んに流れてゐる。僕は登校の時に泥だらけになつたシャツをきれいに洗濯した。

そしてついでにびしょ濡れになつたハンカチを洗つて居ると皆が汽車からど／＼出て行く。どうするかと思つて尋ねると、「もうすぐ水が線路をのり越え

てくるので甲南女学校へ避難するのだ」と云つて居る。

僕は大きく中へ這入つて今しばつたばかりのシャッやびし濡れの教練服を着て逃げる用意をしたが浅野君と上級生と三人だけ皆にとりのこされた。上級生は「あはてるな、あはてるな」といはれたがじつとしてゐられない。

何の氣なしに外を見ると海水浴に行つた時に見た大波の様に水が一度にレールの上へ襲ひかゝつて來た。もう間に合はないと思つたが上級生の飛び下りるといふ聲に刷まされて浅野君についでとび下りた。ところが遅くも下の島は雨の爲に泥沼のやうにゆるくて足が二三歩行つたに土の中へ入つて困つた。後からおし寄せて來る水は前の道を急流のやうに流れてゐる。あせればあせるだけなか／＼進めない。後の方から上級生が別にあはてもせずに落ちついて歩いてくる。僕はその上級生の洗勇でしかも親切なのに驚いた。やつと急流をのりこして女学校へ入り二階へ飛んで上つた。ズボンはひざのあたりまで泥だらけである廊下で皆うろ／＼してゐると先生らしい人がきて「避難民はこのつきあたりの教室へ入つて下さい」といつた。僕は生れて避難民になつたのはこの時初めてだ。部屋で道具を置いて落ちついた時に初めて生きかへつたやうな氣持がした。女學生はまへかけや、シャツを持つてきて色々世話をしてくれた。浅野君が小さい體

途中で自動車に乗らうとたが運轉手が神戸までは歸れないといつた。仕方がないので阪急御影まで電車が通じて居るといふことだから北へ向つた。途中で北から來る人にそのことを尋ねると阪急御影まで電車が通じて居るといふことだから北へ向つた。途中で北から來る人にそのことを尋ねると阪急も不通だといつた。又仕方ないので今度は省線のレールの上を歩いて六甲道から乗ることにした。しばらく行くと大きな川があつた。その川の鐵橋の上は川の水に運ばれた木材が山のやうに積み重さなつてゐた。こゝも無事に通りこして六甲へ來たが不通である。がつかりしたがもう一度がんばつて離れまで行つた。省線の上が一番よい通り道であるので多くの人々が往來してゐる。離れへついたらプラットホームは人でいっぱいである場所もない。數十分も待つてやつと電車が來た。車内は饅頭の様な人だ。驛へ止るや否や窓から飛び下りた人もあつて大變な騒ぎである。此の電車は兵庫、灘間をたつた一臺で往復して居るのださうだ。僕は此の時位文明の利器電車の有難いと思つた事はなかつた。電車は意外に早く思はれた。

外を見ると神戸市内はどの通りも泥水で一面である急に僕の事が心配になつて來た。神戸は大丈夫だらうと思つてゐたがこれでは心配である。三宮驛で浅野君と別れた。間もなく元町驛に着いた。皆に別れを告げて電車を降りた。大いそぎで家へ歸つたがこの邊は少しもふだんと變りがないので大さう安心した。

にひざまでもある大きいまへかけをした時のこつけない恰好は今思ひ出してふき出したくなる。雑巾をかりて泥だらけのズボンの手入れをした。又服のよごれたものは部屋の中へひもをはつて、かはかしてくれた。大人も小學生も避難してゐた。ふと雨のことを思ひ出して窓から外を見た。雨はあひかはらず降り續いて居る。どうしてこんなにたくさん降るのか不思議な程である。汽車を見ると汽車ののつてゐるレールの下の土が流されてレールが宙にういて中には四十五度位もかたむいてゐるものもある。一しゆんのちがひで學校へうつられて僕は命拾ひをしたやうに思つた。今頃汽車に乗つてゐる人達の不安はどんなであらうと思ふと僕達だけがこつそり地獄から極樂へ逃げ込んで來た様な心持がした。水は盛んに流れて學校の廊下をも流れ土がたくさん流れこんで居る。あまりに盛んに水が流れてゐるので、もしも學校が流れはしないかと心の底では不安な氣持がたゞよつて居る。ふと空を見るとだん／＼空が明るく雨も次第に小降りになつてゐる。そして今まで日本中を水びだしにせんとばかりに降つてゐた雨もつひに止んでしまつた。僕達の安心はいふまでもない。しかしまだ水は土を掘り返さんばかりに流れてゐる。しかし今度見た時には前と大分感じがちがつてゐた。僕たちが色々話をして居る時、ふいに體中ぬれ鼠のやうになつた圖畫の先生が入つて來られた。何事かと思つて居ると先生は「もう大分水の流れがゆるやかに男の足では十分歩けるからばつ

家へ着いたのは丁度六時であつた。外で僕のかへり待つて居た弟が「お兄ちゃんか歸つたよ」と大聲で皆に知らせた。家では皆大へん心配して居られた。父母は玄關へとんで來られて大よろこびで「よく歸つて來た。よかつた／＼」と何邊もおつしやつた。僕は今迄の一部始終を話してゐる間ひや／＼して聞いてゐられた。大阪神戸間はすべてが不通で學校へ電話してもかゝらないしだん／＼心配になつて來たので店の屈強な者二人徒歩で學校へ迎ひにやられたさうである。富山君の家でも大變心配して居られたので僕の歸つた事を電話するとお母さんがとんで來られていろ／＼と様子を聞かされたが途中ではぐれてしまつて富山君はまだ歸らないので大變氣の毒であつた。

僕はやれ／＼と思ふと急にくだびれたやうに思つた風呂にはいつてゆかたに脅かへた。今まで忘れて居たが急に腹がすいて來た。色々御馳走をしてもらつたが却つて食べられなかつた。皆からいろ／＼尋ねられたがあの恐ろしい様子はどんなに話してもいかに分らなかつた。

やがて富山君も歸つたときいてやれ／＼と安心した八時前迎ひに行つた人が歸へつて來た。やつと學校へつたが僕がゐるので又引きかへしたさうであるそして「よくまあ、あんな急流の中を歸られたものですね」と話し合つてゐた。

神戸市内は到る所浸水し殊に來る人毎に加納町、宇治川、荒田方面は被害が激しく家が流れ土砂に埋めら

／＼歸る用意をしない」と、いはれた。僕は大きくで用意した。そして神戸へかへる上級生一人と浅野君常友君徳末君と歸らうとした。そして外へ出やうとしたが流れがまだ急なので容易に歸れない。いつまで待つてゐても流れがひきそうでないの先生に連れられて安全な國道まで行つた。いつも見るあの美しい國道とはまるでちがつて道全體が土砂に埋められて居た。

先生はこゝから行けるところまで行つてもし歸れない時にはこの下の先生の家をたづねてきなさいと言はれた。自分の身の危険もかまはず生徒の安全を氣づかれた先生の有難さがしみ／＼と分つて感謝せずにはゐられない。こゝで先生に別れて一行六人は國道を西へ／＼と向つた。こゝから神戸までも歩いてかへらねばならぬ。もし途中で日が暮れてかへれなくなつたらどうしやうかと思ふと急に心細くなつたが支那の何百里といふ道を重い荷物を持つて行軍してゐられる皇軍勇士の事を思ふと心も急に元氣ついた。途中で三四人の大學生に逢つた。大學生は神崎から歩いて來たさうで神戸へかへるなら一緒に歸らうと云つた。大學生は非常に足が早いので僕らもこれにつれ早く歩いた。

住吉川の手前まで來ると直徑一二米もある大きな石がいくつもごろ／＼ころががつてゐる。たぶんこれは住吉川の上流から流されて來たのであらう。水の力の偉大なものには今更のやうに驚いた。その附近にゐた人の話によると小さい子供がこの石の爲に一度に七人も死んださうだ。

れ、そして數知れぬ死人を出したことを話して居た。僕は今更ながら自然の力の偉大なことに驚いた。そして一生涯この恐ろしい經驗を忘れないであらう

水害當日の自己の行動

三A 酒井公雄

「ザッ」と今朝も雨が降つてゐる。七月五日の朝の事であつた。三四日と降り續いた雨は今日も降つてゐる。今日は試験だと思ふとゆううつな雨もさして氣にならず、ハリキツテ家を出た。學校へ着いて間もなく、八時過頃である。急に篠つくやうな雨になり出した。二日も降り續いた雨しかもその上にこの豪雨。來る者は皆不安さうに顔をこぼらして「省線が不通になつた。」「住吉川が潰れた。」とびしよ濡れになつて云ふのだつた。試験も一時間延された。しかし第二時限より始まることに決定して筆を振ひ始めたが氣は落着かず豪雨と山鳴りの如き音に散らされた。

その試験も終つた。外を見ると相變らずの豪雨だ、地もめり込まんばかりに強く叩きつける大粒の雨が降り續いてゐる。僕はこの雨を見たとき何といふか一種の冒險的な考へが頭に浮んだ。濁流が逆巻きの風の吹き荒ぶ中を歸る自分の姿を考へた時、自分が冒險小説の中に現はれる主人公のやうな氣になつて一種のスリルを感じた、又吉屋川の濁流の中に浸されてゐる家の事を思ふとき急に歩いてゐる歸らうといふ考へが起つた

そこで石上君・高木君・河野君等の三人と歸る事になった。「おい、いつか歸らうぜ!!!」。「よし来た!!!」。何となく面白いやうに熱い血が湧いた。勇氣漲々としてと云ひたいが外から見れば異様な姿であつたかも知れぬ。正門を見れば濁つた流れが川の如くなつてゐる。仕方なく東門より出る足を洗ふ、濁流はともすると足ごと體をさらつて行きさうである。阪急のガードに來て見ると通るところの騒ぎではない身長を越すばかりの水は白い牙を振り上げて襲つて來るかのやうだ。土手に上らうと思ふがそこにも濁流、しかしそこに大きな木があつたので皆で渡さうと工夫した。天災は人心を一致させる。實にさうだ。水害當時に於ては人心は皆一致されて其所にも此所にも美しい人情話が咲いた自動車も困る人を見れば乗せるし水を入々に分ち合つたものである。その大木を皆一心同體になつて渡さうとした、雨に濡れ下半身は濁流にさらされて其所には何人といへどもさへぎる力はない美しい人情の塊りである。しかし遂に木は渡されなかつた。津田君は木を運ぶ時濁流に吞まれた。皆一瞬ハッと息を呑んだが二三間下流に浮び上つた。その泥まみれの姿を見て皆は笑つた。而し其處には何かしら笑ひ切れぬ何ものかが潜んでゐた。皆は其處を渡ることをあきらめた。ずつと遠まはりをして阪急の土手に上つた。そして苦心に苦心を重ねやつと省線の驛に迎り着いた。その時は丁度晝だつた。實に一時間もかゝつて驛に着いたのである。それから不通の省線通路をば〳〵と四人で、芦屋

に向つた。平素四・五分の道程が今では申々涉らぬのである。實に科學の力の偉大さを知つた。然し今はその偉大な力も大自然の前には抗すべきもなく遂に跪いたのである。ふつと氣がつくと相變らず大粒の雨がふりしきり降るものゝ如く白い牙を振り立て向つて來る。大自然の力。偉大な大自然の力。

水害當日の自己狀況

二A 連水 弘

七月五日の朝であつた。雨は勢ひよく降つてゐたが僕は何時もの如く登校すべく省線明石驛へ行つた。電車に乗るには乗つたがいままで待つてもなか〳〵出さうもなかつた。人々は待ちきれないやうにばつ〳〵言つてゐた。誰か〳〵「神戸の方が荒れてゐるからだ」と云つたので成程と思つたが家を出る時にはこんなことは豫想だにしまかつたので實に驚いた。しかし「まさか……」と思つたので唯早く電車が来てくれればとばかり思つた。其のうちに電車が變車した。窓外を見つめてゐたが行くに隨つて相當ひどいところが目について來たがまだどうも思つたことではないと思つてゐた。非常に長く感じたが住吉驛を過ぎた。次はもう下車するのでやれと〳〵思つて座席から立ちとうすると乗客達皆なんだか、がや〳〵云つて窓の外を見てゐるので僕もなんだらうかと思つて見ると學校へ行く僕の専用道路とも云ふべき鐵道にそつた道路とも云ふべき鐵

道にそつた道が今は川と化しドゥ〳〵と流れてゐるのではないか。これにはさすがの僕もはんだうにびつくりしてしまつた。本山の驛を下車したが平常通つて行く道を行けないので他の上級生達と一緒に全くとはまわりをして阪急電車の下まで來たが此處も水で行けないので仕方なく電車の鐵道の上へ上りレールをつたつてやうやく學校まで行けた。學校の運動場も大河のやうに水が流れてゐて實にもすごい有様であつた、唯單なる驚きが恐怖に變つてゆくのを覺えた。第一時間目の授業がすむと先生が歸つてもよいとおつしやつたので僕は同じ方角へ歸る友達と一所にズボンと股の上までもまくり上げ教員服を土服の上から着しいかめしい姿で緊張して校門を出た。登校した時と同じ道を通過して苦心して本山の驛まで來るには來たが電車は校内に止つたまま動いてゐなかつた。僕はしばらく驛の中に居たがいくら待つても電車は動きそうにもないので皆と相談した結果住吉まで行けばどうにかなるだらうと言ふので線路傳ひに住吉の方へ進んで行つた勿論駄目だつたら引返すつもりでゐたが途中までくるともう行くにもかへるにもどうにも動きが取れなくなつてしまつた。後をふり返つてみると僕達の歩いてきた線路の上には早や水が上りかけて居た。幸ひ甲南高女の北に汽車が立ち往生してゐたので皆一先づ其の汽車に避難する事にした。汽車の中には家を流されたらしい朝鮮の人達が多勢僕達よりも先に避難して居た。こうしてゐる内に雨も止むだらうしまあどうにかなる

く事にしました。汽車や電車が開通するのは何時のことか分らぬと言ふので翌日の夕方小泉君のお父さんや下男に送つて頂いて神戸から明石まで船で歸つてきました。家は全々被害はありませんでした。

甲南小學校同附屬幼稚園

(一) 甲南小學校

晴天らしい晴天は一日もなく、約一月以上も続いた今年の梅雨は、七月三日以來俄然豪雨となり、常には水の無い住吉川も濁水が河床一面をおほふ様になつて居た。二日目・三日目となつて來るとそろ〳〵出水の心配を持たぬでもなかつた。然し五日の朝の住吉川の水量は六・七尺位で、あの昭和十年六月に阪神國道を住吉川で途絶せしめた時に較べると未だ〳〵水は少かつた。

本校に於ては此の朝七時、堤校長が應召軍人見送りの爲め住吉神社に行かれ、七時半頃歸校され水を見て來られたし、濱野先生等も國道方面より學校への道で水を見られたが、竹村邸東側で消防が土嚢を入れて居たぐらゐで消防組員の話によつても、前記の如き状態を見て別は危険とは思はれなかつたので豫定通り講堂朝禮を済まして授業に取掛つた。勿論此の間、小使、手傳ひ等を水の見張に出す事は怠らなかつた。各學年の授業中は堤校長も水を見に出て居られた。この

だらうと思つて僕達も初めは面白半分に汽車の窓から猛烈にふりしける雨足を眺めてゐた。然し雨は益々はげしくなる一方だ。山手の方からは土色をした濁水が渦をまいてものすごい勢ひでこちらへ押しよせてくる地上より三米餘りも高い線路の土手に突き當つて左右に分れてゆく。水量はいよ〳〵増して來た。次第に皆は氣が氣ではなくなつて來た。雨にぬれて寒いしおそろしさでブル〳〵ふるへて居る者もあつた。後で考へてみると僕は割合おちついてゐたやうである。朝鮮の人達の女子供も「オイ〳〵」泣き出す始末で實に悲惨だつた。車掌に西の方の様子をきくと住吉川が決潰して線路が浮いてしまつて駄目だと言ふ。僕達の避難してゐる汽車も地盤がゆるみはじめたら危険だ。水は段々と増してくる一方だ。さすがに僕も雨も止まずこのまゝだと駄目かも知れないと思つた。校門を出てから今まで行動を共にしてきた者は尋常科の二年生十五人位であつた。一生懸命神様にお祈りしてゐる者もある。此所に止まつてゐる事を危険に感じてきたのか皆甲南高女へ避難しようと言ひ出した。然し僕は動き廻るの返つて危いと思つたから無理に皆を止めて居た。だが水は早や線路の枕木の上までも上つて來はじめた。僕は車掌に相談すると「此所が危険だと思つたら何所へでも避難して下さい」と言ひ出す、はじめは「大丈夫だ」と言つてゐてくれたのが……僕達は泥沼のやうな濁流の中へ一齊にとびこんで死物狂ひで甲南高女の方へ突進した。僕のやうな背丈の高い者でさへ腹までも水が來てゐたから背の低い者等は胸當りまで

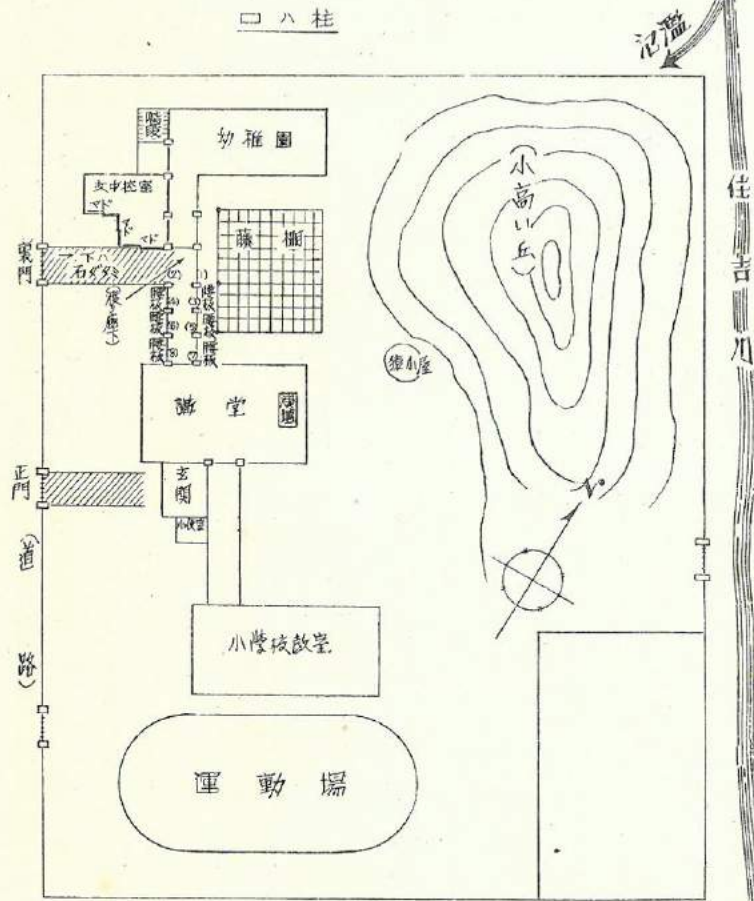
日児童は一割位の缺席の程度であつた。

第一時限が半ばを過ぎた頃、即ち午前九時頃であつたらうか、校長は各方面の情報や天候、川水等から判断して「児童の歸りに交通機關の途絶する憂があるから、今より直ちにお歸りにする」との報を給仕と二人で各教室にもたらされた。そこで全児童は即刻授業を中止しいつもの如く講堂に集まつた。常ならば各通學分團（五・六人）を組長（分團の長）が責任を以つて家へ歸し、國道のみは乗車する迄、職員一名同伴するのであるが、その日は徒歩の者も廣瀬、廣瀬啓の両先生が相當近く送り、又電車組も降車後の危険を思ひ濱野、村田兩先生が同伴する事に決し、講堂で二・三の注意を與へて後徒歩組約百二十名程の中南の方は佐平先生が、北の方は啓太郎先生が送る事として先づ出校した。一方國道組はそろ／＼靴脱場の方へ來掛けて居り、村田先生が先づ電車が不通でないかを確めに裏門から岡谷邸の邊迄行かれ、濱野先生や児童は出る用意をして居た。大西先生は電話で住吉驛へ問合せると「全線運轉」との返事があつた。

その時早くも濁水は堤を越えんばかりとなつて居たので、見張の者等が「もう駄目だ、危い!!」と急を告げ、村田先生も直ぐ引返して來られ、全員再び講堂へ入つた、その時講堂に居た者は後の調査により全部で七十三名であつた。早くも水は庭から猿小屋の邊に迫つて居た。誰云ふとなく「幼稚園の二階へ行け!!」と叫び、高岸先生が先頭の方に、濱野・村田兩先生が中程に、校長先生・大西先生が後からついて幼稚園への

渡廊下へ走つた、河原先生も小學校の方から講堂へ來られ後に居られた。その間に大西先生は小便と一緒に玄關の水を排水するべく扉を破つたりして居られたが段々増水するので仕方なく渡廊下へ行かれ、小使は、玄關に居た。その時講堂の床が水壓の爲、恰も餅のふくれる如く上つて來るのが認められた。高岸先生と児童十一名が足許に水を踏みながら／＼幼稚園へ渡つた瞬間、濁水はどつと渡廊下を襲ひ、ちやうど廊下

に居た児童と職員等六十餘名は腰板に掴まつた。引返さうとした高岸先生は濁水に妨げられ、而も二階には先に避難した幼稚園児十八名が居り、女の先生三名だけしか居れないので之等の保護の爲高岸先生は二階へ行かれた、次の危険の場合の對策を講じて机を総際迄運び萬一の場合に浮とする様にまでして居られた。一方廊下では濱野、村田兩先生が各々二名宛の児童を連れて通路の腰板の無い所に居られたので、それ等を



甲南小學校同附屬幼稚園遭難記附圖

取敢ず、女中控室へ入れ水泳に覚えある濱野先生は下手へ廻り萬一流れた者を助けようとするれば、村田先生は(1)の柱に掴つて他の柱から児童を幼稚園へ送つて居られた、それも四人位で後は送れなくなつた、その時大西先生は七、八人の児童を、或は體に或は腕に保ちつゝ、右手でしつかりと(4)の柱を掴んで居られた。校長先生、河原先生も(8)の柱に掴まり、他の八本の柱や腰板全部に児童がかかり付いて居た。各先生も「頑張れ、離すな!!」と叫び続けられた。その時學校西隣の靜邸に數人の人達が助けに來たが濁流物凄く渡つて來られない。然し金子巡査と空區八百屋、別所徳治氏の二人が飛び込んで來て、それ／＼児童の救助に當つた廊下西側の木には永田さんの女中さんが、主家の女兒を大西先生に托し、他の児童に柱を譲つてその木に掴まつて居る、そして尙も「お嬢さん助かつて頂戴／＼」と細々と叫んで居る。水は段々増して來て腰板を没して來たので皆柱へ／＼と登つて行つた。その内濱野先生は、現在の位置では消極的であると考へられ再び濁流を横切つて、ふじ棚へ出て上から子供をふじ棚の上へ救ひ上げて居られた、その頃児童や女中さんの二三人が講堂の中へ流れて行つた、一方村田先生は、児童をふじ棚の下でブランコの鐵柱に移して居られ、その等の児童は又濱野先生が上へ上げられ、幼稚園の二階へと避難した、然し屋根が容易に歩けないので高岸先生等が之を二階の窓から出て助け入れて居られた。未だ／＼児童は澤山屋根の下に居り、「助けて!

／＼」と悲鳴を擧げて居る、暫らくすると又五、六人の児童やお母さんが柱を離れて行つた。その時上流から大きな柱狀の材木が流れて來たので村田先生は足でそれを(5)(6)の柱の間へ橋渡しされた。すると大西先生は「有難い」とばかりに、その材木を利用して児童を村田先生の方へ送られたが、水は刻々増して來るので、その材木に児童をしつかり、掴まらせ、「屋根から助けてあげる」と云つてふじ棚の上へ出て來られた斯くする内も、濱野先生や、金子巡査は児童救助に全力を擧げて居られた、その内又激流が來て校長先生と横井君を連れた金子巡査は講堂の中へ押し流された、村田、大西兩先生は、別所徳治氏と三人協力して廊下の屋根を懸命に打破られ、やつと少しばかり穴を作つた、下から「わあ」と云ふ喚聲が一時に揚つた、其頃は濱野先生も穴の所へ來られ、協力してもつと穴を大きくし、児童を此所から救出するのに成功した。各先生共疲勞して居られたが、勇を奮つてどん／＼児童を屋根つたひに幼稚園の二階へ避難させられた。其頃には先程迄永田さんの女中の所に居た一人の児童の姿は見えなくなつて居た。児童約二十名を此の穴から助け出して後屋根の下に最後迄居られた河原先生が一人も居ない事を報告されてから屋根に上られた。その頃は流れも少し納まつて居たし、廊下の所あたりは歩ける位迄、土砂が高くなつて居た、そこで今度は永田さんの女中さん（森光ふで子）を助けようとして丁度その時、講堂の屋根に居た青年團員數名が、臨時に布切れ

で作つたロープを投げた。それを女中さんが掴んだ。二階からは児童が、「ふで、しつかり!!」と盛んに叫んで居る。段々講堂の方へ引寄せられて來る、も少しだ、皆が助かつたものと信じて居た。それが何たることであらう。講堂の西側の軒迄引寄せられて來た時、折からの激流の爲、ひさしの下へ吸ひ込まれるように流れ込み、そのまゝ見えなくなつてしまつた。何たる不運、何たる御氣の毒なことであらう。稍々たつて皆が二階へ上つた時、校長の居られぬのに氣付いた、児童達は「校長先生助けて、校長先生が居ない」と叫び続けて居る。

一方校長先生は先程巡査等と講堂の中へ流れ込まれたが、幸ひ、西北隅の流のよんだ所へ止られ、足をつくと床が上つて居て足がついた。見ると巡査が横井君を連れたまゝ、西側廻轉窓に掴まつて居る、助けようとしたが、三四尺の間が激流で、手の出し様が無い。そうする内に横井君は巡査の手から離れて行つてしまつた。こちらを見ると廣い所に三、四名の児童や女中が居たので校長先生は之等を連れて東の水上に居る、教壇の上へ避難して居られると、外で児童の校長先生を捜す聲が聞えた、そこで何とかして外へ知らせうとあせられるが窓が開きも破れもしない。西から次々と廻轉窓を破らうとして行かれると一番東の端の窓が破れたので、そこから手を出し中の人數を知らすべく五本の指を示された。之を見た諸先生は、ぬかりながら幸じて歩く事の出來たふじ棚をつたつて窓の所

から、校長先生他四名を救出された。又一方道の方へ流された者も、或は自力で泳ぎ、或は青年團員等の手によつて助けられて、屋根つたひに、幼稚園の二階へ来た者が三、四名あつた。皆が幼稚園の二階へ集つた時も水は未だおとろへず、雨も降りつゞけて居り、ちようど二階の押入にカーテン等の洗濯したのがあつたので之を裂いて體を拭き、體にまとうたりしてゐた。

そこで此所に危険を感じられた諸先生は、次の避難所の選擇に心を悩まされた、或ひは天井を破つて天井へ上る處置をされ、或は教壇を舟にして避難しようとしたが、結局、幼稚園北の窓から垣根へ橋渡しをして進藤郎や松林へ出る道を見られた。進藤、田中、岡谷、平佐各邸宅は下は打破られては居るが二階がしつかりして居るので、進藤さんへは幼稚園を、他の三家へは小學生児童を避難させた、その時は、上流で東西へ溢れ出るため住吉川には一滴の水も流れて居なかつた。そこへ、児童を見送りに出て居られた、兩廣瀬先生が相前後して歸られた、兩先生の足どりは、佐平先生は住吉驛方面へ児童を見送つて學校の西南隅迄歸つて來られると、もう濁水滔々と學校を圍み容易に近附け得ない。そこで何とかして學校へ近づくかと迂迴されて、鐵道線路から住吉神社裏へ出て、平生邸東側の道を上り野村徳七氏の裏の阪急線路にたどり着き其所から線路つたひに觀音林クラブに出て來られた。ところが、其時既に、伊藤邸や、阿部邸や眞野邸は跡方もなく、住友邸は屋根迄水に没して居た。巨大な石

や材木がどん／＼流れ、阿部邸の裏がどうしても横切れない。うろ／＼して居る中に、伊藤方の女中に會ひ阿部泰治君が同家に居たとの事を聞かされたが、その時には伊藤邸のあの悲惨な水禍の犠牲の事は全く知らなかつた。不安と早く學校へとあせる氣持の中に土藏が何ものかの爲に一時に壊滅させられたのも目のあたり見られた。かくて間もなく水勢のやゝ衰へるのを待つて阿部邸内を横切り、竹村邸東側から學校へ歸られたのである。一方啓太郎先生は、児童を送つての歸途觀音林クラブ裏で異様な物音を聞き川を見られると濁水が阪急鐵橋の所で上へ飛上つて居るので之は大變と大急ぎで學校へ知らさうとせられた。ところが水道路迄來ると濁水が激流をなして、どうしても横切れないので、引返し迂迴して岡橋邸の前から下つて水道路を越え松岡邸の前迄來られた。その間ずつと、「水が來る、危い」と連呼し續けて居られた。もう此所迄來ると水は腰位迄あつて仲々困難である、「學校ではどんな事が起きて居るだらうか、若しやの事はないか」と案じて居られると菊池さんが來られ話して居られる内に、梅やん(學校の手傳ひ)が學校の方から水に迫られて來て、「學校では全部幼稚園の二階へ避難した」と告げたので、やつと安心された。さうする内にも濁水が來るので、ゴロタ道を住吉驛迄下り、段々西の方へ追はれて一時は自宅迄行かれたが、どうしても學校が氣掛りで、又行かうとされる途中大西美智さんから「甲南學校では見殺しやつたさうな」と云ふ様な噂を聞

き、急に心配されて池田父子と共に弘世さんでロープを借り、ゴロタ道を渡らうとされたがなし得ず學校へ歸れないなら、水源を確めようと思はれて、阪急線路迄出られると、東の方には巨大な岩石が見えて居た、かくて水は本山村の方へ流れ住吉方面の安全を見定め得たので住友邸内の激流を涉り漸く歸校されたのである。この様にして幾分水も納まつてから、さて人數を調べて見ると、哀しい事には一年生の砂川勇雄君、同横井元宣君、二年生千原博君、五年生山中美賀子さん、及び永田家女中森光ふで子さんの五名が犠牲となつた事が判つた。助かつた者の中でも、鳥君は一時流され泳いで居る中に校舎際に流れついたので掻き登つて助かり、又、間島君は一旦小便室へ流れ込み、泣いて居ると小便さんが玄關から來た。すると「小便さん之も要らん」と云つて、財布、定期入等を小便さんに渡し死を覺悟して居たが、小便さんに救はれて天井に上り水の止るのを待つて、流材に乗つて出た所を青年團巡查等に救はれ、森本君は廣海家迄流れ、身に重傷を負つて人事不省になつて居る所を人に救はれ、丁寧な介抱を受けて助かつたのであつた。

亦先に歸宅した者の中でも伊藤金太君とその妹鈴子さんは、家も父母も一緒に流されて亡くなり、同家に居た阿部泰治君も運命を共にしたのは誠に不幸中の不幸であつた。やがて各家庭からの確かなお迎へに次々引渡し、残つたものを、平生飢三郎、平生乙彦、武田の各家庭へ

それ／＼預けてしまつたのは日暮れであつた。

その夜は夜を徹して職員が全部學校を守り、同時に明日からの處置を相談し合つた。かくて翌日からは何よりも先づ不明の者の搜索に取掛り、人夫を督し、或時は師範其他の來援者四、五百名により、晝夜兼行、不安の中に悲しみの捜査を續けることになつたのである。

(七月二十二日)

附記甲南小學校児童救助を手傳はれた人々は次の通りである、(順序不同)

空區駐在所	金子 巡查
空區八百徳主人	別所 徳治氏
住吉村垣内二二六	山本 良一氏
堀口ノ若衆	迫野 徳雄氏
空區青年團	西川 茂吉氏
西區青年團	永安 寛氏

(二) 同附屬幼稚園

當日の朝は園児約三十名が出席した。常には午前八時半頃開始するのであるが、此の日はどうしようかと思案中であつた。その中學校の方で「交通杜絶の心配の爲歸へす」と決つたので、幼稚園でも歸へす事となし、「お入り」と云つて園児を西の部屋へ集めた。二三の注意を與へて後、お迎への有る者約半數を歸へし後に残つた者十八名であつた。今山先生は家庭へ電話を掛けに電話室へ行かれたが人多勢つかへて居たので歸つて來られた。暫らくして又今山先生は辻先生に

「子供に嚮を捕かして置いて下さい」と云ひ、北神先生を連れて再び電話を掛けに行かれた。電話を二軒位に掛け他はそれぞれ委託してもだらうとされた、すると門の所で或お母さんが迎へに來られ近所の子供も一緒に連れ歸ると云はれたが、とても無理だと云つて斷られた。其の時一緒に居られた北神先生が「あゝ水先が見えませんでした」と告げられたので、「それでは二階へ避難しよう」と集めてあつた園児全部を直ぐ二階へ上けた。先刻門に居られたお母さんも、もう歸れなくなつて二階へ上つて來られた。早速人員検査をした處、十八名居たけれども念の爲北神先生と辻先生は、もう一度階下に降りて便所の中迄檢べていよ／＼全部避難した事を確めて再び二階へ上つて來た時はもう胸の邊り迄水浸しになつてゐた。小學校の方からは高岸先生と、児童十一名が來られた。そして共に次の危険に對する方法を講じ、裁縫室からゆかたを引張り出し之を裂いて先生と子供を牽ぎ合はせて萬一に備へ、理科室の教壇を窓際迄運び、子供達に「若し水が來たら騒いだりせずに、しつかり此の机の足を掴んで居なさいよ」と言ひきかせて居られた。斯うする間にも子供達には成可く外を見せない様にして恐怖心を起させない様にとめて居られたので、泣く子供は二三人しか居なかつた。

その内にだん／＼水が引いて外へ出られる様になつたので進藤さんの方へ行くべく、八人ばかりで、机で橋を渡して一人々々出して行つたが、家へ這入れない

ので歸つて來た、雨に濡れたので皆「寒い／＼」と云つて泣き出し、カーテン等を身に着けさせて居ると一人の男の子がにこ／＼して「先生お腹空いた」と云つた。今迄氣がいら／＼して居られた先生は「子供はこんなに落着いて居るのか」とやつと氣が靜まり、二つの辨當を開き一口づゝ與へると皆おいしさに食べた。時に〇時半頃であつた。

さうかうする内に小學校の児童も全部上つて來て愈々此所を去り小學校は田中、岡谷、平佐各邸へ行き幼稚園は進藤さんへ行く事となつたので、此の窓から出掛けしたが、子供達は先刻からの恐怖の爲め幼稚園の先生を離れず、小學校の先生や他の男の人等が連れようとしても泣いて行かない。やつとの事で進藤さんの家へ行つたが床上一尺五寸位は泥であつて誰も居られなないので勝手に二階へ上り押入から洗濯物等を引張り出して子供達の濡れた着物と着替へさせた。二時半頃に青年團員五人が來たので、今山先生が「大丈夫ですか」と聞かれると「さあ」と云つて居るので、「それぢや何處が安全ですか」と聞かれると「空區の松本さんなら安全です」と云つたので一人宛おんぶして五人、松本さんへ連れていつて貰つた、その中に水も引きいよ／＼安全になつた頃各々家庭からお迎へが來られて次々に手渡した。

(三) 同校児童の作文

天 災

六年 古川 マリ

あゝ思ひ出しても恐ろしい昭和十三年七月五日の午前九時頃でした。

「今日はこれで授業を終りにします。数日來の雨で住吉川の水があふれさうですから。それで皆今すぐ講堂に集つて下さい。」

と廣瀬啓太郎先生のお聲。

「裁縫がぬける。」

「試験の問題全部うつしたい。」

などと言ひながら、皆はお歸りの用意をして一緒に講堂に集りました。外は篠つくばかりに雨が降つてゐます。

講堂で歸り途の御注意を聞き、近くの人々はそれ／＼先生がおつきになつて歸つてしまひました。

後に残つた遠方の人々は、たゞじつと待つてゐました。先生方は私達を安全に歸らさうとして一心に御相談をなさいました。けれども、もう電車も何も動きません。電話も不通となりました。

其の時です。一消防手が住吉川の方から大聲で、

「堤防が切れた。」

との知らせ。之は大變

「幼稚園へ行け。二階へ上れ。おちついて。」

ふと自分を見ると、髪の毛は東のやうになり頭の先まで泥まみれです。八木さんのお母様は、自分の體を横にして其の上に小さい人をのせて上げてゐられました。

間もなく、先生方の必死のお働きによつて廊下の屋根が打ち破られ、私達がそこから引上げられました。あゝ、天の助、先生のおかげ。

先生にひつばつて頂いて屋根に上ると、三足横はまだ濁水がにくらしいばかりに流れてゐました。前を見るとなつかしいお友達が呼んでゐて下さいました。

裁縫室へ入ると、八木さんと武田さんが、私とセツちゃんを色々暖いやうにして下さいました。見ると洋服の縫目の間に土砂が入り、重荷をかついでゐるやうに感じました。私はかう言ふ時にこそ本當の友情があらはれるのだと思ひました。

あまりに寒いのでカーテンにうづくまつて／＼ふる／＼とゐますと、永田さんや森本さんが

「階段の水が増して來た。」

と心配さうに言ひました。

「ママ、ママ、おねえちゃん。」

と二年生の山本登ちゃん泣いてゐます。お母様とお姉様は流れておしまひになつたのです。

「ママは、きつと助かつていらつしやるから、泣いたらだめよ、ね。」

八木さんは泣く登ちゃんを慰めてゐました。其の時御運よく、あぐない中から助かつて、山本さんは御姿を

と先生のお聲。

「さあ。」

物すごい音と共に講堂に浸水し、リノリュームがむく／＼と盛り上ります。

「おちついて、おちついて。」

自分でつぶやきながら裁縫箱をしつかと持ちました。

「こはい。」

とセツちゃんが言つたので、

「そんな弱い事言つてはだめ。氣をしつかり持ちなさい。おちついてね。」

となだめながら、なるべく組の人とかたまつて行かうとしました。

「さあさあ。さあ、さあ、さあ。」

がつしやん、ばり／＼。どしやん。

狂ふ水障は龍つ瀬となつて私達の行手を遮ります。はや膝まで來ました。

「さあ、こはい。」

「助けて!!」

もう渡る事が出来なくなりました。今はたゞ廊下の柱につかまるより外はありません。水は一刻々増し、腰まで來ました。もう背も立ちません。大きな材木が體に當ります。

「助けて!!」

今は先生もどうしてよいかおわかりにならないのでせう、たゞ私達に

「がんばれ!! しつかりせ!!」

お見せになりました。

今まで不安に思つてゐてお顔を見る事が出来なかつた嶋さんや間島さんもやつとの思ひで助かつて上つていらつしやいました。いつも元氣で面白い森本さんも今日は弟の五良ちゃんがゐないので、さびしうにしよう／＼してゐました。

やがて大西先生と濱野先生が上つていらつしやいました。濱野先生は半身どろ／＼で大西先生はシャツが引さけ、唇は眞青でした。兩先生とも私達の命の恩人です。もし村田先生、大西先生、濱野先生方がおいでにならなかつたら、私は廊下の下に埋まり此の世を去つてゐたかも知れません。又裁縫の先生の御奮闘ぶりは大したものでした。女でゐられながら一番最後まで残つて人数を先生に知らせられたさうです。

其の時誰言ふとなく校長先生が居られないと言ふので大さわぎになりました。

「校長先生しつかり!!」

「校長先生!!校長先生!!」

皆は聲の限り叫びました。校長先生は渡廊下から講堂に流されなすつたさうです。廻轉窓から校長先生のお指が出ました。人数の知らせでせう。窓から出ようとなさつたが各窓は土砂のために中々開きませんでした。けれども一番後の窓だけ運よくおはつしになりました。そこからは校長先生につゞいて五年生の梅鉢さん二年生の田村ちづちゃん、一年生の山中ひな子ちゃんと森さんの女中さんが出ていらつしやいました。

と元氣づけながら、懸命に救の手を伸して下さるのでした。

「あゝお父様、お母様。……」

順次に浮ぶ父母兄弟、先生、親しいお友達の顔。セツちゃんが、

「苦しい。」

と言ひすがりますが、自分も少し手を離せば流れてしまふので、片手をつかまつて、片手でセツちゃんの體をひつしとつかまへてあげました。其の時にはもう裁縫箱も私の手から離れて、水の中に消え去つてしまつてゐました。

「皆おもくて苦しいからかばんをはづしてもよろしい。」

と先生のお聲がしましたので、私はセツちゃんのと自分のかばんをはづしました。

「助けて!!助けて!!」

援手を求める聲はいつまでも／＼續きました。

「あつ大へん。」

私と同じ柱につかまつてゐられた、山本さんのをばささんと山本陽子ちゃんが手を離して流れておしまひになりました。

「森さん・八木さん・武田さんはどこにゐられるのだらうか。」

とう／＼に思ひ、半分夢心地で、他の柱につかまつてゐられる方々に目をうつしました。あゝ一年生の松岡さんは女中さんにおんぶされながら泣いてゐました。

森さんの女中さんは、小枝ちゃん、茂ちゃん、精二ちゃん、三人が皆無事に居られたので大さう喜んでゐられました。

此の時一方では永田さんの女中さんに大勢かゝつてゐました。

「永田さんの女中さん!!」

皆は一心に叫びました。

「ふで、しつかり!!」

永田さんは眞剣に呼んでゐました。けれども

「あつだめだ。」

永田さんの悲しさうな聲と共に女中さんのつかまつてゐられた木は倒れ、命の綱も切れ、あつと言ふ間に濁流に吞まれて姿は見えなくなりました。聞けばあの女中さんは、五年間も永田家に仕へてゐたといふいゝ女中さんであつたさうです。あゝ何といふ氣の毒な事でせう。どうか助つてゐられますやうに。

村田先生が

「もし水が來たら此の上へ上りなさい。上には木が十文字にしてありますから、其の木にまたがれば安全です。」

とピアノの上につて言はれました。

「理科室の方が安全だから理科室へ行け。」

皆はどうと理科室へ押寄せました。

幼稚園の人々は、先生のお辨當を一口づゝ頂いてゐました。校長先生に今山先生が、

「先生おかげをおひきになりますから、之をおめし

下さい。」
と言はれても、

「いやかまはん。わしはよい。生徒を。」
と言はれて、中々聞かれず、私達の事を思つて理科室のテールを外へ出させたりなさいました。

「あゝ、こんなよい校長先生がゐられてこそ、甲南小學校が益々よい學校になるのだ。」
と私はつくづく思ひました。

やがて雨も小降りになり、空も大分ましになりましたので、外へ家具をつみ重ね、其の上を學年順に消防手の人に手を引かれながら、進藤さん、岡谷さん、田中さんへ分けて避難させて頂きました。

途中、理科室から遊びなれた松林を通りました。遊び所として楽しく遊ばせてくれた松林、おまゝごとをして境をするのに使つた堅い土も、今はぶさ／＼と膝の邊まで突込めるやうになつてゐました。洲の上を家鴨がひよ／＼と歩いてゐました。

やつと辿りついた田中さんのお家。二階の勉強室で休ませて頂き、おいしいおにぎりでお腹をふくらませました。心を落つけて外を見ますと、本當に想像もつかないやうな光景が、眼の前にはあらはれて來ました。此の時、

「五良ちゃんも助つた。」
と言ふ誰かの聲。森本さんの顔は見る見る嬉しさに輝きました。

私が窓／＼にカーテンにうづくまつてゐますと、廣

瀬啓太郎先生がいらつしやいました。先生は御自分が送つてゐられる間に、此のやうに變り果てた様子を驚いてゐられるやうでした。先生は暫くすると

「魚崎の人達が安全に歸つてゐるかを調べて來ます。」と言つて白い紙を持つて出て行かれました。

聞けば、大西先生は家が屋根まで埋まり御家族がどこにおいでになるか分からないさうです。誠にお氣の毒な事です。高岸先生の家もつかり、校長先生の家も二階だけ残つたさうです。

數分後、武田さんで友達はどうしてゐるか知らんと話してゐると、外の方で何だか聞いたやうな細い聲がするので、窓からのぞくと嘉納さんと松下さんとでありました。長い間あはなくて久しぶりに聞いた聲のやうに感じました。

「松下さん、嘉納さん。」
と私は思はず二階から呼ぶと、

「あらまあ、古川さん。」
と言つて、私の姿を見て大へん驚いてゐました。

「二階へ上つていらつしやいよ。」
「ふん／＼。」

松下さんは歸り道の模様を細々と語つてくれました。私も今までの事を話すと、二人は驚いてゐました。丸井さんや照野さんも來ました。

「皆んな一旦學校へ來て下さい。」
と先生が言はれたので、學校の讀書室へ行きました。住吉川は一滴の水もなく、空はからりと晴れて、立

派な住宅地や美しい畠を土砂で埋め、其の上幾人かの尊い魂が神佛のもとへ行かれたのも知らぬ顔にゐるかのやうに見えました。

讀書室へ行つて間もなく廣瀬佐平先生がいらつしやいました。先生のお話によると、伊藤孝太良家はあつと言ふ間もない位恐しい水腫に吞まれ、金太ちゃんも鈴子ちゃんも家の方全部お流されになつたさうです。私の胸は早鐘のやうになりつゞきました。

「あゝをち様、をば様、いとこの金太ちゃん鈴子ちゃん。」

次々と私の目の前に浮び立つていらつしやるお方。今はもう佛様のもとへ行かれたのです。

讀書室の奥にゆかたが置いてあつたのでそれを着、やつと身のひきしまつた思でおにぎりやお茶を頂きました。

「もう今は何時でせう。」

私達は、芹屋や西宮への電車が不通で歸る事が出来ませんので、御影や住吉の親類か知合のお方の家に泊る事になりました。

私とセツちゃん、松下さんの家へ行くはずでしたが、其の時本家の忠兵衛をち様が來てゐられましたので、一旦梅林（梅林とは伊藤竹之助家）へ行く事になりました。

「一二さん、かはいさうね。」

皆は同情しました。一二さんは學校の歸途小學校に來て、人々から御家の方が流されて亡くなられたと言ふ

事を聞いて、大へん驚いてゐられ又悲しさうな様子でした。

「八郎はどうした。」

「僕は知りません。」

一二さんと本家のをちさんは何か言つてゐられました私は手傳さんにセツちゃんはおいやさんにおんぶしてもらつて學校を出ました。途中八郎さんと出會ひました。二人とも此の日から孤兒になられました。女學生が私達の姿を見て何かさゝやいてゐてゐました。

やつと辿りついた梅林の門をくぐつてお座敷へ入ると、をば様が白い布で何かつくつてゐられました。

（中略）

色々な話をしてゐる中に晩になりましたので、御飯をすませて床につきました。思へば此の日の世を去られたお方は、五年生の阿部泰治さん同山中美智子さん、二年生の千原博ちゃん、一年生の砂川勇雄ちゃん同横井元宜さんと永田さんの女中森光筆子さん、それから伊藤家の方々です。眠らうと思つても眠れない私は、じつと亡くなられたお方の事を考へました。

おとなしくて眞面目であつた阿部さん、相撲が強く活潑であつた金太ちゃん、にこ／＼と丸いお顔の山中美智子ちゃん、踊りが上手で可愛らしい鈴子ちゃん無口でおとなしい千原さん、新しいかばんの砂川さんと横井さん方のお姿がやみの中に出ていらつしやるのでした。

「あゝ、此のお方らの事を思へば、私は命を助けて

頂いて本當に有難い事だ。」

と思ひました。私は梅林から伊藤（茂）さんの家へ來た時、お佛壇に向つて命を助けて頂いた事を佛様に御禮を言ひました。（中略）

翌日おみせのをち様とちいやに連れられて、やつと我が家に歸りついた時は、何だかほ／＼と暖かくなつたやうな氣がしました。お姉様やお兄様や女中さんの顔を見た時、一年ぶりに出會つたやうに感じ、又家もなつかしく思ひ、思はず机にすはつて引出しをあけたり珍しさうにあたりを眺めたりしました。

歸る途中甲南小學校を通りました。校庭は想像もつかぬ程かはりはて、其處にテントが張つてあつて、中で先生方が御相談をしてゐられました。森さんもお母様と一しよに學校へ來てゐました。

伊藤家の御葬式は三回にして終り、納骨の日も過ぎました。學校の荒れ果てた校庭を整理して、八月七日涙の慰靈祭が行はれました。六年間毎日通つた門も今はあとかたもなく、南の運動場の隅に滑り臺が

「大へんな事になりましたね。」

と言はんばかりにしよんぼり残つてゐました。

此の度の山津浪の損害は多大なもので、巨岩巨木をどん／＼押し流し、阪神間の住宅地を一朝にして河原と化した水の強烈な力を驚かすはゐられませんか。非常に際し不慮の大水禍に會つた私達はどうしたらよいでせう。私は此の體驗を天の試験と思ひ、此の様になつた學校の児童として、一心に勉強しなければならま

せん。

水 が い

二年生 弘世助 一郎

七月五日はおそろしい水がいの日でした。

四五日前から雨つゞきだつたので、どうなることかと思ひながら雨のふる中を學校へ行つておんきやうをしました。一時間してゐると、濱野先生が

「雨があまりひどくふるから今日は之でやめます。かへるやういをして、かうどうへ集りなさい。」

と、おつしやつたので、ぼくたちは、おほいそぎでかへるやういをしました。さうして、かうどうにあつると、かうちよう先生が

「雨があまりひどいからおかへりにします。道ぐさせずにいそいで かへりなさい。」

と、おつしやつたので、ぼくは大きいそぎで雨のじやん／＼ふる中をきやうだい三人で かへつて來ました。水だう道まで來ると、水はひぎの所まであつてとてもおそろしいでした。やつとおうちについてほつとしました。三人ともびしょぬれになつてゐました。

ごう／＼といふものすごい音がするので、みんな「こわい／＼。」といつてママにくつ／＼いてゐました。しばらくすると、ちいやが かへつて來て「甲南小學校がつぶれた。」といつたので、ぼくはむねがどき／＼して來ました。さうして水の中でこまつてゐる人があるときいて、ぼくは目からなみだがぼた／＼出て來ま

一時ごろになると雨もやんで、ごう／＼といふいな音もしづまりました。こは／＼外をのぞくと、どろの中から出て来た人や、水で流されて助けてもらつた人がたんにのせられて、おうちの前を通つて行きました。ぼくはどんなになつたのかとしんばいになりません。そこへうゑ木やさんが来て、じぶんのおうちの流されたお話をして、「一度くわんのんばやしへ見にいつたらどうです。」といひましたので、みんなそろつてくわんのんばやしへ見に行くかどうかでせう。あのたくさんのりつばなおうちが、かげもかたちもありません。川のそばのおうちはまるで、おとうとがおもちゃをこわしたやうにぜんめつです。「ぼくは水の力のひどいにつく／＼かんしんしました。おにかいから出入りしてゐる、あはれなおうちもあります。いとうさんのおうちは、みんななくなられておにいさん二人がおのこりになつて、なんとおきのどくなことでせう。

　　學校はどろで、うすまつたが先生はみんな、おげんきだつたので、ぼくは何よりうれいす。けれど四人もおともだちがなくなられて、何とかはいさうなことでせう。

あくるあさ學校へみんなでおみまひに行きました。

あくる日の朝やつとお父さんやお店の人たち三人で
むかへに來て下さつた時は、ほんとうにうれしかつ
た。お父さんも、

とうれしそうだつた。ふわさんへお禮をいつてかへつたが、その道も自動車が水の中をざあ／＼はしつた。永い間かゝつてやつとお家へかへつた。おばあさん、おかあさんもとんできて、

と、よろこんで下さつた。そして私の顔色がわるいからといつておくすりをのませて下さつた。奥のおには

ぼくは思はず「元氣だつたね。」ときげびました。
 ぼくの「ばん大じにしてゐた、つづりかたのおちや
 うめんと、「心の力」の本は今どこにどうしてゐるで
 せう。
 (七月六日)

三年 齋藤眞佐子

「こんな日でも學校へ行くの、もう少しばかり雨が小雨になるまでまつて居たらどう。」

と、いつて雨の中を行つた。雨はますます強くなつて來た。勉強してゐる間も外の雨が氣になつた。讀方の時間に先生が、

「雨がひどくなつたからみんなかへるしたくをなさ

になつても、わすれられない。

金子巡查談

なされた。

出て居るよ」等の話をなし、歸つて朝食をしたのは七

「住吉の人は、かへつてよろしい。」
と先生がおつしやつたのでかへられた。

「こわい」

れしかつた。ほつとしたが、下を見るとまだごうく

で、私は合羽を脱ぎ、上服と劔とを竹村清次郎氏方女

中に預け長靴を脱ぎシャツ姿にて土手に上りそのしづを一人直しかけたが、仲々うまくいかないので「誰か手傳へ」と怒鳴つたが誰も危い仕事なので「金子さん危い、止めときなさい」と云つて手傳はうとする者が無い。

折柄國道、住吉川の警備の者から「國道が危い」との報が来たので、警察官、組頭以下消防組員、役場吏員等皆國道方面へ行つてしまつた。が、私は「此所も危険なのだ。」と空區長石木氏と共に其所で警戒して居た。それは八時五十分か九時頃である。物の五分も経たない内に、ふと北の方を見れば、覺道方東側が二三箇所切れて、盛んに水が溢れて居る。「しまつた」と私は直に竹村方に飛込み「電話貸して下さい」と云つて電話を掛けようとしたが、電話は不通である。更にその西側竹村方新宅へも飛込んだが又不通である。

(其時私は「甲南小學校の電話番号は」と女中等に云ひつゝ飛込んで行つた様に記憶して居る)更に長谷川佳平氏方へ行かうとしたが、竹村方の裏門が閉つて居るので開かない。私は「エイ」とばかりに體當りでそれを押開いた。出て見ると裏の道は早や激流の川である。それを飛び越えて長谷川方の玄關へ飛付き戸を開けて「警察の者だ、電話貸して下さい」と云ひつゝ泥足で座敷へ上り、電話しようとしたが、甲南小學校の電話番号は解らないので警察(七〇八〇)へ電話したら、確か署長殿の聲であつた様に思ふ。私は「反高林の土手が切れて別荘が危い。」とのみ言つて一應切つ

た。別所も何所かで働いて居るのであらう。其の時は頭に来なかつた。仲々體の動きが取れないので「もうこれで私も子供と共に到底助かりそうにない」と思つたので「此の子供は何と云ふ子か知りたい」と思つて、氣を失ひつゝある其の子供の頭を更に柱でこつんとして氣を付けて「お前は何かと云ふ名か」と尋ねたら「横井」と答へた。「あゝ横井かしつかりしとれ助けてやる」と氣を勵まして、更に何分かは十分か其所で戦つて居る時、上手の柱につかまつて居た子供が二人程私の左側を流れて行つた。皆が「其を助けてやつてくれ」と叫んで居るのであるが、私は右の手に横井の體を掴んで居る。左の手は柱を持つて居る。左右何れにしようかと思つたが、然し掴まへて居る子は之は絶対に離されない。其れに比べると掴へて居ない子供は之は仕方がない。他の子は助けられなくても此の掴まへて居る子供だけは絶対に助けようとして強く決心をしたのだつた。此の時分の私の悲壯な決心とても口では云へない。

さうかうする内にどつと來た水で横井が流されかけ「アッ」と思つたら二人共流された。「流されては講堂の中へ吸ひ込まれる」と思つたので、片手に横井を握つたまゝ何所をどうしてか兎に角うまく講堂の西側の第一ガラス戸に手が掛つたので、其所で横井の體をかゝへたまゝ講堂の中へ吸ひ込まれては大變」と其の第一ガラス戸を體で押し破つた。所が押し破る時は外の流れの方がゆるい位に考へたのか兎に角講堂の中へ

た。更に甲南小學校の電話番号を一一四で問ひ合はさうとしたがもう通じないので、其所を飛び下りたら、長谷川方の雇人等が裏門からの水の浸入を大きな材木で防いで居る。そして私に「どうしたらよろしいか」と尋ねた。私はよもや家が流れるとは思はなかつたので「どうもこうもない、兎に角しつかりと防禦しなさい。私は甲南小學校が危いと思ふからそちらへ行く。」と云ひ置いた儘其所にあつた梯子を提げて長谷川方の庭園を南へ横切り、その梯子で高塀を乗り越え、更に靜方の庭園に出で、そこから靜方南の道に出た所、早くもその道も膝を浸する程で、普通の道からは激流でとても行けない。折しも西の方より八百屋の別所徳治が來つゝある。これ幸ひと「オイ早く來てくれ」と呼び寄せ「學校があの通りだ、助けに行つてくれ。」と云へば「よろしゆござす。」と云つて共に南靜方の庭園に飛込んだところ、甲南小學校方面より頻りに「助けてくれい」との悲鳴が聞える。「よし今行つてやるしつかりしとれ」と云ひつゝ私はズボンと脱ぎつゝあつた時、學校の方より一人の男(雨降りコートを着て手に蝙蝠傘を持つた男が「舟を持つて來て助けねばとても助からない」と云ひつゝ西へ走つて行つた。私は「馬鹿な、こんな所に舟があるか」とは思つたが、口に出す餘裕も無い。別所と二人續いて學校の廊下の所へ膝を浸する激流の中を飛込んで行つた。見れば水深四、五尺の廊下の柱に皆抱付き一齊に悲鳴を擧げてゐる。私は飛込んだものの、餘りの場面にはつとして如何

吸ひ込まれたら大變とばかりに、ガラス戸を押破つたのであつたが、其が豫期に反して更に外から内側へ流れが急に這入つて來て二人を講堂へ巻込まうとする。私は一生懸命ガラスを打ち破つて手を掛ける所をこしらへようとしたが、次々に流されそうである行かない。更に次のガラス戸の所へ移つた所其のガラス戸は水の流れの爲に自然に外れた様に思ふ。「ハッ」とびつくりして次の大きい柱に取り付き其所で横井を廻轉窓に兩手を掛けさせ私が襟首を持ち私の左手は柱に抱き付きて烈しい流れの爲取られようとする體を支へて居た。之も随分長時間の様に思つた。その中に廊下で泣き叫んで居た子供等の聲がばつたりしなくなつたので「あゝ全部流されてしまつたか、可哀そうなことをした」と思つた。ふと講堂の中を見ると東南の隅の方で一人の婦人が着物を捲つて帶をしめなほして居る。

「あゝあれが男だつたら此所へ來て呉れるのに」と思つたが仕方がない。さうかうする内校長さんが來られたので「此所に一人子供が居るが流れが烈しいので、こちらへ來ない。何とか助けてやつてくれ」と云つたら校長さんはそこで大分色々あせられた。校長さんの居られる所は既に陸になつて居て水はない。然るに私の居る柱の所は仲々流れが烈しく校長と私の間は約六、七尺は尚もあまつて居る。「アッ」と思ふ間にそれ迄大事にかばつて居た横井が何だか烈しいものゝ爲(流れか材木)私の手から取られてしまつた。「アッ」と思つたがもうその邊に居ない。私もあせつたが既

して助けようかと遠方に暮れた。所が一人の先生(村田)が藤棚の下でブランコの鐵柱を示して「こちらへくれ」と云はれたので「よし」と其の方へ一人つづ順々に送つた勿論流れが激しいので、私の片手は柱にとりついて居るの仕事です。其の時思ひ出してもぞつとするのは一人の婦人が手は柱に抱き付いて居るが、體は流れに従つて居り顔は水にすれ／＼で小さい聲で「私はよろしい、子供を頼みます」と云つたので「よし二人共助けてやる、しつかりしとれ」と云つて子供も女も藤棚の下へ送る可く其の先生に渡したのでした。何人目かの子供を送らうとした時に既に水の流れば益々烈しく、其の子供は柱からこちらへ來ませんでした。其所で其の子供をこちらへ引張らうと随分あせりました。ところがどうしても來ないので、仕方なく二人共其の柱にくらい付き、更に水が増して來るので、段々と上へ上つて柱の上の横木に子供の手を掛けさせようとするが、既に子供は頭から水をあびて居て弱つて居つたのか元氣もないので、頭を柱にこつんとやつて「しつかりせい」と怒鳴つたら「ウン」と答へた様に思ふ。所で既に水も烈しく、身體の自由もきかないので、如何にも仕方がない。他の柱にとり付いて居る子供等は「助けて呉れ」と盛んに悲鳴を擧げて居る。助けたいが此の子供を手離すわけに行かない。残念だが子供と二人柱に取付いたまゝ水と戦つた。其の時間は相當長く一時間位ある様に思つた。勿論今から考へて見ると横の柱に村田先生や校長が居られるのであつ

に遅い、残念だが仕方がない。校長も「あつ取られた」と云ふ私の言を聞いて残念なことをしたと云ふ様な顔をしてどつかへ行つてしまはれた。その所で校長が何とか助けようと思つてあせつてくれた時間が五分か十分間にも及ばなかつたであらう。

私は其所でまだ横井を二十分や三十分引張つたまゝ堪えられる姿勢で居たのであつたのに「アッ」と云ふ間に取られてしまつたのは残念ではなかつたが、私の身に危険があつたのは横井を水に取られた場合でない廊下から講堂の中へ流された場合である。其の時にも私は絶対に死んでも離さないぞと云ふ覺悟で居た。勿論死ぬ覺悟であつた所が運よく未だ横井を離しては居なかつた。其處でガラスにつかまり更に柱につかまつて水と戦ひながら一時を凌いで居たのであるのに、思はぬ所で思はぬ激流が來たのか材木が來たのかとにかく無理にアッといひつたてゝしまつた。勿論村田先生や校長さんは私の初めの姿勢場所及び終りの姿勢、場所等を充分知つて居られる筈である。

それから私はやうやく流木につかまつて上つて流木の上ではつとした所が、ひよいと前(南の方)を見れば十二、三の女の子供が松の枝につかまつて「小父ちゃん助けて」と泣き叫んで居るので、私は「よし助けてやるしつかりしとれ」と元氣強く言葉を掛けて助けようとするが、その間約七、八尺手もとどかない。流れは烈しい如何にせんかとあせつたが、左手を延ばして掴まうとするがとてとどかない。手の自由もきか

ない、誰か来てくれないか、ふと西方を見れば青年團員が三人遙かに見えたので「オーイ早く来てくれくれ」と叫んだらやうやく来てくれかけた。「皆眞裸になつて来い服を着てはいけない」と怒鳴つた。所が三人共裸になつてくれたので「此所に女の子が一人居るのだから助けてやつてくれ」と云へば、三人が何とか助けようとしたが、何分激流で自由が利かない。更に一人がロープを腰にくくりつけて飛び込まうとしたが、流村が多く飛び込めない。さうかうする内その女の子が「アッ」と叫んだなり水の中へ沈んでしまつた。「しまつた」と私は叫んだがもう遅い、残念であつた。これが山中美賀子さんであつた標だ。所でその流村の上に居る事が後から／＼と流村が来て危険になつたので、皆屋根の上へ這ひ上つた。所が青年團員がどし／＼屋根の上へ上るが、私は左手がどうしても利かない。足もすべるとどうしても上れない、青年團員が上るのに私が上れない。私は残念であつたが下へも下りられない。暫く其所でじつとして居た。其の時流村の上に女の子を見付け「アレを助けてやつてくれ」とその三人の青年に叫んで、その三人を行かした。やうやく其の三人は一婦人を助けた。さうすると其の婦人は更に其處に居残つてゐて何か頻りにして居る。をかしいと思つて見てみると、更に其婦人は女の子を一人助けて来た。どうやら母子である様だと思つた。そしてその二人を三青年が大屋根へ連れて上り北側校舎の方へ送つた。私も講堂の西ひさしを

たつて北側の校舎へ行かうとしてふと講堂の中を見ると、先程迄講堂の中西側五、六尺の間はあれだけの激流であつたのに早やすつかり砂地になつて居るのに驚いた。しかして屋根つたひに行かうとするが、左手の自由が利かないので行けない。所が雨は益々激しい。屋根の上も滑る様だ。所が幸ひにも流村が相當引掛つてしつかりして来た様なので、屋根から下りて流村の上を傳ひ聲方の大桶の下に避難した。其時別所徳治は屋根から流村の上へ出て来て西の方へ歸つて行つた。暫くすると流村の上に一人の女が學校の窓から泥々になつて出て来たので、それをその桶の大木の上へ引張つて来て別の桶の大木の上に登らせて避難させて居た。私もその時その子供の方の桶に登つて避難した。雨は益々激しい。子供が大分心配するので「あの學校が倒れても此の桶は絶対に倒れる氣づかひはないから安心せよ。一日や二日腹がへつても我慢せい」と云つて元氣つけて居た。

その頃校舎二階の上から多勢の子供が「間島さん」と叫んで居たので、又大きい聲で此所に無事居ることを返事して居た。さうかうする中雨も止んで足許の水も引いたが、然し仲々其の大木を下りる氣にはなれなかつた。所が小便のおつさんが「もう大丈夫だから来なさい」と云つて来たが、ちよつと子供を連れて居るし疑つた譯がおつさんが来る位だからと思つてよやく間島を木から下し、女の人木から下し流村の上を傳はり、廊下の屋根を傳はり北側校舎二階へ避難した。そこに二三十人の女子供が居た。其所で間島等は裸になり體を拭き天幕を體に巻き付け私もシャツを捲つて着直す等約十分を経たぬ先に全部田中二郎方へ避難せよとの先生の命により順々に二階北側窓より下し三青年等と共に之れを避難させた。その時男が餘り居なかつたので私も田中二郎方の二階に暫く居た。所が次々男の先生が兒童の名前を調べに來られたりしたので、私も後を一任して居いて一應其所を出た。所が其の足で私は私の宅へ歸つた。歸途親善、反高の慘狀を知り今更の如く學校に於けるあの時の激流の故なるかなを知つた。田中方で泥シャツは脱いで、きれいなシャツはもらつて着てゐたが、申又は泥々であるので脱ぎかへたりして、上り戸口で飯を食つたりして時計を見ると三時であつた。

五人を呼び集め住友邸内に這入つて行つた。所が何處に死骸があるかわからないので附近に居た。某巡査に尋ねたらあそこにあると教へてくれたので行つて見ると、砂の中に背中だけ一尺位見えて居る。早速掘出して見たら、それは伊藤孝太郎氏であつた。更にその西の方中瀬方の庭先に阿部泰次君の死骸が出た。共に鄭重に掘出して遺族へお届けした。その日更にもう一箇死骸を掘出して身許不明なるより村役場に引渡した。終つたのが七時半頃であつた。私はそれから、その日の出来事を負傷して痛い足を引ずりながら、警察本署へ行つて詳細に報告した。署を出たのが午後七時それから森鼻外科に行つて負傷の手當を受けた。負傷は全身十數箇所の擦過傷並に右足指に踏切り及び此の時始めて左手甲より手の平への貫通創を知り學校での左手の無力であつた事の原因を知つた。歸宅したのは十時であつた。

後から色々別所徳治や先生に問ひ合はせて見ると廊下で柱に撞まつて居た子供の聲が無くなつたのは、その時別所と先生等が廊下の屋根を破つて助けたによつて聲が無くなつたのであつた事が判つた。これで私の一日の行動は終つたのではない。

午後十時頃夕食をなし終るや直ちに空區青年會場へ行つて、今晚及び引續き當分毎夜の夜警（災害地警戒）をなすべく威嚇した所が皆よく私の云ふ事を聞いて呉れた。私も勞れて居るが、併し私はショベルは持たない青年は今日一日ショベルを持つて死體發掘に働い

たつて北側の校舎へ行かうとしてふと講堂の中を見ると、先程迄講堂の中西側五、六尺の間はあれだけの激流であつたのに早やすつかり砂地になつて居るのに驚いた。しかして屋根つたひに行かうとするが、左手の自由が利かないので行けない。所が雨は益々激しい。屋根の上も滑る様だ。所が幸ひにも流村が相當引掛つてしつかりして来た様なので、屋根から下りて流村の上を傳ひ聲方の大桶の下に避難した。其時別所徳治は屋根から流村の上へ出て来て西の方へ歸つて行つた。暫くすると流村の上に一人の女が學校の窓から泥々になつて出て来たので、それをその桶の大木の上へ引張つて来て別の桶の大木の上に登らせて避難させて居た。私もその時その子供の方の桶に登つて避難した。雨は益々激しい。子供が大分心配するので「あの學校が倒れても此の桶は絶対に倒れる氣づかひはないから安心せよ。一日や二日腹がへつても我慢せい」と云つて元氣つけて居た。

その頃校舎二階の上から多勢の子供が「間島さん」と叫んで居たので、又大きい聲で此所に無事居ることを返事して居た。さうかうする中雨も止んで足許の水も引いたが、然し仲々其の大木を下りる氣にはなれなかつた。所が小便のおつさんが「もう大丈夫だから来なさい」と云つて来たが、ちよつと子供を連れて居るし疑つた譯がおつさんが来る位だからと思つてよやく間島を木から下し、女の人木から下し流村の上を傳はり、廊下の屋根を傳はり北側校舎二階へ避難した。そこに二三十人の女子供が居た。其所で間島等は裸になり體を拭き天幕を體に巻き付け私もシャツを捲つて着直す等約十分を経たぬ先に全部田中二郎方へ避難せよとの先生の命により順々に二階北側窓より下し三青年等と共に之れを避難させた。その時男が餘り居なかつたので私も田中二郎方の二階に暫く居た。所が次々男の先生が兒童の名前を調べに來られたりしたので、私も後を一任して居いて一應其所を出た。所が其の足で私は私の宅へ歸つた。歸途親善、反高の慘狀を知り今更の如く學校に於けるあの時の激流の故なるかなを知つた。田中方で泥シャツは脱いで、きれいなシャツはもらつて着てゐたが、申又は泥々であるので脱ぎかへたりして、上り戸口で飯を食つたりして時計を見ると三時であつた。

甲南高等女學校

住吉川の奔流に文字通りまともに投げ出され
た同校の遭難状況及び復舊作業に就て同校の
高内先生の御感想をいただきました——。

全く夢想さへすることの出来なかつた大水害であつた。前夜八時頃私用で住吉川堤を歩いた時其の水音にビクツとした、それは流れる石が川底に打ちつけられる音であつたが、こんな事になるとは誰が思はう。當日も八時十五分前住吉川國道をバスで何の不安もなく通りすぎたのである。だから其の水音が二丁も離れてゐる甲南高女に何の關係があらうとさへ考へなかつたそれが其の後一時間半か二時間の後には其の濁流の亂奔に私達の學校は拱手してゐなければならなくなつたのである、だから實に驚いた。随分あがつてゐた事と思ふ、其の自分の記憶をたどつて書く此の記憶は相當危かしいものと思ふ。

一、遭 難

重苦しい配が職員室をおほふ。生徒は歸宅させよう、そのために學校を中心として東西兩方面の調査に職員を向はしめることになったのは九時廿分頃であつたらう。生徒はどうしてゐるであらう。控室に行つて見た。國語の本を開いて分働で聲を揃へて朗讀し此の字は何と讀むのか其の意味はと平日と同じやうに訊いてゐる。卅分前に勉強してゐなさいといった自分は其の頃わけもない不安の氣持におそはれてゐたと見えて二十分許り教へ職員室へ戻つた様に記憶してゐる。學校西方へ調査に行つた多賀、小野兩先生より九時頃報告があつた、住吉驛からの電話だ。それによると川は激流だが國道は今直ぐなら通れるとのことだ。が「今少し歸宅させるのは見合はさう」との校長先生の命令だ、今にして思へばもしこの時そのまゝ歸宅させてゐたらと戦慄を禁じ得ない。さうしてこの報告の兩先生は電話後數分にして甲南小學校附近で、あの慘劇を惹起した最初の水勢と思はれる濁流に追つかれられ夕方まで歸校出来なかつたのであつた。雨は益々烈しくなつて來る學校西側に出て見ると溝は氾濫して路が川の様になつてゐる。此はいけないと氣のついた私は洋服をぬいで豪雨の中に飛んで出た、風致林に出た、もう浅い川だ。作法室に入つた。壘をあげておくためだ。今から思へば全く愚案すべき事だが池尻先生小使木本君と共に室内の高い所に壘をあげたのだ。二十數枚の壘をあげた頃は水は床を越えて來てゐたやうに思ふのであるが其の時は之で壘は助かるであらうと思つてゐたのだ。

だ。今土砂で一杯になつてゐる作法室を見る毎に馬鹿だつたな災害の大きさは自然の威力は小さな人間の豫想を許さないと云ふやうな事を實感するのである。作法室から歸つてくる時はもう水が腰まで來てゐた職員靴箱から靴をとりあげた、川本先生が人が通用門前の道路を流されて行つたと言ふ。誰からともなく小使さんの子供が二人流されたらしいと云ふ言葉が耳に入る大變だ。自分は「見に行け、助けに行け」と言つたが「とても行けません行つて見たんですよ」悲痛な顔だつた、小使の妻女は「早く行つて連れて來て呉れと頼んだんですが學校の勤務が大事だからと言ひますのでたう／＼……」と私は木本君の責任感の強さに深く感動すると共に其の後の言葉は聞きたくなかつた。その時東部方面に調査に行つてゐた金田先生が泥水をかぶつて歸校した。國道はとてまた魚崎は全滅であらう、住吉川の堤が決壊したのだと言ふ。そこへ倉庫内のラシャを取出しに行つてゐた池尻、戸倉、渡の三君が飛んで歸つて來た。聞けば倉庫裏にある朝鮮人の家に突入した濁流がドツと來たからとのことだ。この濁流のハケ口を通用門から道に出さうと門をあげようとした、やつと半分だけ開いて此の濁流は道路へ流れ出たがもうちつとしては居られなくなつた。風致林の方に飛び出し鐵道線路に立つて西北方を見た、これはいけないと思つた、引返して見ると通用門前の道路が高くなつてさつき開けた通用門から濁流が校内に突入して來てゐる。

閉めねばならぬと金田、戸倉先生と共に懸命にやつて見たが動かない。今はこの通用門及び風致林の方から流れ入る濁流は合して數尺の激流となり本館新館との渡廊下の腰板にぶつかりはね上り物凄い勢で運動場へ流れ出てゐる。本館校舎内へは見舞はれたくないと全職員懸命の努力もこの水には勝てない、遂に本館西側昇降口の戸を打破つて濁水が職員室前の廊下へ流入して來た。小川先生及び女先生が懸命に校舎内の排水をしたがどうにもならない、今は止むを得ない。一、二年は本館二階へ三、四、五年は新館二階へ避難命令だ。高橋、尾本兩先生は火を消し小川、上林先生等は各室のドアを開き應援學級の控室へ一應行く。突然悲鳴が起つた、ドタ／＼といふ足音と共にだ。青くなつた一人の生徒が西側前の家が四五軒くづれ流れたと言ふ。今まで表に出てゐなかつた生徒の不安は一時に發した。第二裁縫室へ行つて見る、窓から見ると丈餘と思はれる激流がはね上り松の太木が人家の柱が猛烈な勢で流れてゐる。生徒に見せてはならぬ、又この室は危い」と心密に併し眞剣にかう考へた私は第二裁縫室に居た生徒を圖書室一A控室に行く様に命じた。今にして思へば是も亦滑稽な認識なのだ。丈餘と思つた水は三四尺で五六尺の土砂が下にあつたのだ。さうして校舎ががしりと此の土砂で守られてゐたのだから雨は益々降りつゝの、何としても生徒の心の動搖は烈しい或は學校は大丈夫かと聞き或は自分の家はどうか聞き或は何故雨は止まぬかと聞く。早く安全な所

に生徒を避難せしめようと二三の先生と學校周圍を調べたがどの方向も駄目だ、濁流にとりかこまれてしまつてゐるのだ。今は雨の止むのを念ずるのみ。雨は何故止まないのかの嘆聲さへ聞えて來る、當時各父兄宅より我子學校の安否を尋ねる電話頻り。女事務員野田さんは腰までの水中で大丈夫であることを答へてゐる。だが本館二階から鐵道を見ると校舎裏へとまつてゐた神戸行急行列車は傾いてゐる、線路の土堤を濁流がくづし始めたからだ、これが崩れたら大變だと池尻、戸倉兩先生及二人の避難者と話し今の中にどこか安全な所へ避難すべきだと再び考へたが最も可能性のある東北方の濁流を渡つて本校に避難せんとしてゐる男の人が水の激しさに中止してゐるのだ。學校正門前の山口文具店稲垣氏方等は二階に避難してゐるが今一二尺の水増さんか二階の人々を濁流に流し去るであらうと思はれる。

一二年生の一部の生徒の不安は愈々強くなつて來たらしい、無理もない事だ。殊に自分の家、母、弟妹の安否を氣遣ふのかいつになつたら歸れるかと聞くもとより答への仕様がな、學校に居れば一番安全である事を強調するのみだ。併しいつになつたら歸宅させることが出来るだらう。今日中には歸し得まい。學校が安全であるとしても食事はどうする便所はどうすると思つた。バケツを利用しシン台で盥んだ急設の便所が女の先生によつて作られたが、食事は？今日は會食日で學校で作ることになつてゐるので辨當は持參してゐないのだ。第二裁縫室から國道離中前附近を見ると傘

をさした人があるいてゐる、水は流れてゐないのだ。あゝあの國道まで直線距離にして百米の國道まで行けば助かるのだ、食事の心配も出來るだらうと思ふものゝ學校は寸餘の激流にかこまれてゐるのだ。

これ以上降りつゞけば學校は危い、氾濫の本はどうなつてゐるのか之以上激流は増すのか之が私達の最も知りたい所であつたのだが既に電話は學校からはかゝらない、ロープを持つて來ても致し方がない、決死的に出た所で流されることは間違ひない、何とか連絡の法がないかと思つてゐる中に雨が小止みになつて來た、さうして學校の附近に調査の姿が見えた、あつたの巡查に聞いて見よう、學校前の煙草屋の並びの家に居る人を連絡して聞いて貰はう、此の連絡がとれたら場合によつては舟を以つて生徒を救つて貰はう、軍隊の出動を願はうと言ふ聲さへ耳に入る。私達は大聲で煙草屋附近の人に向つて「水はふへるかどうか巡查に聞いてくれ」と叫んだが、コウ／＼たる水音だ、指で空中に假名を書く、遂に黒板を利用して連絡がとれた、水は之れ以上ふえないとの事だ、嬉しかつた。早速校長先生、生徒に知らせた、或る生徒は私にだきつくやうにして涙をためてゐた。早速新館に向ひ知らせたのだ木村、安井兩先生數名の生徒に指で知らせた。非常な安心ぶりであつた。後で聞いたのだが新館は大分水勢で動いたらしい、講堂が其の位置になかつたら駄目であつたらう。

此の時だ、此のチャンスを利用して兎に角全生徒を

安全地帯に運ばねばならぬと金田先生と共に方々走り廻る、金田先生がロープがあればと探す、今後ロープはしつかりしたものも多く保存し置くべきだ、結局屋根から屋根へ風致林に出て鐵道下の浅い激流を渡り列車内を通つて國道住吉川に出た、住吉川は水がないうださうして何百貫何千貫と思はれる巨石が雜然と住吉川を占領し河畔の家の中にまでめいりこんで四五軒あつた管の家のないのだ、僅かに半壊の煙草屋が残つてゐるのみだ。だが學校前の濁流を見た私はこの言語に絶する慘狀が何の感動も感慨もなく見られこゝに全生徒を運び得たらと思ふばかりだつた。

林病院の附近に出て小使に逢つた、丁度この病院に流されたと思つてゐた子供が二人とも微傷さへ負はずに收容されてゐたのだつた。其の一人を私が背負ひ歸校したが未だ急流である。金田先生に手を引いて貰つてやつと歸れた位だから果して女の生徒を安全にうつし得るか疑問だ、子供が助つてゐたと小使の妻女に知らせるため走つて行つた、生徒等の顔にも喜色が輝く、かけつけて來た妻女はあつと子供を抱きとつた、甲南小學校出身の生徒が詰問するやうに、母校の安否を尋ねた、私は大丈夫だと答へた、あの石を見て來ながら甲南小學校の慘劇を想像しようとしなかつた自分の愚かさには今ではあきれかへつてゐるのだ、十日間死骸を探し得なかつた甲南小學校生徒、横井君の姉は女學校の一年生だ、大丈夫だと答へた私の言葉を多分不安がらしめない爲の囁言であつたと善意に解釋してくれてゐると思ふ。がさうではなかつたのだ。午後一

時半頃待望の青空が見えて来た。一同ほつとする。だが學校周囲の水勢は却々烈しい、いつまでも籠城してゐなければならぬか分らない、之は飯が必要だと再び感じた時には清鋒が持出されてゐた。後で聞いた事であるが當日は全校生徒の會食日であつたので會食係の鈴木先生と渡君とが九時頃から炊き始めたのだつた、安井、尾本、阿部先生が應援に行つた、清鋒を切り二釜位炊けあげた頃室の箆板の上まで水が入つて来た、だが室内に居る五人は大した事にならうとは気がつかない、外部から吉本先生が避難せよと注告した、で尾本、阿部先生は清鋒を持つて職員室に歸つた、だが鈴木、安井、渡の三人は何とか飯を運ぼうとしてゐる。

水勢を見てゐない三人はどうしても飯をと努力してゐるが其後數分を出でずしてドツと押寄せた濁流は其の室のドアを破つて突入して来た。さすがの三人も次室の割烹室に逃げたがこの室も亦水が占領、次室の西洋作法室に逃げた、併し未だ飯を持つて居たのだつた、だがこゝも亦濁流の占領だ、辛うじて窓をあけ渡廊下の屋根傳ひに新館に避難したのだつた、鈴木先生の話によると元氣な渡さんが居てくれなかつたら私達女二人は逃げられなかつたであらうとの事だつた。餘りがんばるのも考へものだ。

兎に角清鋒と飯櫃半分位の握り飯だけでは足りないパンを買ひに行くことになる、池尻、戸倉、渡の三君と共に御影方面へ行く、國道往吉川まで来ると半壊の煙草屋を見た渡君がこれでは妹達流されたにちがひ

ないと言ふ、私はハツとした。さうして始めて學校以上の激流が襲つた事に気がついた。

開けば其の煙草屋の隣にゐたのださうだ、家は勿論跡方もない、併し話す渡君の顔色は變つてゐない。池尻先生は自宅に歸る先生の話によると流されてゐない我が家を見、一安心してパンを求めに走りやつと求め得た六圓分のパンとビスケットを持つて濁流を渡つて歸校し生徒に分配したが足らない生徒は一片のパンを互ひに分けあつて喰べたさうだ、我々三人はパンを尋ねて到頭御影のますやと云ふパン屋まで来た歸校して見ると生徒の保護者から迎へる者が續々と來校してゐた。校長先生始め全職員が一人／＼責任者を訊問して生徒を渡す、友が歸れば歸宅したくなるのは無理もないが減多に責任者なき生徒の歸宅は許せない。

だが次第に時刻は過ぎて行く、最後に残つた生徒は五十名となつた、全部西宮方面だ。迎へる人は來ない。我が家へと急ぐ心を制しかねてゐる、戸倉、川本兩先生と共に送らうとしたが國道田中附近の濁流にハタと足はとめられた、が幸にして木山村消防組の特別な好意によつて此の生徒達は消防自動車二回に分乗させて貰ひ渡ることが出来た。さて歩かねばならぬ。甲子園のものも多いが歩かう、危かつた生命が助かつたのだと元氣よく歩いた。無事に送り得た、だが裸足で歩いたため歸途は足裏が痛かつた、こんな時は地下足袋が必要だ。そして最も都合がいい。

かくて未曾有の水難も職員生徒一同無事に避難し得

たのだつた、顧みて我々は職員生徒に一名の負傷さへなかつたことを何より嬉しく思ふのである。

翌朝登校して驚いた、校内を往吉川が昨日と同様に流れてゐるのだ。本館と新館はどうしても助けようと校長先生が云はれる、全職員は折柄來合せてゐた十數名の生徒と共に防水に努めた此の防水作業は其の後七月九日まで續きその間水の方向は我々の豫測を破つて毎日惱ました、全く水に跳弄され續けた四日間だつた、が又意義ある四日間であつた、水は殆ど防ぎ得た、防水に盡の有効なることも知つた。木葉の上に土砂を置いて防水する方法も知つた、水流の方向を變更させるにも幾分の自信が出来たのだつた。勿論人夫の手で校地の風致林附近から土糞場でも作つて行けば校内を流れないことは分つてゐたのであるが學校は附近の人家への影響を慮つたのであつた。

さて落着いて校内堆積の土砂を見れば實に夥しい水の力はこんなにもあるものかと、晒然たらざるを得なかつた。作法室、家事室は軒まで土砂で一杯である他の室も數尺の土砂に見舞はれてゐる、實に校内堆積の土砂は千六百立方坪、之を講堂におさめるとすれば講堂が四つ必要なのださうだ、音楽室、講堂のピアノ七臺は全く土砂に圍まれてしまひ、其の一臺の如きは何處に行つたのか分らない、土砂の下に埋つてしまつてゐたのだ。唯幸なことは新館の階下の備品は木村、吉本、安井先生等の努力によつて殆ど助かつた。

教師にはかうした天災についての相當深い知識が必要であることを痛感した。我々の知識が深かつたならば今少し災害と不安とを少くし得たであらう、私は今後對天災についての知識を深めねばならない。

二、復 舊

永久に忘れ得ない七月五日から四日經つて新館と本館の内部だけは濁流の浸入から逃れ得るやうになつた。

さあ、復舊だ、試みに我々職員の手で職員室内の泥土を取除いて見た、とてもだと思つた泥土が案外に早く片づく、期せずして職員の意氣があがる、泥まみれになつた女先生の働きがすばらしかつた、應援にと來て下さつた阿部先生の弟さんが友人と共に青年の力を見せてくれた、充分やれる力一杯やらう、我々の學校だ、我々の手でやらう、語らずしてこの氣魄が全職員

の眉宇から感ぜられた。

七月十日、生徒登校、用心が悪いため新館に遺留してあつた生徒の學用品を本館に移動せしめた、さうして徒歩通學可能な生徒（大體背屋川以西、石屋川以東在住の生徒）にして災害を蒙らなかつた家庭の者は復舊作業に参加することを傳達す、参加出来ぬ生徒に何だか謝らねばならぬやうな雰囲気だつた、當時阪神間の交通機關は國道バスと阪神電車のみで而も満員到底乗られない状態であつた。一般交通の妨害と生徒の危険を慮んばかられた校長先生の御意志を二回も三回も傳へねばならなかつた。併し一般復舊作業の妨害にならざるやう災害地見物禁止は嚴然とくりかへした、参

加可能生徒數百二十名作業具數と生徒の保健を考へA組は午前中、B組は午後作業を行ふことをも發表した。愈々明日からだと思望に燃き乍らさよならと挨拶する若き魂の濃潤さが微笑ましく好ましかつた。生徒歸校後我々は前日の残りの職員室泥土を搬出した、泥土のなくなつた職員室の床板を見れば作業の勞も忘れられた。

翌十一日、天氣晴れだ、張り切つた生徒達は懸命に泥土一杯のバケツを運んでくれる「ヨイショ」との氣合が分擔した各室から聞えて来る。平素掃除をしてゐる時の生徒とは全く別人のやうだ。甲南高等學校から數名の生徒さんが應援に來てくれた、非常な意氣込みが七月十六日まで六日間午前と午後にくりかへされたさうして校長室、職員室、事務室、應援室、衛生室、宿直室、會議室、二B控室、廊下等本館の泥土は全部搬出した。各室の整頓も出来た泥土に埋まつてゐた音楽室のピアノも搬出した。

新館階下の圖書室、博物標本室の土砂及び同室内の圖書備品を清掃二階に運び得た。机、椅子等の清掃もした。勞働する者の悦びを深く味ひ得た六日間であつた鈴木先生、小使妻女炊出しの味噌汁のうまさ格別だつた。

一日の休養後七月十八日次の様なことが決定す。

一、省線開通によつて從來より交通も便利なる故作業参加生徒を全校生徒とす。

二、職員生徒の作業範圍は校舎内及び危険を伴はざる校舎外の土砂搬出、室内器具の清掃整理、資源愛護

の目的を以つて可能な限り物品を搬出清掃すること等

三、作業は二十日より開始し、午前八時より午前十一時までとし全校生徒を通學聯盟に依り神戸、芦屋、西宮三分園と御影、住吉、本山、魚崎、本庄の分園との二作業分園に分ち一日交代とす。

四、作業服としての體操服又は代用品及び水筒手袋を必ず持參する。

五、作業班を左の如く決定す。

- イ、主任
- ロ、計畫班
- ハ、生徒指示班
- ニ、作業具班
- ホ、修理班
- ヘ、整理班
- ト、時報班
- チ、衛生班
- リ、記録班

直ちに各生徒に必要な事項が通信せられる。

七月廿日も好天氣であつたと思ふ豫定した作業が着々と進行して行く、實驗室、理科準備室、合併室、音楽堂の土砂が無くなつて行く。さうして清掃されて行つた。

七月廿二日 西宮高女校長山鳥先生が御來校心からなる作業援助を申込まれ、有難く御受けすることゝなる。翌廿三日同校今西先生、來校種々打合せをなす、

廿四日から廿八日まで雨天廿七日を除いて四日間毎日
数名の先生方と百人許りの生徒さんが懸命に努力して
下さった家事室前の土砂が取除かれる、風致林の大樹
七本の下を一間ばかり埋めてこの儘にしておけば我々
の學校を助けたとも言ふべきこの大樹の生命をとるで
あらうと思はれる土砂を我々と共に取除いて下さつ
た。ありがたかつた、生徒たちはどんなに感謝したこ
とであらう、競技會をして學校相互の親睦を圖つてゐ
ると思つてゐたのが滑稽だ。

七月廿八日明日より向ふ二週間作業を休止すること
となつた、それはこれからの仕事は室内室外共に我々
の手では出来ない仕事ばかりであり、生徒の保健を考
へたからだ、さうして又二週間内に我々がやつて来た
各建物建具が大工によりペンキ屋によつて水害前の状
態になるであらう、水が出るやうになるであらう、さ
うすれば再び登校清掃整理に努めようと思つたからだ
固より此の豫定には八月二日の第二回水害はいつ
て居ない。我々の學校は校長先生の御意見によつて附
近の流れが止むと逸早く大林組入夫の手によつて堅固
な土壁がはりめぐらされてゐたが水勢は之を越えて
この土壁陣も危険に瀕したのだつた。

當夜大林組作業主任佐藤氏（本校舊職員藤田みさは
先生の夫君）の決死的な命令で漸く喰止め得られたと
の宿直木村先生の話だ、それにしても附近の人家はお
氣の毒だつた、又前よりやられました本の木阿彌です」
と笑つて話してゐたが其の笑には力がなかつた、校長

先生のお宅にゆく、一ヶ月の復舊も何もあつたもので
はない。却つてひどくなつたやうに感じた。學校には
土壁を作ることを考へられたのであるのに御自分の家
はと思つた、感じさせられるものがあつた。

再度の水害と種々の事情は七月廿八日の豫定をすつ
かりくつかへして十三日になつても我々は作業を始め
られさうもない、上林、尾本先生等が頻りに早く作業
を開始せよと言ふ、が、かんじんの水が出ないのだ、
川瀬先生がせきたてるやうに言はれても井戸屋は忙し
いらしい、やつと水が出だした。

八月十六日職員のみで再び作業を始めた。廿七日か
ら生徒も登校して来た、誰も前回の経験で慣れたもの
だ、正門附近の土を何と言つていゝか美しく整理する

水害にさらされた附近諸學校生徒諸君の感想文

今回の大水害はその範圍の廣汎とその被害の
甚大であつたことに於て今尙假神間及び神戸
市に居住する人々の腦裡に深く植付けられ、
その日の状況があり／＼と目に浮んでくるの
であります、その大なる惨状が果して純眞
な生徒達の心に如何様にうつつたことであり
ませうか。（順序不同）

あの水を思ふ

神戸女學院高等女學部四年 池尻高子
カチャ／＼と神聖な人の心を脅す硝子の割れ

つた。

のんきさうに見物に歩いてゐる人を見た時はむつと
した。親切にお見舞に來て下さる人毎に「大變な事に
なりましたね。」とおつしやると、始めてほんとに大
變な事なのだ。こんなになつてゐない家もあるのだと
いふ事に氣が付いた時だけは、何故私達はこんな目に
あつたのかと思つた。

あんなに一度は死も恐れず不思議な沈着さを持つて
ゐたのが、今どうやら助かつたのを見た時、昔から人
は憂世といふこの世に對して、急に憂著を覺えた。
水の後、幾日も復興のショベルが振はれ、又偏へに
有難い奉仕團のお蔭で着々と復興され、今は建具もは
め、畳も敷き大體の事は出来て、階下での生活も出来
るやうになつた。

けれどもなんといふ恐ろしい水であつたのだらう。
人が何日も一杯つショベルを土に入れてはボイとの
ける事をしてやつと土砂除けの出来た事を、自然の力
は人間をアツとも云はせず一時に障子の棧と棧のあの
狭い間までも、びつちりと土をつめ込んだではないか
どんな美しいもの、大事なものがあつても容赦なく
流してしまつたではないか。屈強な男が幾人もかゝつ
てほんの僅かしか動かぬ大きな岩石をも、お前は山か
らどこまで流して來たのか。

偉大な自然力は人々をして驚歎せしめると共に、反
省を促した。
もう今では舊の有様と變らぬ位になつて來たので、

仕事も職員の手でやれた、土方が冗談に先生廢めて土
方したらどうですといふ。本館は階下階上共に美しく
なつた。

廿八日、新館の大工の仕事も終つた、愈々明日から
新館の完全な清掃も出来よう、其のうちには音楽室、
講堂の大工仕事も終らう、どうやら第二學期授業も豫
定通り九月六日から始められさうだ、いや何としても
やらねばならぬ、我々は其の作業目標を六日より第二
學期授業開始に置いて來たのだから

作業には悦びもあるが身體は苦しい、が火野葦平氏
の「夢と兵隊」を讀めば何でもない、皇軍の苦痛を偲
びつゝ懸命にやらう。

昭和二三・八・二九

る音、サーツと侵入して來る水の音、何か大きな物が
倒れる音、今に二階まで水が來ればもう駄目だ。私は
死ぬ覺悟で、自分の手元に残つた今は唯一の持物の其
の日の勉強道具をまとめたなりなどした。もう私は水に
巻き込まれてしまつてもかまはない。何もかもお終ひ
だといふ觀念が強く／＼植まつてゐた。神様を
拜んでは幾度階段の下を見下した事か。一段々々と水
が通り過ぎると、粘土のやうなもので埋められて行く
よくも自分は氣が狂はなかつたものだ。それも階段の

水害について

本山第二尋常小學校五年 福家 裕

「大變だ大分水がいつて來た。」

と言ふお父さんの聲にふと僕は目をさました。床の中
からねまきのまゝ、臺所へ來て見ると泥水が大部分は
つて來てゐる。外を見ると〇〇トンネルの前の川がは
らんして、東側の十二間道路や島は皆水びたしとな
つてゐる。外ではさわがしい人聲や雨の澤山降りしき
る音ばかりしか聞えて來ない。御飯をちよつと食べて
弟と學校に行つたが、學校の附近は何となつてゐな
い。

教室で自習してゐたが、雨は一そうひどくなり風も
加はつて運動場もびしゃ／＼になつて來た頃、突然ど
／＼と水が押寄せ運動場も道も見るまに水で一ぱいにな
つた。すぐに先生の號令でらう下に整列して講堂に
上つた。聞けばこれは住吉川の土手で切れたとの事だ。
何時も生とで一ぱいな講堂も今日は少く、皆の顔も不
安さうな顔で元氣がない。

僕はは一階の先生の大事な書物や其の他の大事なも
のを上へ上へと持上げた。ひ雛氏も黙々とふえて來た

汽車も不通になり水は其の上から越して行き、鐵道から下の家々は皆つかつてしまつてゐる。僕は恐ろしくなつて來た。もう學校の下は土砂で一ぱいだ。稲葉君の家も流されてしまつたさうだ。まだ／＼水害でひどいめにあつて居る家が澤山あるとの事だ。午後からやうやく雨も少しはやみ水も多少引いたが土砂で家も道も一ぱいだ。

ほんたうに朝頃まで何ともなかつたのにと思つた。ゆめの様な氣持がする。其の日は家の方から迎へに來ず其の晩は學校の講堂で皆と一しよにねたが仲々眠れず、僕の家はどうなつてゐるだらう。お父さんお母さんは大丈夫かなとが／＼と流れる水の音に僕は心配でたまらない。うと／＼しながら不安な一夜を明した。其の翌朝家から父と母が學校に來たのでほつとした。家は土砂で一ぱいだから學校に居るやうにと言ふことだつた。やつぱり僕の家もだめだつたのか、朝晝晩とにぎりめしとおかうこでおなかをこしらへたおなかの空いてゐる僕はとてもおいしかつた。

三日三晩學校でお世話になつて、家から迎へに來たので先生にお別れを言つて家に歸つた。見ると家の中は僕がさう／＼してゐるより以上にひどい有様なので大驚きばかりだ。どこもかしこも土砂で一ぱいだ。壁はこれこれ柱はがみ座敷の中は川の様に水は流れてゐる。近所の家も皆同じだ。道も大分水につかつてゐる。僕はすぐに學用品はどうなつたかと心配してゐたが、幸ひ入用な物は皆二階へ上げてあるとの事で安心

てゐる。到底手がつけられぬ。で、泥濘の乾燥する迄待つ事にする。

深田池が決潰しなくてよかつた。斯んな僅かの被害で濟んで良かつた。で、其の夜は一家揃つて神様に深く感謝した。そして其の夕、紙上に載せられた悲惨な被害を見て衷心哀悼の念を捧げた。

恐しい水害

神戸市川中尋常小學校六年 木下妙子

七月五日、神戸市内に恐ろしい水害が起つた。人家をうばひ、人命をうばつて、様々の悲しみを與へて、私達が一生忘れることの出来ない出来事となつたのである。

翌日學校から歸つて、水害を見に行くため母と家を出た。新聞地のトンネルの下へ來た時、私は始めてこの水害がどんなにひどかつたかといふ事を知つたのである。ここから楠町六丁目へかけての濁流は、三本の綱につかまつても、なほ足をはらはれてゐる人を見ると、ここの渡河がどんなに困難であるかといふ事を考へられたのである。

私達はひきかへして違つた道を行つたが、又元町五丁目へ行くと、こしをかくしてしまふ泥水にぶつたつた。上の方からは、／＼と流れる濁流に人の頭の何倍もあらうと思はれる石ころが、いくつも／＼流れ

した。しかし一年からの成績や大事にしてあつた色々な本は水びたしだ。すつかりだめになつた。家の者や知つてゐる人達が手傳ひに來て一生懸命に働いてゐるいつになつたら一面見渡す限り土砂につかつた所がもと／＼通りになるだらうか、學校も一日も早く復興して勉強したいものだ。

僕達も此の大水害にあつても何時までも恐ろしがつてゐるに一生懸命に勉強しなければならぬといふ其の時つく／＼感じた。

水害回顧

灘中學校四年 鷺見 敏郎

前夜來の豪雨が、未だ甚く雨脚に叩きつけてゐる。五時頃だつた。キャーッといふ悲鳴が、豪雨を繞つて聞えて來た。思はず窓越しにその山手の家を見ると、寢巻姿で、跣足の家人が、雨煙りの彼方に右往左往してゐる。二丈許りもある裏手の石崖が、すつかり崩れ落ちて、家が壓潰されたとの事。幸ひ餘我人は無かつたらしい。

「此の分ちや、各地に随分被害があるぞ。」かう父と話してゐた途端、異様な物音と共に、祖母が離座敷から轉ぶ様に下りて來た。「水が出たよ、水が……。」僕は路に面した離座敷の窓へ飛んで行つた。「あゝ、之は……。」不斷は人車の往來激しい此の路上を黄土色に染まつた泥水がぬた／＼つてゐるではないか。

てくる。

更に上の方へ上つて行くと、どろ／＼になつたシャッを着た人、背中におばあさんを負ふた人、渡れずに泥水をにらみつけるやうに見てゐる人々もあつた。

その次の日山手方面を見に行きましたが、山の方へのぼつて行きますと、家の屋根だけ見えてゐて、下の方は全部泥砂に埋まつてゐるのを度々見かけられます。二階から出入してゐるお家もずいぶんありました。又家がうづまつて分らず「この邊だがある」といつて立つてゐる人もあれば、又一生懸命に土をほり出してゐる人や、女の人がもう使へなくなつた道具を出して、前におき、ぼう然として立つてゐるものも見かけられました。

かうした中に、水源池の故障のために、飲料水の無いことが、市民の困難の一つになつてきたのです。水の出た苦しみに共に、水のない悲しさを、まのあたりに見て、私達は、水の大切なことを、今さらながらに強くかんじさせられた。泥でうづまつた街からは今や勇ましく建設の音が力強くひびき渡つてゐます。

おそろしかつた水害

神戸山手高等女學校三〇 川端美恵子

突然「ゴーツ。」といふ大きな音がした。はつとふり向くひまもなく、渦を巻いた泥水がどつと壁の上に押しよせて來た。

飛沫を上げて、東から西へと、何物をも吞みずんば巴まうといふ勢でぶつつかつて行く。下駄が流れて來た空瓶が流れて來た。まるで船にでも酔つた様に泥水を見下してゐる僕は、やがて我に返つた。

「あゝ、今日は試験だ。どうしよう。」玄關の錠を外したが最後忽ち水が浸入する。裏口へ廻つて見た。裏口は路面から三尺許りも低いので、もう觀念してゐたが、果して土間は泥池になつてゐる。全く呆れざるを得ない。自轉車迄が此の泥水の中へ横倒れに寝てしまつた。しかも、あくなき水魔はどうかして、固く閉ざされた戸の隙間から、郵便函から侵入しよう／＼とその隙をちら／＼躍らせてゐる。深田池が潰れたんちやないか。若しさうだつたら、此の邊の家はすつかり押流されてしまふ。僕は心残りながらも學校へと急いだ。

幸な事には、深田池が決潰しなかつたので、家は大丈夫だつたが、床下と庭上とを一面に埋めた泥。友人Yの家は、少し山手だから、比較的重い砂が浸入しただけだが、僕の家と來たら、丁度流れの真下に當るので、目の細かい泥土が濾された様な工合になつて、到る所泥許り溜つてゐる。早速泥の掻出しにかかる。表面は既に固まつた様に見えるが、中々どうして、一旦足を踏入れると、一尺位もはまり込んで、其の足が中々抜けぬ。シャベルも、突込んだが最後、持ちも上げもならぬ。やつと持上げたかと思ふと、今度は泥塊が落ちない。それに足許で蚯蚓や蛙が無數にぬた／＼

「キャタタスケテ。」と大聲をあげながら友と私は、大あわてにあわて、二階の方に行き始めた。が、泥水は刻一刻と水量を増し、みる／＼中にひざまですつかりつかつてしまつた。

ふと前を見ると、友はまだミシンを両手に持ちながら、ザ／＼走つてゐる。「まあ、あんな重いミシンを持つて……。」と驚いたが無理もない。

やつとの事で二階へ上つてみた。二階は皆がそのまゝとび上つたらしく、新しい畳やふすまなどは、どろ／＼に足形、手形が付いてゐる。

友のお母さんは、眞青な顔をせられて、今にも倒れんばかりの様子、傍で見てゐるものも氣の毒な位であつた。それを見てゐて私は、はつと思ひ出した。私の家は、今頃どうなつてゐるだらう。こゝの家より大分低い所にあるのだから、もう壁の上四五尺位は充分つかつてゐるだらう。それに、家には父母と、足手まといになる末の妹三人だけ、きつと母も、友のお母さんのやうに、手のつけやうもなく眞青な顔をして、おろ／＼してゐるだらう。と思ふとゐても立つてもゐられなくなつて來た。しかしもうどうする事も出來ないのだ。外へ出ても私の首まで位は、すつかりつかつてしまふ程ある。なぜ友の家へ寄らずに歸らなかつたのか後悔してゐた所で、今更歸る事も出來ぬ。

あまり雨の降り方がはげしかつたので小降りになるまで休んでいらつしやいとおつしやつたからだ。幾度

も「私も帰りますわ」と言ったが、もうその時は地上から八寸位まで、つかつてゐたので仕方ない小降りになれば、引くだらうと思つて春風に二階で見物させて貰つてゐたのだ。のび上つて宇治川筋をのぞいて見て、びつくりした。あの山土の赤茶けた泥水が丁度一階の屋根までおし寄せて、せり合ひ渦を巻きながら狂つてゐる。

隣りの細い路地では、色々の物がどん／＼流れて来る。火鉢が流れて来る。靴・下駄等が流れる。徳利も流れ、果ては大きな鍋・釜までもくる／＼舞ひながら四つ角で突き當つて又下の方へ流れて行く。

友と女中さんと私は、それを面白さうに見てゐたのだ。まさか壘の上まで上つて来るとは夢にも思つてゐなかつたから。

その頃になつてやつと雨は小降りになつた。でも一向に泥水は引くやうな氣配を見せぬ。いやそれよりもずん／＼ふえて来るやうな氣もする、やう／＼不安になつて「どうしよう。歸られるかしら」を幾度もつぶやいた。

下へおりて来て見ると丁度床下一杯にまで、つかつてゐる。もうあとわづか一寸。

萬一壘の上に来ては——と用心されて、私も手傳ひ澤山の書物や椅子などを、一段高い奥の間に運んだ。番頭さんも一生懸命だ。一人手傳ひに来た方が戸棚の下から、手ミシンを二三臺出された。可哀想に皆水びたしになつてゐた。それを友が風呂場できれいに洗つ

てゐた時に突如、泥水が押し寄せて来たのだ。今思ひ出して、もつとすると。どき／＼する胸をおさへ、友と二人で静座して祈願をこめた、その時には、もう雨はやんでゐた。しばらくたつて、階段から下をのぞくとうれしや泥水は減つてゐる。足首より二寸位上までにそつと下へおりて一歩壘の上に足をふみ出した時「ツルツ」と滑つた。幸ひ柱につかまつてゐたのでよかつたが、それ程ツル／＼に泥が三寸以上たまつてゐる。せつ／＼一生懸命に奥へ運んだ書物なども、もうどろ／＼になつて、板切やら本やらさつぱり見分けがつかない位だ。少し段を下りて廊下に来たが、壘の上よりよく滑る。用心に用心を重ねて、ふつと左をむいた時、まあ！その家の惨状はどんなであつたらう。今でもまざ／＼と、その有様が臉に浮ぶ。言葉ではとてもいひあらはす事が出来ない程である。壘は大波小波の様になり、ふすまは破れてたふれ、ガラス戸はメチャ／＼に、われて、トンボ返りをやつてゐる。中の間が見た所、一番ひどい様だ。みせは泥でつみ重なつて床下から私の頭まで位の高さ、一ヶ所泥水がたまつてつと出て来た大きなねずみが／＼と泳ぎ出した。「アッ大きなねずみ！」とびつくりして見てゐると急に誰かに泥水をかけられたので、ねずみは、あわてゝもと来た方へ逃げて行つた。ふと何時であらうと思つて時計を見ると、ガラスがわれて短針がない。アラ何時わたのだらう。物を運ぶ時かしら？又柱に抱きついた時かしら？考へたつて、わかる筈がない。

みなさい。」とおつしやつた。こんな時に限つてよけに行かなくなる。

「私は學校へ行く。」と言ひはる。

「母は行つたらいかん。」とおつしやる。

今更雨が／＼なつた。

時計は八時を打つた。そこへ消防の人が來られて

「女學生のやうな子が川にはまつて流されて行つた

すぐ助けやうと思つたがもう間にはなかつた。かは

いさうな事をした。」と話して居られた。母はそれ御

覽といふやうな顔付で

「みてごらん、もし學校へ行く途中でけがでもして

一日休めばよい所を四日も五日も休まなければなら

いやになる。それどころか親が心配するではありま

せんか、それでもよかつたら行きなさい。」と叱るや

うにおつしやつた。

やつと學校行きを思ひ止つた私は急に水が恐ろしく

なつてきた。そして昨日隣の人が

「今晚降り續いたら住吉川はもう駄目だ。」とおつ

しやつた言葉を思ひ出した。あゝ住吉川が切れねばよ

いが、住吉川が氣にかゝる。私は母と一緒に住吉川を

見に行つた。

その時はもう水が橋の上をこえて流れてゐた。消防

青年團の人々は一生懸命に土俵を積んで居られる。土

俵を一段積んで二段を積みかけた時、水はもう土俵の

上へ押しよせてゐた。その時「土手が切れた」といふ叫び聲が誰からか聞

少し行つて、半分開けかゝつたドアを押してみたがびくともせぬ。無理にぎゅつと押すと、メリツと音がしたので驚いて手を離した。

雨傘を置いてゐた筈の所は泥とごみと板切ばかりでそれらしいものゝ影は見えぬ。靴は、と頭をつゝ込んでぐるつと見廻したが、やつぱりこれも雲隠れだ。この泥さへ取り除けば、きつと出て来るに違ひないと思つてあきらめた。だが何ヶ月振りに傘と靴とに顔を合すことが出来るかしらと、一寸淋しい氣持になつた

もう向ふへは行かれないので、あきらめて、もとの方に歸り始めたが注意してゐなかつた爲であらうか、壘のへりに打ち込んでゐる「簀」とか言ふもので足の裏をやられた。「イタイ」と思つて見たけれど、泥だらけで少しも見えない。かゞと歩いて又二階へ上つたそこで大きな、おにぎりめしを四つも頂いた。あまりおなが、すいてゐた爲、とても美味いと思つた。

後、友とお母さんと、お母さんの妹さんと女中さんとで、一番奥の間の泥を取り除けにかゝつた幾ら出しても／＼中々減らない。ふと右の隅つこに變なものがあつたので、取り上げてよく見ると、私の靴の左の方である、まあ、こんな所まで運ばれて……一寸意外に思つた。それで水を流す道を作つた。かれこれしてゐるうちに、やつと父が迎へに來てくれた。

「左様なら」をして門を出ようとすると、門はわづか一尺五寸位の高さにしかないのだ。泥がそんなに積み重なつて……。

えた。恐ろしいで聲の方をふりむくひまもなく駈出した。急に背中が寒くなつてぞうとする。怪物にでも追はれるやうな思ひで唯一心に走つた。大分きて後を振りかへつて見ると三米ばかりの濁流が渦をなして道一ぱいにうねつてくる。あゝどうしよう、私はこのまゝ流されるのではないかしらん。走りながら神に祈つた。

家へ着くと家の前の溝も土砂の爲に埋つてゐてわからない。やつとの事で家の中へはいつた。

私達が家にはいるかは知らないうちに國道を大川のやうに水がうねつて通る。家の中は私のひざほし以上に水がはいつてゐる。こんなきつい水だつたら家もろともに流されはしまいか、私の胸はどき／＼するし皆の顔色は眞青である。恐ろしさは増々加はる

母は壘を上げる。私は大切なものを二階へ運ぶ、運びながらも「こはい／＼。」と何遍かつぶやいた。二階の窓から下を見ると水は強い勢で流れて何物をもまきこみさうである。見てゐる中に水嵩はぐん／＼ふえその音は物すこくなつた。すぐ前まで急がしさうだつた國道はもう川だ。もとより往來の人影も電車も自動車もない。その濁流の中にふみ止つてゐて流されさうになつてゐる人々を助けて居られる姿、私には神様のやうに勇ましく思へた。

水は前のラヂオ屋のガラス戸をおそつた。ガラス戸はひどい音を立てゝ倒れる。その中に桶、たらひ、醬油樽、米箱、竹等が流れ出す。皆が「わつ」と驚いて

水禍の思ひ出

本山第一尋常小學校高女 高橋ツギ

母が、「今日はこんなに水が出てゐるから學校を休

ゐた時、あゝその時だお酒屋さんの横の通りをふとんにねたまゝ流されて行く人がある。長い間の病人だらうか。助け出す人がなかつたのだらうか。やがてぐつと一つうねつて國道の濁流へ押し出された。見れば右手を高く上げて振つて居られた。最後のお別れだらうか、それとも救ひを求める手か水音で聲は聞きとれない。「あゝかはいそうに。」母や近所の人々は窓から手を合せて何かお祈りして居られた。私も涙ぐんで合掌した。

十二間道路の方を見ると國道の流れよりもまだ強い角の家につかつては、はねかへり、はねかへつては又ぶつかると。その音は天地をも轟かす様である。私は其の時讀本の「水と風景」の最後の一節を思ひ出した。「水の豪壯は天を打つ怒濤に見るべく、地を震はす瀑に見るべく、岩石を提けてはしる急流に見るべし。」まことにその語の通りである。見てみると自分の身體までも引きこまれさうでふら／＼する。

水はもう床の上へ上つて押入れの物がぶく／＼浮き上る。私のお人形も水に浮いてゐるけれども、もうどうすることも出来ない。もつと水がふえたらその勢はやがて表戸をぶちこはして家もろとも流し出すかも知れない。それとも水が二階まできたら窓から屋根へ出なくてはならぬ。向きたら、と考へるとたまらなくなると。私は家の人々のそばをちよつとでも離れてゐるの、おそろしくなつた。私達は死ぬのではないかしら。あゝあの時の思ひ。

町角の煙草屋の窓は無惨にも破られ、理髪店は裏表素通りといふ状態、兩店の主人が、悲しさうな目で、水の暴威のなす儘に放つて、悄然とつゝ立つてゐるのも哀れな光景だつた。水に逆ひ乍ら、横切つて家へやつと滑り、庭は少し許り浸水してゐたが、あの宇治川附近の光景を思ふ時、何でも無い物だ。級友の中にも随分被害はあるだらう、自己一家の幸福なる氣持、皆どんなにしてゐるだらう、頭の中は早鐘のやうに、ガン／＼と色々の事に思ひ出される。

つ／＼七月五日の大水害について感慨にふければ果でもない、今更乍ら、大自然の威力、如何なる文明の利器を以てしても侵すべからざる猛威……人間の微力さ、その智識の淺さを慨嘆せずには居られない。

山上に苦しい目をして、登りつめ、征服したといふ人間の力は、丁度蠅や蚊が人間の頭につかつて、人間征服と力むに等しいと誰かゝいつてゐたが、確かにさうだ。人間が如何に強くなつたつて、恐らく、自然の威力を屈服し得るのは程遠い事だらう。否、絶対に屈服し得ないだらう。

今や我が國特有の相互扶助の觀念によつて、あらゆる方面よりの差し伸べられたる溫愛の手に、又「復興!!自力更生!!」強き決心を灰めかしつゝ、如何なる苦難も敢て我が敵にあらずと許り、日光に輝く、シャベルの光に汗にまみれた赤銅色の體に強く漲る力があふれてゐる。徒らに水禍の追憶に耽り、おびえて居るべからぬ。涙をふるつて立上るべき時だ。見よ、此の

仕合はせに翌朝から水は次第にひいてきた。やうやく表戸も開けた。まだ膝まで水のある國道の土をふんだ時、私はうれしかつた。おかげで皆助かつたのだ。その後、救援の人々も續々と通られる。色々な食料品も配給される。知合の人々も見舞にきて下さる。勤勞奉仕の作業で、だん／＼復興してきた此の頃もなほしみ／＼とあの當時の恐しさは目の前に残つてゐる。

大水害を見て

縣立工業應化科五年 金本鶴一

物凄い濁流の爲に新開地より引きかへして来たS君と幾分流れが引いたので、實習服を着て、二人で、濁流の中をボチャリ／＼いはせ乍ら、歩いて行く。行き交ふ人々のその悲壯な顔、不安におの／＼女等……痛ましき姿、一つ／＼が水害の大慘禍を物語る物の如くである。浸水した家々がバケツ一つで甲斐々々しく、水をかき出してゐる。何時もなら、あんな事でその水が全部引くかと思ふ所であらうが、今時、そんな事所ではないのだ。

やつと驛へ着いて、幸ひ三ノ宮迄省電が通つてゐると聞き、喜んだ物の、何時迄待たうも、電車は來ない驛員も知らないといふ、その便りなさ、ゲツソリし乍ら線路俣ひに歩く。下を覗けばあらゆる道路は今尙黄色の水が何時引くかも分らぬ様な状態で流れてゐる。皮肉にも目がカン／＼照りに頭をやり付ける。黄河な

大水害の中にも拘らず、濁流を渡つて出征した勇士もあるではないか!!やらう、我等も力強くスクラム組んで、雄々しくやらう。泥池の中にも一點の汚れも見せぬ蓮の花は咲く!!苦難の後には必ず一段と此の神戸を光彩づけるのだ。蓮の花の如くに……自力更生、復興しつかりやらうではないか。

水害の思出

魚崎尋常小學校尋六 吉野剛一

バリ／＼。ものすごい雨の音に、めがさめた。外はもう烈な雨でガラスは今にもこはれさうである。その中に、風も加はつて來た。門口へ出ると向ふの煙草屋のかどのみぞは濁流がながれて上の橋につかへて道路にあふれてゐる。僕は何となしに不安を感じた。神佛に途中の無事を祈つて、元氣よく家を出た。

雨は一向僕たちの心もしらな氣にふりつゝいてゐる。道々雨ははげしくなる。

學校へつくと教室の中でみんなが、わい／＼さわいでゐた。これは僕の上想どほりであつた。僕は本を、机の中へしまつてみんなからはなれて窓越しに外を見てゐた。やがて、勉強がはじまつたが心がちかつた。に雨のことばかり氣にしてゐた。先生がどこかへゆかれたまゝ長い長い間かへつておいでにならなかつた。僕は心の中で若しや……とはげしい水を思ひ出してぞつとした。

これは僕が前の石川縣にゐた時、幾度も／＼すごい

んで、あんな水が、果てどもなく流れてゐるんだらうな……思はず皇軍將士の奮闘を感謝せずには居れない氣になつた。

神戸驛へ着いたが、足はもう動かない位だ。輕度のけいれんが起る。幸棒し乍ら、引き溜り／＼歩いて行く、木山先生が一番フォームに居られたと聞き、會はうと思つたが、會はして呉れない、今一層落膽の氣がして、此處でフラ／＼と參つて仕舞ひさうだ。やつと來た省電に澤山の人にワンサ／＼と押し込められて、どうにか乗れてホツとした。宇治川筋の物凄い慘狀に思はずワーツと乗客の總ての口から發せられる聲、家屋、材木、土砂が道路に山高く連つてゐる。澤山の犠牲者が出たらうに……僕の家なんか無事かしら?思ひ出した様に家の事が心配になつて來る。

東の方は大丈夫だらうと思つたが、だん／＼行くに従つて、激流、被害は大きくなつて行く。此れは大變だ!!幾ら力んで見た所で効果はない。

龍道迄來て一層驚いた。あの「そこう」前の大道を道一杯に水が流れてゐる。阪神は全滅だらうな、僕の家は此れでは駄目だ。早く歸らねば……降車口は電氣が消えて、暗黒の中、驛内を我物顔に水が流れてゐる、ゴツトん思はず四んだ地で、倒れさうになつた。土砂一杯埋まつて、少々蹴つた所でへこまない位、固くなつてゐる、偉大なる水の方、囁然としてしまつた。急ぎ足で東へ向ふ。兵庫附近のやうな悠長なる流れでゐるのではなく、物凄い水が、非常な速力で走り去る。

大水にあつた、その水を思ひ出したのだ。やがてズボンをびつしよりぬらして先生がかへつてこられた。そしてさわいでゐるみんなを靜止させ洪水になつたことを、しらせて下さつた。

しばらくして先生が、「屋上へ一人づゝ上つて、水を見せてやる。」とおつしやつた。みんなはわい／＼さわぎ出した。水を見て來たものは、みんな青い顔をして話しあつてゐる。

僕も、なにかしら胸をおさへられるやうなむなぐるしさを感じてたまらなかつた。その後ひるのお辨當の時、先生は、「これから二三日その辨當をたべなければならぬかも知れないから少ししたべてのこしておきなさい。」と、おつしやつた。僕はお辨當をもつて來てゐない、柳田君に分けてあげた。

お辨當がすんでから、青木君と妹の所へいつた。妹は水のはげしいことはあまりしらないうらしく、笑つてゐた。

中山學級へから堂の椅子をはこんだ。

大分たつて僕等四五人家へかへる道をまはつて見たが、とても行けさうにもなかつたので又學校へかへつて今夜はこゝで、ねることにきめた。

そこへ先生がはいつておいでになつて、「上の方へかへるものつれてかへつてやる。」と、おつしやつたので僕等はこをどりして後にしたがつた。やがて濁流が、目の前にあらはれた。つなにすがつたり手をひいてもらつたりして、渡つた。渡りながらもはい流れを見てゐるので目がくらみさうになつた。とうとう家

にいたがその時は朝出た家とすつかり變り果てた姿であつた。門は容易に足でまたぐことが出来、玄關のガラス戸は中側にたふれてガラスはわれてゐた。

祖母はその時まで神佛に、僕たちの無事をいのつて下さつたのである。かへるとすぐなき祖父の靈前にぬかつた。妹は人々におくつてもらつてすぐかへつて来た。姉は友達の親類の家にとめてもらつて翌夕かへつて来た。今更ながら先生祖父母、父母にかんしやし又共に僕たちをわたして下さつた多くの人々をありがたく思つた。

水禍所感

神戸三中五年 永福 靖

少し減つたかなと思はれた學校北側の溝の水が七月五日又々降り続いた雨でぐんぐん増して来るのが、四階廊下からよく見えた。梅雨時分とは言へ、先月から晴間を見たこともない上に、三四日来土砂降りになつて、四日には保護少年收容所の倒壊がある等何となく不吉な豫感が感ぜられた。

とう／＼やつて来た。「黒雲暗濤」として沛雨盆を覆して来る。」の形容そのまゝに、一段とはげしく窓を打ち、一面に白い幕を垂れた様な雨しぶきと共に、どろ／＼と音を立て、流れる響が俄に加つて、溝が土砂で埋まつたらしく、西方の溪からの水が悉く校内に流れ落ちて来たのだ。この二時間目の時間で授業が中

止となり、生徒は教室に居る様にとの事であつた。水はどう／＼と物凄い響を立て、流れるが、市内の通學者は朝登校の際大して水のための事故もなかつたので皆心配もせず元氣であつた。或者は濁流を冒して近所の家へ手傳ひに行つたり、或者はまだ大したこともないと物凄い濁流を眺めて浩然の氣を養つてゐる。本館西端の地理室から外を見ると、常れば痛い様な雨の中に學校の西北隅の石垣の上から幅十米位の淵がどう／＼と流れて眞白なしぶきを立てゝゐる。植木も何もあつたものぢやない。赤黄色い濁流は根こそぎにして行きさうである。中庭へ流れ入つて今年の卒業生の築造庭園の芝生も殆ど水に没する程である。流れ入る水は堰き止める事も出来さうにない。今はもう水のなすまゝに任せねばならぬ。自然が一度勝てば後は人力の及ぶものでない。一階にも浸水しようとしてゐる。石垣から流れ落ちる水は小規模のナイヤガラ瀑布を思はせ何物をも止めぬ濁流は遠く黄河の決壊を髣髴させ運動場は北支の沼を思はせて皇軍の勞苦がしのばれるのだつた。

家の安否を氣遣かつて歸宅しようとした者も學校から四方に通ずる道路がすべて不通だとの報を持つて歸校して来た。晝近くなるにつれて心配は次第に増したが、いくら家を心配しても不通では歸宅は許されない僕は家は安全だとは思つたが、歸れぬのは閉口した此の雨に食品部のパンも運搬不能なので辨當を持たぬものには食堂から臨時に給食せられたりした。中には

學校でも安心して居られた。中には下級生をよく世話して無事に送つて歸つた者もあり、級友はその美譽を譽め稱へた。

歸宅後やつと配達された新聞によつて未曾有の慘事であつた事を知り新聞に載らない菊藻川でさへあんなにひどいのだから他の方面はどんなであらうかと同情に堪へなかつた、日々新聞に出るニュースは目を覆はしむる慘事ばかりで、殊に家を流し、親を失つた小學兒童の作文等は讀者の涙をそゝるものがある。

新聞には専門家や名士がこの災難の原因を論じてゐられるが、それを見ると、三日間の雨量が四七〇耗、五日だけで二四〇耗と法外に多く、且つ山地が風化等によつて状態が悪くなつてゐて、殆んど不可抗力であつた事や、對水策の不備な點として、山地開墾の弊や暗渠の害等が擧げられてゐる。しかしこんな事をこの水禍になる前から注意してゐて下さつて當局がその對策を怠らず、又神戸の人がこんな經驗を持つてゐて逸早く避難してゐたら、こんなに多數の犠牲者を出さずにすんでゐたらう。けれども今次の災禍は大自然と文化との闘争に於て大自然の大勝に歸した事を明瞭に示すものである。新聞にも行き過ぎた文化の反動と書いてあつた。

山はいつも緑の衣を着て何物にも動ぜぬ様に落ち着いてゐるが、一度怒れば家を倒壊し奪ひ人命をその下に埋めて仕舞ふ。水はおだやかに萬物を培ひその麗しい影を映して人生に潤らしめるものであるが、

これが最後の飯かも知れぬ等と冗談を言ふ者もあるが一同焦慮の中に晝食をすました。

次第に雲が消えると視界も大いに廣まりいつに變らぬ大神戸の黒い瓦が見えたのだ。二時頃水も大分引き芝生も浮出して来た。二本の道路が通じると判つて、歸宅がゆるされた。運動場に出ると膝を没する沼と化してゐて復舊の困難を思はせた、が驚れて後已む、その時からもう復興の意氣に燃えた。

僕は友人と工作隊の浸水に應急の處置をした後學校を出た。附近は案外平靜である。菊藻川の水が幾分引いた様であるが、それでも南岸の家は無衝にも水に浸つたらしく、土砂で辛うじて防いでゐた。左岸の道は常識では考へられさうもない材木等が埋まつてゐる避難の人に交つて歸宅を急ぐ。水にぬれた家財道具を運ぶ人を見ると氣の毒でたまらぬ。しかしどの人も復興の意氣に燃えてゐる様だつた。山の方へ来ると、遠くから見る神戸の中心市街は何もなかつたやうな落着きを見せてゐた。僕の家は幸にも崖崩れもなく無事なのでホツとした。が近所から山崩れによる家屋倒壊惨死や荒田町の水禍等のニュースが幾つも幾つも耳に入る。その夜は職務に忙しい父も歸らず、いつになく淋しい電燈の下で水害第一日の登しい夕飯を戴いた。

六日登校すると、氣の毒にも被害を被つた友が、多數あり、家が流れてしまつた友もあると聞き、無事な僕は自分だけ幸運を獨占した様に思はれて氣が引ける思ひがした。しかし五日登校したものには事故者なく

生によつて復興の基礎作業の過半を成し遂げたものだ。

百年の大計を立て、邁進しつゝある神戸よ。汝の體には不滅の力が溢れてゐる。

この度の水害について

神戸市成徳尋成小學校 澤田成夫

雨は一向やむ様子なく益々ひどくなるばかり。僕等は三階の圖書室で圖書をかいてゐた。朝はお天氣だつたのに、一時間めの終り頃からしつ／＼降りだしたのが二時間目の圖書の時間になつて大雨となつた。「あつ、川の水がこした」と誰かがとんきような聲をあげた。「どこに／＼」と僕達は窓のそばへ走つていつて見た學校前の川をあふれた赤土色の濁水が／＼と渦をまいて理髪館の入口へすさまじい勢で流れこんだおぼさんは板切でその水を防がうとしたが板切一枚ぐらいでは防ぎやうがない。先生が「いゝかげんにしておけ」とおつしやつたので僕達は席についてものとやうに圖書をかき始めた。僕の家は無事だらうか。と僕は心配で／＼で圖書もろく／＼に書けなかつた。とつぜん松井先生が入つて来られた。さうして大橋君に向ひ「大橋君お歸りなさい」と言はれたお父さんか誰かがお迎に來られたのだらう。やがて圖書の時間もおはつて僕等は教室に歸つた。とぼんには「學校から一歩も出るな」と大きく響かれてあつた。お迎への人が

来るまで本を讀で自習した。迎へに来てくださるだらうか。といふ僕の心配。家へかへれるだらうか、といふ僕の心配。家は無事であらうか、といふ僕の心配。この三つが僕の頭をひどくいためつけるのであつた。次々と迎へての人がきて友達はかへる。僕はたいへんうらやましく思つた。お前の人が今来るか、と首を長くして待った。ふと窓の方を見た。僕はびつくりした。學校の前の電信棒が二本いまでもたふれさうになつてゐる。雨は益々はげしく降つて来た。こんなに降つてゐる。どうして歸るのだらうと僕は思つた。奥村君のお父さんが迎へに來られた奥村君の家は僕の家の向ひである。

「つれて歸つて呉れたらいいのになあ」

と僕と松田君が言つた。どうしたのか奥村君の姿が見えない。しばらくたつて奥村君は息はずませてかへつて来た。さうして荷物をカバンにしまひ僕のそばへ出て

「お前と松田とはやくカバンに荷物をしまつておいで」

と言つた。僕はびつくりして思はず

「なんで」

と聞きかへした「なんでもいゝ早く」とせき立てるの二人は急いでカバンに荷物をしまつて廊下へ出ると奥村君は

「先生がかへれとおつしやつた。」

と言つたやがて僕等は玄關へ行つた、松井先生が「は

なれずについて行けよ」とおつしやつた。僕は奥村君の情に深く感謝した。しかし僕はまだ安心出来なかつた僕の家は無事だらうか、奥村君のお父さんに聞かうと思つたがはづかしくて聞けなかつた奥村君も心配してゐるらしくお父さんに

「僕の家などないもなかつた澤田とこも」

「あゝ無事だ」

と奥村君のお父さんがいはれた。その時の僕の嬉しさと陸軍大將になつたよりも嬉しかつた。

大水のこと

神戸市小野尋常小學校二年 大野政子

このあひだの大雨のときわたくしが、學校のまどからみてゐますと山のつちと、水が、どんなながれてきます。わたくしは水をみてこわくなりました。だれかはやく、むかへにきてくれないと、かへれないとしんばいしてゐると、おねえちゃんが出てきて、おんぶしてもらつて、かへりました。いへのまへわまだきかない水がながれてゐました。おかあさんにいろ／＼のおはなしをききました。たくさんいへや人がながれたそうです。あの水をみてから雨がふるとこわいきがします

水害の思ひ出

親和高等女學校五年 青竹磨美子

七月五日、思ひ出して恐ろしい水害の當日！そ

の日は丁度四五日前から降り続いた雨が二層激しく入の心を脅かす様に激しく降つて居ました。殊に其の晩は馬穴をうづぶけにしたやうな雨でした。其日の午前四時頃私は何となく騒がしい氣配に晩の夢を破られて雨戸を開けて見ました。其あけた瞬間！私は驚きの餘り腰が／＼して立つて居る事が出来ませんでした。湊川高女の前の道が地割れがして觀音寺の方から流れて来る濁流が其處で渦を巻いて流れて居ます。その前の家は半分潰れて流れて終つて居た。私は其餘りの恐ろしさに歩かうにも足が前に出ず、茫然として見つめて居ました。でも漸く門を開けて見に行かれる父の聲音に我に返り腹に雷更へて下に降りました。母も心配さうな顔をして居られました。私は母の心配さうな顔を見ると不思議に勇氣が出て、「大丈夫よ、水なんか来て堪りますか、私のとこ高くなつてゐるもの」と俄に落着いて終ひました。

外に出たり、入つたり、何をするでもなく／＼として居る間に登校の時間が來ました。考査を幾日かの後に控へた事故、私は母の止めるのを振り切つて出ましたがバス道に出来るなんて思ひも寄らぬ冒險でした。然し私は無理に出た手前騒しいのを堪へて引返ししました。私の顔を見て急にホツとされた母を見て私は歸つて來て宜かつたと何だか涙が出さうになりました。ほんとに歸つてよかつたのでした。其から暫くして父も兄も出て行かれました。私はこんな日に女ばかりでは不安だし、居て欲しいと思ひましたが仕方がありません

ん。でも總べて自分の家は安全だと信じて居たので割合に落着いて居ました。外の騒ぎを外に……

今考へると其時つと早く道具を二階に上げればよかつたのに神ならぬ身故、知らず筈が無く、香氣にも母は明日は法要と云ふので種々の器を列べて一つづつ拭いて居られますし、私は考査の所を檢べて居ました十時頃どんなになつたか知らず！と一歩門を出た途端それこそ腰が抜ける程驚きました。水は恐ろしい勢と速さで家の前に渦を巻いて居るのです。そして青年團の人は私を見ると大聲で「家に居つては不可ない。早く福住校へ避難して下さい」と叫んで居られます。私は轉ぶ様に家に入り、一生懸命母を急ぎ立てました。落着いた母は人の騒ぎもよそに「大事な物だけ二階に上げなければ」と云つて持つて行かれるのです。私は地圖太踏んで、早く／＼と急ぎ立てましたけれど一向に反應がありません。仕方が無くて私も手傳ひ始めました

丁度二回目を持つて上り、下に下りて來た瞬間！

物凄いやと共に臺所の硝子戸が一度に外れて、水がざあ／＼と壁の上を流れて來ました。今まで表ばかり氣にして裏の庭に水が入つて來たのを知らなかつたのです。恐ろしい勢でちつと立つて居るとかささるやうになるのです。こんなになれば母も吃驚して私と共に必死で出ようとしたが前後とからは入つて來る水で容易な事ではありませんでした。やつとの事で逃れ出て、さて福住校に行かうとすると、その間にある道はもう到底通る事は出来ません。兩方の道から流れて

つて居る怪我人を出して運んで行く等、さながらの生地獄のやうでした。自今が無事に助かつたと云ふ事が判然として來れば来る程、氣にかゝるは父の事、兄の事でした。そして其の不安が絶頂に達した頃父も兄も歸つて來られました。私は家は埋れ道具も何も流れても怪我もなく斯うして家中の者が無事に集る事が出来れば之に越す喜びは無いと痛感しました。

水害の印象

本山第二尋常小學校六年 高井 進

七月二日以来降りつゞいた雨は、遂に本山住吉の村境を流れる住吉川を狂亂させた。どう／＼と流れて来る濁流のあの音、あの土臭い香はいつまでも頭に浮んで來る。

その日僕はいつもの通り家を出た。この時が我が家の見をさめてあつたのだ。三木君とつれだつて學校の前の大道へ出た時、急に半鐘がなり出した。その瞬間胸がどきつとした。「住吉川が切れたのか。」しかしそれは八幡池の所だとわかつて不安は消えた。しかし胸の奥には何かしら無氣味の感じがあつた。學校はいつもの通りだつた。雨はひつきりなしに降つて來る。一時間目の始まるサイレンがなつた。しかし先生は教室へこられなかつた。其の中に教室は皆の話聲で一ぱいになつた。それから十分程たつて、ずぶぬれの先生がはいつてこられた。先生は「丸丸トンネルの方は水

が「ばいだ」とおつしやつた。皆は顔を見合せた。先生は再び出てゆかれた。皆はそれ／＼自習をしてゐる。突然便所から出て来た浦川君が「木村屋の角は水で「ばいだ」といつた。皆はそれとばかり窓によつて顔をひつ／＼けながらのぞいて居る僕ものぞいて見た。何たる事だらう、ポストがだん／＼低くなつて行くではないか、それは流れて来る土や砂が、だん／＼ポストを埋めてゐるのだつた。半島人が三人、或は五六人、一團となつて、上手の方へ走つて行つた。教室へ全部はいつた。その時安田先生が入つてこられた。「久原さんの南の堤が飛んで街道方面は危い、安心してかへれるのは野寄北西の方だけだ」と。この言葉を聞いて僕等野寄の者はどつと激躍を上げた。胸にこもつてゐた不安は一瞬飛散つて、新しい喜びの心が「ばい」となつた。しかしこの喜びはたゞこの時だけであつた。遂に住吉川は狂つて野寄及び田中の兩部落を一つのみにせんと牙をむいてやつて来た。學校の一階にどう／＼と流れこみ、窓といふ窓のガラスを打破つて流れだした。この光景こそ此の世の地獄だらう。木や石を流して來ては、コンクリートづくりの柱にぶつ／＼かつて無氣味な音を立てる、學校の前の道は、おひつ、釜、ざる、が滑るやうに流れてゆく。

地すべりの跡が生々しく見える。その中に夜のとりが下りた。まだ水は流れてゐる。六時半ごろ、お父さんが迎へに來て下さつた。話をきくと家は大部分埋まつたといふ事である。僕は何も言へなかつた。齒を食ひしづつて涙をのんだ。その夜宗官氏宅に無氣味の一夜を明した。

編輯を終へて

坂田 忠雄

神戸市及び阪神沿線を襲つて、數知れぬ人命を奪ひ、金殿玉樓を誇つた富豪邸を一瞬の中に修羅の街と化してしまつたこの大水災も時を経て見れば人々の追憶の中に甦へてくる所の昭和十三年七月五日の出来事にすぎなくなつてしまふであらう。

こゝに於て私達は校長の御勤めにより何時何時までも最も正しくこの水害の慘禍をしるし残さうと考へ住吉川を中心に綿密な實地調査を行つて正確な記事の蒐集に努めるとともに他方光澤研究會諸君の盡力により生々しい惨害の寫眞も見事に完成して、こゝに水害記念帳編纂の運びとなつたのであります。皆様がかの烈しい大水害の慘狀をまざま／＼と想ひおこし、水禍の如何に恐ろしいかを眞に認識する一つの助けともなれば編者の喜びこれに過ぎるものはないのであります。

尙末筆ながら作文其他御送付下さいました各學校當局に對し厚く御禮申し上げますとともに不馴れの爲

多々不備の點のありますことをこゝに心から御詫び申し上げます終に、本記念帳の作成に力を盡されたのは（順序不同）

一、寫眞の撮影

文三甲 奥村 喜弘 理三甲 高橋 靖彦
文三甲 逸見 嘉彦 理三乙 品川 清治
文三甲 西村 雅貴 文三乙 村尾 明敏
文一甲 奥村 吉郎

二、記事の蒐集

文三乙 關 暢 四 文三甲 松本 二郎
文三乙 高木 保昌 文二甲 藤原 肇
文二乙 奥井 達夫 理二乙 萬山 拙郎
文一甲 大崎 國夫 文三乙 坂田 忠雄

三、編輯

文三乙 關 暢 四 文三甲 杉本 二郎
文三乙 坂田 忠雄

昭和十三年十二月十五日印刷
昭和十三年十二月二十日納本

兵庫縣武庫郡本山村岡本
甲南高等學校内
編輯人 發行入 保々隆 矣
印刷人 藤井孝三
印刷所 藤井印刷所
發行所 甲南高等學校